平成25年6月1日発行第10巻第4号通巻83号
成年向け雑誌
二次元ドリームマガジン
2D DREAM MAGAZINE
cover illustration by 冷泉
立ち読み版
カラーピンナップ
うるし原智志
冷泉
連載&読み切り小説
対魔忍アサギ3
Kyphosus×竜胆×Anime LiLiTH
姫隷調教師外伝
水坂早希×田宮秋人
筑摩十幸×助三郎
大熊狸喜×池田靖宏
木森山水道×牡丹
愛枝直×はっとりまさき
斐芝嘉和×水月あるみ
えっちマンガ
&4コママンガ
ぱふぇ
おおたたけし
助三郎
天海雪乃
からすま弐式
おぶい
嘉納あいら
今号の特集
アナル責め
誌上通販先行
KTC特製
スポーツタオル発売決定！
表紙&ピンナップテレホンカード
応募者全員サービス
vol.70
2013
06
DIGITAL EDITION
デジタル版

今号特集 SPECIAL A THEME THIS NUMBER

アナル責め特集

小説／空蝉（うつせみ） 挿絵／冷泉（れいぜい）

STORY

我が身よりも市民の救助を優先した結果、囚われてしまったエレナ。異形の手に落ち、触手群に嬲られ続ける魔法少女の運命は——。

ずる……ぎゅちっ、ぎゅちちっ！
触手は積年の恨みを晴らそうとするみたいに、きつく四肢に巻きついてくる。
乳房や内腿を這いずられるだけでも心地が悪い。最初は、確かにそう思っていたのに。
ぐち……っ、ぐちぐちゅぐちゅぅっ！
「ひっ、ぁ！　あっ、やぁあっ。お尻っもうやあぁぁぁっ、もぉ入らないぃいいっ！」
捕縛当初から執拗に弄られ続けた肛門が、枝分かれした無数の肉触手にほじくられ、腸液をこぼしながら収縮した。
囚われる前まで生娘だった膣には、肉厚の触手が二本。深々突き入って居座るその穴からも、肛門の蠢動に合わせて蜜が吹き漏れる。
「うぅ……こんっ、なの絶対に嘘ぉ……っ」
嫌悪感に胸裂かれ、意識すればするほど。尻の穴は引き攣れて蠢き、肉触手を奥へ奥へと受け容れてしまう。摩擦により生じる喜悦のしびれとともに、尻が浸るほどの腸液を吐きこぼしていった。
「んぐぅっ！　ぅあ、やっあああぁぐっ!?」
腸の奥深くにまで突き入った数多の突端が、栄養源である大便を探し、こぞって蠢く。
（や、ぁ……う[illegible]ち食べられちゃう、なんて……嫌なのにっ……どう、してぇぇっ）
心はこんなにも拒絶しているのに。攪拌された腸が汁にじませて収縮し、異形の動きを助けてすらいる状況に、絶望する。
にゅぢゅっ、ぐちぐちゅぐちゅううぅっ！
「あ、っひィ……っ！　だめぇぇっ！　もぉ嫌っ、お尻でイクのやあぁあああああッ！」
ついに便を見つけた異形の一部が、狭い腸内で競って殺到。強かに腸壁を擦り扱いた。
屈辱的な振動による衝撃さえ、肉欲に浸った心身は甘受する。
「イッひゃあああ！　ぅんひチューチューされれっ、イッふうううぅぅぅぅぅうっ!!」
ぶしゅっ！　びゅぷっびゅびゅ——っ！
また、頭の芯まで真っ白になる。ただただ気持ちいい——素直に快楽を受け容れた直後。ぶり返してきた絶頂の大波にさらわれて、盛大に潮と腸液を撒き散らした。
二度と覚めぬ淫夢の淵へ。魔法少女は堕ちてゆく——。

小説 NOVEL／水坂早希（みずさかさき）
挿絵 ILLUSTRATION／田宮秋人（たみやあきと）
姫隷調教師
～あと二十八日～
短編
電子書籍版も配信中!
姫隷調教師
好評発売中!
水坂早希、渾身の書き下ろし!
調教師リセーラを襲う
淫虐なアナル責め!

～あと二十八日～

「やはり何度試しても、この首枷は外せませんな」
忌々しげにかぶりを振った紳士二人が、左右から伸ばしていた手を、椅子に座っているリセーラの首に巻かれた鉄の輪から離した。
その手には蒼流（そうりゅう）――『気』の青い炎が灯っている。
リセーラは大国フリジア屈指の姫隷（ひれい）調教師だった。
姫隷とは、その麗しさが所有者の力を示す証ともなっている、最高級の娼婦のことである。
彼女らは、貴族からも恭しく扱ってもらえる。
だが、ひとたび主人の命令があれば、不特定多数に性奉仕をして、主の格を示さなくてはならない。
つまり姫隷は、貴族の装飾品であり性玩具なのだ。
その姫隷を調教して育て上げるのを生業（なりわい）としていたリセーラだったが、イルード伯爵の策略にはまり、今は伯爵の姫隷として淫惨な日々を送っている。
リセーラが姫隷契約を結ばされ、蒼流と筋力を封じる首枷をつけられてから、丸五日たった今朝。
リセーラの首枷を内密に外そうと、彼女の支持者である紳士四人が、伯爵の屋敷を訪問した。
強力な蒼流を備えた、姫隷調教師ブリュノと騎士ガイエス。オルバルト子爵。大富豪カロル。いずれも名高い紳士四人を前にしては、いかにイルード伯爵とて、無下に門を閉ざすわけにはいかない。
そうして、個室でリセーラとの面会を許された四人だったが、恐怖にも近い不安に襲われていた。
淫らな肉人形に堕ちたリセーラが、伯爵にどんな辱めを受け、幾十もの絶頂をどう披露したのかは、もはや事細かく宮廷中の噂になっている。
ブリュノたちにとって、二十以上も年下のリセーラは、鮮烈な美しさと清々しい心をもつ友人というだけでなく、愛娘のような存在でもあるのだ。
そんな大切な女性が、男肉と精液で散々に汚され、心まで壊されてしまった姿を見るのは怖かった。
だが、寝室の椅子に座ったまま彼らを迎えたリセーラは、――以前と変わらず美しかった。
紫色の艶を幻想的に纏った、腰まで真っ直ぐ流れ落ちる黒髪。ややつり上がった目尻の内側に佇む、月夜に舞う黒蝶のように蠱惑的な藍紫の大きな瞳。
宮廷彫刻家ですら再現できない完璧な凹凸を描いているのは、その美貌だけではない。
鎖の肩紐で吊られた白い胸当てに包まれた双乳は、ほどよい大きさと芸術的な稜線で膨らんでおり、黒いコルセットが巻かれた腰も見事にくびれている。
椅子の脚にふわりと広がる純白のロングドレスに隠された臀部は、平均的な大きさだが、腰が細いお陰で、より女性的に強調されて見える。
細くたおやかそうな両手には、二の腕まである白い薄手袋をつけており、黒いベルトで締められた先の手袋口が大きく膨らんでいる。
スカートの内側に咲いたペチコートから伸びる小さな足には、白いハイヒールを履いていた。
その雅やかな美しさだけでも息を呑むほどだが、顔以外の肌を決して人前に晒さなかったリセーラが、両肩や胸元まで露わになったドレスを着ている事実が、なおさらブリュノたちを動揺させた。
先ほど、首枷を外そうと試みたときなど、さらに官能的だった。
白い胸当ての寸法が大きいため、椅子に座ったリセーラの間近から見下ろすと、その丸く膨らんだ双乳どころか、桜色の乳先まで垣間見えてしまう。
フリジア屈指の姫隷調教師と騎士が、首枷に二人がかりで猛烈な蒼流を注ぎこんでいるため、その波動が全身の神経にまで流入しているのだろう。
桜色の乳首が乳輪まで碗状に膨らみ勃って汗ばみ、雨に打たれる果実のようにビクビクと震えている。
その性感と羞恥に戸惑っているのだろう。
普段は顔色一つ変えないリセーラが、氷の美貌を蕩けさせて、もじもじと身じろぎを始める。
白い両手袋をスカートの膝の上でキュッと握り締め、耳まで紅潮した美貌を恥ずかしそうにうつむかせたまま、藍紫の瞳だけを右往左往させている。
下を見たときに、発情しきって脈動する乳首を直視してしまい、怯えたように視線を上向ける。すると、信頼する紳士たちと目が合い、お漏らしが見つかった幼女のように、さらに頬を赤くしてしまう。
それでも、はしたない乳首の惨状を見るのが怖いのか、とろとろに濡れた藍紫の瞳を上目遣いにして四人を見つめたまま、リセーラは固まってしまった。
ブリュノたちは、愛娘に性的な悪戯をしているような背徳感に襲われて、押し黙ってしまう。
体内を荒れ狂う蒼流で、とうとう達したのだろう。ついには、お尻を叩かれているように肢体をビクンビクンとはね上げ、艶めかしく濡れた唇から「あうンッ」「ひゃうンッ」と声を漏らし始めてしまう。
ブリュノたちが諦めたのは、これ以上続けていると、先にこちらの理性が壊れそうだったからだ。
美と淫が完璧に調和した、まさに最高級の姫隷。そんな嫌な感慨が湧き、四人は自らを恥じた。
首枷が外せないことは、予想していたのだろう。落胆すら見せず、リセーラが瞼を閉じた。
「そうか。本日はこれまでにしておこう。イルード伯爵に知れれば、お前たちの立場も悪くなろう」
普段通りの芝居がかった男口調のアルトで告げたリセーラが、ゆっくりと瞼を開く。
そこには、すでに微塵も揺らいでいない、力に満ちた藍紫の瞳があった。十九歳の少女が発しているとは思えない凛とした空気が、部屋中に張り詰める。
ブリュノたちは、リセーラの不可侵なまでの鮮烈さが未だ健在なことがわかり、心から安堵した。

※

著者近況 『姫隷調教師』の奥付を見てみたら、なんと十年前の作品になるんですね。歳を取るはずです。久し振りにリセーラを書けて楽しかったです。

なんとか体裁を整えてみせたリセーラだったが、内心では恥ずかしさで消え入りそうだった。

今朝は後ろ手に縛られたまま浴室へ連れこまれ、伯爵の手によって散々に弄ばれた。

恥毛を永久脱毛する呪術のかかった薬液を陰唇に塗られて、猛烈な痒みで悶えさせた肢体中を泡だらけにされて洗われ、さらに陰唇と肛門に媚薬入りの浣腸液まで注がれて、極限まで焦らされた。

リセーラはたまらず、立ったまま排泄させられながらも、伯爵に口づけして舌を絡め合わせて愛撫を懇願したが、絶頂させては貰えなかった。

次の朝食を、無毛になった陰唇で伯爵の男根に座りながら取らされると、もうリセーラは我を忘れて腰を振り乱し、伯爵の家来たちに笑われながらも、子宮が満腹になるほど精液を貪りすすってしまった。

信頼する紳士たちが、自らの立場も顧みずに首枷を外しに訪れてくれたのは、涙が出るほど嬉しい。

だが、肌を晒すのが極端に苦手なリセーラにとって、両肩から胸元まで露わになったドレス姿で彼らと面会するのは、とてつもなく恥ずかしかった。

蒼流を注がれたときは、さらに羞恥の極みだった。

猛烈な波動が脊椎を貫いて、全身の性感帯に火花が散り、胸先が一瞬でビクビクと勃起してしまう。

はしたなく痙攣する乳首を見られているのは自覚しているが、恥部を隠すのは伯爵に禁じられているため、両手を膝の上で握って堪えるしかない。

さらには、子宮が伯爵の精液でうがいをするように、ぐちゅぐちゅと収縮を始め、リセーラはなす術もなく、連続絶頂の艶声と艶姿まで晒してしまった。

彼らが諦めるのがもう少し遅かったら、リセーラは盛大なお漏らしまで披露していただろう。

四人が帰るのを見てほっとしたリセーラだったが、先にイルード伯爵とリーゼロッテが入室してきた。

子種で膨らむ子宮が、恐怖でグチュンと跳ねる。

「おや、もう用件はお済みですかな？　では、お帰りになる前に、私の姫隷の自慢をさせてください。さあリセーラ、彼ら四人に最上級の礼をしろ」

伯爵の命令に、リセーラと四人が動揺した。

最上級の礼とは、上体を折り曲げて尻房を割り広げ、乳房のみならず伸ばし広げた陰唇と肛門まで相手へ捧げ見せる、姫隷特有の羞恥姿勢のことだ。

伯爵が、さらにとんでもない宣言を付け加える。

「ちなみに、本日から解禁する『リセーラ専用の最上級の礼』は、相手の陰茎と精を肛門で受け入れてもてなして、初めて成立するものとします。本来、他人の姫隷に許可なく触れるのは御法度ですが、リセーラの肛門のみは万人が自由に嬲って良い決まりにしますのでご安心を」

伯爵本来の姫隷リーゼロッテが、毛先のみ巻かれた長い金髪を揺らし、鳶色の瞳を嗜虐そうに細める。

「聞きました？　リセーラ様。今日からは、お尻の穴で挨拶させられるんですよ？　宮殿の大回廊を歩かせたら、何十人もの貴族に精液浣腸をされて、一周もしないうちに排泄しちゃうでしょうね」

リセーラは、脳天から子宮まで戦慄に貫かれた。

今日からは下衆な貴族に見つかるたびに、握手のかわりに肛肉をほぐし握られ、直腸壷で子種を絞り取らされ、十歩と進まない内に二本目の挨拶をさせられる、という生活をしなくてはならないのだ。

なにより今から、信頼する彼ら四人にまで肛門性交をさせられてしまうのである。

真っ赤な顔で固まってしまったリセーラだったが、

「イルード伯爵のおもてなしの心、誠に感謝します。ですが我らは急用があるゆえ、失礼させてくだされ」

彼らの中で最も発言力のある大富豪カロルが、動揺を見せながらも助け船を出してくれた。

だが伯爵が、彼らを大人しく帰すはずがない。

伯爵が懐から出した鈴を鳴らすと、白い仮面と腰巻きだけをつけた半裸の巨漢、――『肉男』と呼ばれる姫隷調教用肉道具が三人も部屋に入ってきた。

びくりと立ち上がったリセーラは、逃げようと背を向けたが、肉男たちに取り押さえられてしまった。

リセーラは首枷のせいで、必要最低限の筋力しか使えないため、肉男の六本の手で等身大人形のようにたやすく羞恥姿勢を取らされてしまう。

「や、やめろ！　か、彼らには見られたくないっ」

細い両足首と両膝を握り持たれて、ぴんと伸ばされた美脚を肩幅以上に開脚させられ、ドレスのお尻を四人の紳士たちへ向けさせられる。

上体を押し倒されると、鎖で吊られた胸当てが裏返しになって双乳がふるんとこぼれ落ちて、恥ずかしく勃起した乳輪と乳首が宙に桜色の曲線を描く。

さらに前屈を強いられると、スカートの後ろが尻房に押されて仕込まれていたスリットが開き、純白のスカートとペチコートの布花が、尻肌の上を舞台の幕のように左右へ割れ滑っていった。

白いハイヒールから太腿半ばまで覆う純白のストッキングが、下から扇情的に露わになっていく。

ついに裸の尻房まで剥き出しになると、リセーラは「くうぅッ」と羞恥で歯を鳴らした。

四人の紳士たちが、同時に唾を呑みこむ。

朝日に照らされたリセーラの桃尻は、とけ忘れた雪のように白い肌をした可憐なサイズだったが、腰が細いために、むっちりと柔肉が乗って見えた。

「面白い意匠でしょう？　リセーラ様がいつでも肛門で挨拶できるよう、シャゼス兄弟に作らせた特注ドレスなんですよ。――さあ、どうですか。リセーラ様の初々しい陰唇と、下品なほど大きな肛門の対比は。ぞくぞくするほど、そそる光景でしょう？」

リーゼロッテの言葉通り、尻丘の中心にあるリセーラの無毛になった陰唇は、薄桃色の肉花が二重だけ咲き綻んだ、初々しい造りをしている。

著者近刊　『魔術師とアルカナの化身1、2』『魔法少女沙枝1、2』『姫隷の檻』『魔法少女アイ』『姫隷調教師』『学園の檻　転任女教師佐由理』　好評発売中！

逃走ゲームで敗れた二人は
さらに屈辱的なゲームを強いられる！
猟辱島（りょうじょくとう）
スレイブハンティング
最終話 孕ませダービー
小説 NOVEL／大熊狸喜（おおくまたぬき）
挿絵 ILLUSTRATION／池田靖宏（いけだやすひろ）

逃走ゲームに敗北した翌朝、火憐と霧華は再び、地下施設から孤島の大地へと上げられていた。

数時間に渡って強姦絶頂させられた二人は、疲労の蓄積もあって、朝日が異様に眩しく見える。丘陵地帯とは別な、細かい砂利の広大な平地に設置された、新たなスタート地点。

発信器付きの首輪を巻かれた二人のエモノは、首輪から伸びる鎖によって、金属製のポールに繋がれていた。

ポールの上端には、小型のモニターが設置。

火憐はポニーテールの髪留め、霧華はハチマキだけを残した、ほぼ完全な裸体に剥かれている。

両腕は、掌から上腕までを分厚い革手袋で覆われており、ものを掴むなどはできない。更に、手首の部分で首輪の後ろにロックされていた。

裸身も双乳も隠せず、脇の下まで晒した恥ずかしい拘束姿。崩し正座で身を寄せあい、少しでも肢体を隠す努力以外、何もできなかった。

くノ一の巨乳と格闘少女の豊乳が、プニりと柔らかく寄せあって、張りを魅せる。

自分たちの有り様はきっと今も、カメラによって富豪たちに視姦されているだろう。

登場人物紹介

久遠寺火憐

代々続く忍者の家系「久遠寺流忍術」の第十七代頭目。優れた才能とカリスマ性を持ち、多方面で活躍している。

轟 霧華

幼い頃から格闘技を独学で習得し、公式・非公式を問わず、格闘試合で一度も負けたことのない天才女子校生。

黒の十一号

謎の組織の一員で、「The Fox Hunt」のゲームマスターを務める仮面の男。丁寧な口調で残酷なゲームの説明を楽しそうにする。

前号までのあらすじ

謎の組織に誘拐され、強姦魔がひしめく孤島での逃走ゲームに参加させられた火憐と霧華。二人は優れた格闘術で追っ手に抵抗するが、健闘も虚しく捕まってしまう。そして無残にも処女を散らされてしまうのだった。

「今度は、何を…？」

「へ、変なゲームだったら、今度こそっ、男たちをノしてやりましょうっ！」

警戒する火憐に対し、霧華は強気な言葉で恐怖心を誤魔化している。

昨夜、敗北レイプの後、二人は地下施設の一室で黒服の男たちに、精液まみれの身体を洗われた。

洗浄といっても温かい湯や石けんなどではなく、つま先立ちに両手で吊るされ、ホースでの水責め。

「きゃあっ——お、おやめなさっ——あぷっ！」

爆乳や下腹部、美顔などを強い水流で叩かれる火憐。対して霧華も、愛顔やヒップ、股間の割れ目などを放水で何度も打たれた。

「わぷっ——ごほっ、このっ——ひゃあぁっ！」

まるで、これから始末される屠所の豚のような扱い。裸身を隠す事もできずに水を浴びせられる乙女たちの心が、惨めにヘシ折られてゆく。

頬を取られて唇を開かされると、口内に放水をされて洗浄。

更に両脚を開脚させられながら、指で拡げられた膣内や腸内までをも、ここだけは逆に熱めの湯で、視姦撮影されながら洗い流され続ける。

強くて高温な水圧で膣内を圧迫されると、それだけで女体は、教えられたばかりの強姦肉悦を思い出させられてしまった。

「ひぃいっ——や、ゃめっ、中やめてよぉぉっ！」

肉体官能に戸惑い羞恥し、力なく抵抗をする二人の裸女。ドプドプと終わらない強い湯の圧に、膣壁は痺れながらも淫らな蜜を溢れさせる。

「おいおい、せっかく洗ってやってるのに、また濡らしてやがるぜ」

いつ果てるとも知れない熱水圧に、そんな惨めな辱めを受けている事実に、抵抗する理性が押しつぶされてゆく。羞恥から逃れたい若い心が、女体の本能に呑まれるように、逃げ場を求める。

「いっ、いやっ——こんなのでっ、ィっ——っ！」

膣孔と肛門を湯責めされて、心臓がトクトクと早鐘を打つ。吐息が湿り、肉体を責める温水以外の、全ての感覚が消失させられてゆく。

「みっ見ないでよっ——見るにゃぁぁっ——っ！」

収縮する女性器に突き刺さる男たちの視線。

そんな恥辱に底上げされながら、全裸の乙女たちは望まない絶頂へと突き上げられてしまった。

「ぁはぅっ——ゃめてっ、やめへえぇぇぇっ！」

瞬間的に背筋が反れて、二つの女孔が、責めくる湯をキュムムっと絞る。

肉棒と比して湯はあまりにも抵抗がなく、膣壁は更なる圧を求めて、飢餓感で強く締めつけ。

開いて魅せる粘膜と、収縮して閉じる女孔。

それでも女性器が、強い湯で責められ続ける。

物足りない絶頂と強い飢餓感という相反する肉欲で、肉体も精神も狂わされてゆく。

「やっ、やめてへぇぇぇっ——っまたイきまぅっ——イってもラめなのっ——あっあひっ——っもっとイかせてへぇぇぇぇっ！」

連続絶頂と底なしの飢餓感。苦悶するくノ一の隣では、格闘少女も同様の悦楽地獄に悩乱していた。

「イっちゃうっ——っあっ——またイっ——もふヤメへぇっ——あふんっ——イくの止まらっ——またバカにっ——バカはずかひぃいぃいぃいぃっ！」

両手で吊るされながら開脚をさせられ、恥蜜に濡れる裸尻と秘処。湯と汗を纏った双乳を痙攣させて絶頂媚顔を晒しながら、蕩けた瞳の乙女たち。

数時間に渡る、放水による恥ずかしい連続絶頂責め。その様子は、ニヤニヤと楽しそうに放水を続ける黒服たちによって、カメラに収められ続けた。

肢体にこびりついた強姦魔たちのスペルマが洗い

流された後、脱力した二人はベッドに拘束。
四種類の注射を打たれたところで、深い眠りに沈められていった――。
そうして朝が来て、くノ一である火憐は、自身の状態から薬物を推察している。
(昨夜の薬、四種類のうち……二種類はわかったわ)
性感に狂わされた肉体なのに、すぐに眠りに落ちた。一つは強制的な睡眠薬だ。
もう一つは、肉体の疲弊が回復している事から、栄養剤だとわかる。
(孤島なんて大がかりな施設でのゲーム……まだ私たち、エモノに死なれては困るでしょうから…！)
つまり、一日分のエネルギーは十分にある。
(でも……あとの二種類がわからない)
どのみちロクでもない薬だろう、という以外、推察する材料がないのだ。
そして、もう一つ、違和感がある。
耳の奥が、なんとなくジンジンと響くのだ。
まるで、一晩中ヘッドホンをされて、何かの音を聞かされていたような、極々小さな耳鳴り。
霧華は気づいていないようだ。鍛えられたくノ一である火憐だからこそ気づいた感覚だし、つまりその程度の事でもあった。
次第に収まりつつある耳鳴り。しかし。
(眠らされている間に……何かされたのかしら？)
黒髪の乙女がそんな考察をしていたら、イヤミなほど明るい男の声が、スピーカーから響いてきた。
『紳士淑女の皆様、お早うございます。爽やかな朝をお迎えの事と存じ上げます』
「あっ、黒の十一号だっ！」
ショートカットの格闘女学生が、スピーカーに向かって強く睨みつける。
『さて皆様もご存じの通り、昨日のゲーム「The Fox Hunt」に於いて、火憐嬢と霧華嬢は完全敗北。おおぉ、なんと数十人のハンターたちに連続強姦をされてしまい、更には中出しまでされてしまいました。くっくっく…』
「うぅ……！」
芝居がかった、あからさまな嘲笑。司会者の言葉に、富豪たちからも静かな嘲りの笑いが聞こえた。
火憐たちは裸身を隠す事もできずに、屈辱の歯がみをするしかできない。
『敗者となった二人の身体は、我々「ブラック・メーカー」の所有物となり、本日無事、皆様への新たなゲームを開始する運びとなりました。本日から開催される新たなハンターゲーム、その名は「孕ませダービー」～っ！』
「はっ、孕ませ……っ⁉」
盛大なファンファーレと一緒に聞かされた二人は、ハモって驚愕していた。名前だけで、昨夜のような猟辱ゲームである事は明白。
なのに、しかも「孕ませる」と言いきっている。
犯されて妊娠――。
そんな恐怖が頭を過った。
思わず、更に身を守るように寄り添う二人。
遠くの背後、五十メートルほど離れた地面に、鉄格子のコンテナが、エレベーターでせり上がる。
地下施設から持ち上げられた鉄の牢屋には、昨日とは違う八人の全裸男たちが、息荒く蠢いていた。
その様子を、二人はモニターで確認。
身長も体躯もマチマチな男たち。しかし共通しているのは、全員、目を疑うほどの醜男だった。
火憐もつい、失礼な事を思ってしまう。
(あ、あんな顔の…人が……)
目つきが陰険で、異様に目が離れていたり歯がすきっ歯だったり鼻が曲がっていたり、しかも造形だけでなく、雰囲気もドコか気持ちが悪い。
女性であれば誰でも、生理的に、本能的に嫌悪してしまうほどの醜男たち。
年上のくノ一ですら困惑するのだ。年頃の霧華など、つい本音が口を突いて出てしまう。
「うわっ、すっごいブサイクっ！」
男たちの首には、チェーンで木製の札が下げられている。札にはそれぞれ「A」「B」「O」「AB」と書かれていて、それが二人ずつで、計八人。
(血液型、かしら……どんな意味が…？)
その意味は、くノ一乙女でも推測できなかった。
黒の十一号から、ゲームの説明がされる。
『ルールは簡単至極。火憐嬢と霧華嬢がポールから解放されると同時に、ハンターたちもスタート。追いすがるハンターたちから、たったの一時間逃げきれば二人の勝利。捕まれば敗北。ただそれだけでございます』
(つまり、制限時間やハンターの人数が違うだけで、昨日のゲームとほとんど一緒…！)
そんな火憐の思考を越える驚愕の事実が、男の口から告げられた。
『ただし、二人の身体には昨夜、特殊な薬物が注入されております。その薬物とは、我が組織が開発した最新商品「タイプα」と「超速妊娠促進薬」！』
判明した、残り二種類の薬物。その名前に、女の本能が恐怖の予感で震えた。
「タイプ…α……？」
「ち、超速妊娠って…？」
二人の心の怯えを読んで、更に煽るかのように、説明が続けられる。
『タイプαとは……ブラッドのタイプ、つまり血液型でございます。この薬物を注入された女体は、確実に完全に、胎内射精をされた精液の血液型の子……つまりこの場合、強姦魔と同じ血液型の子しか妊娠できなくなります。そして超速妊娠促進薬とは、

著者近況
最後までご愛読を頂き、ありがとうございました。二人の活躍とエロスを皆様に楽しんで頂けたなら、火憐も霧華も幸せです！
それではまた、お会いできる日を信じて――。

母体の妊娠を極限まで早める新薬にございます』
「なっ――!?」
軽くパニックするほど驚愕をした、火憐と霧華。
つまり二人は、強姦魔の子を、すぐにでも妊娠させられる身体にされているのだ。
「そんな、事って…！」
『ハンターたちは、それぞれ四種類の血液型の男たちが各二名で、計八人。果たして二人のエモノが妊娠するのは、どの血液型でありましょう。それを見極めるこそが、孕ませダービーでございます！』
薬物は既に家畜で実証済みだという。賭けは成立すると、男は楽しそうに補足した。
「な、何という…！」
組織は二人の身体を使って、どの強姦魔の子供を妊娠するかを、賭けの対象にしているのだ。
しかもその為に、異様な醜男ばかりを用意。首から下げた札は、その男の血液型を標示していた。
女性にとって最も神聖な妊娠を、享楽の為だけに弄ぶ、まさしく悪魔のゲーム。
『受精卵は、誕生次第首輪が感知いたします。果たして火憐嬢と霧華嬢は、本日のレイプで妊娠するのでありましょうか。はたまた数日、数週間を要するのでありましょうか。おおぉ、「その日」がいつであるかも、賭けの対象といたしましょう』
男は暗に、孕ませダービーは二人が妊娠するまで続ける。と宣言していた。
ちなみに、二人が勝利した場合、敗者復活として昨日のゲームに再挑戦です。と笑っている。
拘束された裸身のまま、火憐は叫んでいた。
「ふ、ふざけないでっ――あぁっ！」
そんな、怒りでモニターを睨み上げる二人をあざ笑うかのように、ファンファーレが鳴り響く。
富豪たちが賭け終えたのだろう。再び、楽しそうな黒の十一号の声。
『それでは皆様……新たなゲーム、孕ませダービーの開幕ですっ！』
ポールのモニターに「3」と標示されて、カウントダウンが始まる。
「くっ――霧華っ！」
「は、はいっ！」
姉的なくノ一が、妹同様の格闘少女と立ち上がると同時に、標示は「0」を示す。
『ゲームスタートっ！』
ポールから解放された二人が逃走した途端、五十メートル後方の格子が開かれた。
「うひょおぉっ、女のケツだケツだぁっ！」
「デカい乳っ、揉ませろよおぉっ！」
獣欲に猛り狂う牡たちが、我先にと全力疾走。
対して逃げの一手しか打てない拘束の乙女たちは、駆けだした途端、予想外の障害に直面する。
「逃げましょう、火憐さっ――痛いっ！」
広大な土地は、鋭く尖った小さな砂利だけで、ビッシリと敷き詰められていたのだ。
「霧華っ――ぁうっ！」
一歩踏み出しただけで、細かい砂利が柔らかい裸足の足裏に、浅く無数に刺さる。
つい足を引くと、ハチマキ少女の豊乳がタップンと弾み、黒髪くノ一の巨乳も盛大に淫媚な上下動。
極力そっと歩いても、素足が反射的に躊躇(ためら)ってしまうほどの、痛くて鋭い砂利。
こんな大地を全力で走るなんて、不可能だ。
（それでも、逃げないと…っ！）
捕まって犯されて、最悪妊娠――。
痛みを無視してでも、逃げるしかない。それでも肉体は、痛みを避ける為に力を緩めてしまう。
「は、早くっ――痛っ――逃げなきゃっ…！」
背後から、狂った牡獣たちが追いすがってくる。
普段から全裸での強制労働に従事させられている男たち。しかも興奮薬物で猛っているから、もはや足裏の痛みなんて微塵も感じていないのだろう。
砂利の足音が確実に、近く大きく聞こえてくる。
このままでは追いつかれて――。
加速度的に理性が焦る。もう数十メートル走ったと思いたいのに、実際は数歩しか走れていない。
「はぁっ、はぁっ――ついたぃっ――このぅっ！」
プニプニな足の裏を細かい激痛に襲われ、艶々な背筋がつい丸まってしまう。下向きで質量増な巨乳と豊乳に、縮めたヒザが当たってプルンっと弾む。
厚手の黒革で覆われた両腕が、首の後ろで手首を拘束された格好。だから、裸身でおののく様は惨めなくらい、恥ずかしい有り様だった。
そんな二人の惨恥な姿は、前方斜め下や後ろや真下、遠近と、様々なカメラで撮影されている。
そして遂に。
「そぅらっ、捕まえたあぁぁっ！」
必死で逃走する二人の裸体が、背後からの強烈なタックルで組みつかれて、押し倒されてしまった。
「きゃあぁっ――っあぐぅっ！」
抱きつかれて転がされながら、背後から爆乳を鷲掴みにされる火憐。
「こっちも捕ったあぁっ！」
霧華はハチマキを掴まれると、強く引かれて首からガクんと仰け反る。
「んぐっ――は、放してよっ…っ！」
片足を上げたまま肢体が反れて、肉の割れ目が縦開脚で、カメラにアップで公開された。
黒髪くノ一の両ヒジが、牡の両腕で体重を乗せられる。タップリと皮下脂肪の乗った女腰までもが、強姦魔たちにしがみつかれて押さえられた。
（こ、これでは…逃げられないっ！）
足の裏に比べれば、女性でも背中は広いから、体重が分散されて砂利は痛くない。

著者近刊
『ダークエンパイア 反逆の流星たち』、『姦落の巫女姉妹』シリーズ、『白翼の姫騎士ナイトスワニィ』、『双子づくり！』、『キリＭっ！』、『妹嫁』『わたしが倒してあげるんだから！』『オトミコ！　僕は男の巫女娘』ほか
好評発売中！

それぞれの女体は、各血液型のレイパーが一人ずつで、計四人に襲い掛かられる。裸の身体を大地に押さえ込まれると、力による陵辱が始められた。
火憐は、ひじで上体を押さえられたまま爆乳を揉みしだかれて、更に二人の男によって、左右から両脚を開かされてゆく。
「いっ、嫌よ…っ！」
また強姦される――。
眉根が下がるほど焦燥をさせられ、薄く汗を纏う白い柔肌。それは恐怖か、望まぬ肉の期待か。
必死に両脚を閉じようとするものの、牡獣たちの恐ろしい怪力の前には、数秒と持たなかった。
「おらおらぁっ、ご開脚ぅっ！」
艶やかな腿を限界まで開かれると、秘すべき閉じ媚肉が牡たちに晒される。
淫欲強い視線で注視されると、乙女の意志とは真逆に、子宮が熱の性反応をさせられて、自ら粘膜を開いてみせた。
「うおおおっ、マ[redacted]コだマ[redacted]コおぉっ！」
「あぁ…っ！」
一度肉体を奪われ、心が折られてしまったからだろう。晒されてしまうと、もう全身からどうしようもなく、抵抗の力が奪われてゆく。
天上開脚にされた火憐の隣では、ショートカットの格闘女子も、同様の恥公開に処されていた。
「はっ、離してってば……んぐぐっ！」
男たちの腰の高さという手頃な岩に、仰向けで乗せられている。両ヒジを押さえられながら、幼い愛顔に勃起を突きつけられていた。
突き出された豊乳は好き勝手に揉み遊ばれて、脂ぎった牡の唇で先端の媚突を舐め吸われている。
「ブチュル、チュプッ…柔らかい乳だなぁっ！」
そして両脚はあっさりと左右いっぱいに開かれ、柔らかい内腿や後孔までをも晒されていた。
「桃色で可愛いオ[redacted]ンコだねぇ、ケッケッケ」
「うっ、うるさっ――っひやぁあっ！」
艶々で柔らかい二人の粘膜に、半透明なピンク色の温かい粘液がトップリと落とされる。男たちは、首札の裏側に隠されていた小袋を使用していた。
「フヒヒヒッ、これで濡れ濡れマンコだぁっ！」
「なっ――んん…こ、これは…っ！」
くノ一の火憐は、身体で理解させられる。
粘膜や肉芽に落とされた途端、子宮がゴォっと、強い飢餓感の炎を上げたのだ。
粘液は性交用のローション。しかし強度の催淫性を帯びていて、その効果は今、身をもって体験させられている。
「んくくっ……ひはっ――っ何さ、コレぇぇっ！」
強気で抵抗する霧華だけど、息が乱れて力が入らない。子宮の欲求がムリヤリ膨張させられている為か、肢体が小さく震えていた。
胎内を熱暴走させられてしまうと、女の身体はもう、逃げるどころか抵抗すらできない。
くノ一の乙女ですら、女体の飢餓感に理性が押しつぶされてゆく。無意識にも、強姦魔たちの勃起へと、濡れた視線を絡ませてしまっていた。
「はぁ…あぁ…こ、こんなぁ……私、は…っ！」
もう犯されるのはイヤ――。
また、あの充足感がもらえる――。
清潔な理性と淫媚な欲求が葛藤をして、女体は艶めかしく、くねられる。
揉まれる巨乳の先端では桃色の乳首がクリ…っと硬化。晒される秘処は、更に自ら粘膜や膣孔を見せて蜜を纏う。
極薄カフェオレ色の肛門は、高まってゆく鼓動に合わせてチュっチュっと収縮を見せつけていた。
女として同じ反応で喘ぐ霧華の唇が、A型強姦魔の勃起で埋められる。
「はあっ――んぷぅぅっ！」
「んっはあぁっ！ 五年ぶりの口ま[redacted]こおぉっ、ヌプヌプして最高だぁ！」
口姦された少女は、汚辱感で抵抗。しかし両ヒジを男のヒザで押さえられて両手で頬を取られると、後は勃起抽送を受け入れるしかできなくされた。
「歯を立てたら腹パンチだぜぇ。ゲッゲッゲッ！」
腹を撫でられてそう脅されると、腹部どころか裸身も隠せない格闘少女は、もう男に従うしかない。
更に開脚された腿を抱えられると、B型強姦魔によって、一気に子宮まで姦入。
――ッズプチュゥッッ！
「んんんんっ――んぱっ、いやだはぁっ――んひゃあぁぁはあああぁっ！」
霧華の声は、屈辱の涙と官能の艶に濡れていた。
（き、霧華……あんな、声を……！）
純粋で無垢であどけなかった少女が、レイプをされて女の声を上げている事実に、芯から驚愕。
自分たちは、女として牝として、急速に開花させられているのだ。しかも強姦という手段で。
妹少女を心配する姉くノ一の秘処に、AB型の勃起が突き充てられる。
「きっ、霧華あぁっ――っはあぁあっ！」
――ッヂュチュウッッ！
妹を案じた姉の子宮が、天上開脚のまま最深部まで、強引に肉侵入をされてしまった。
二人のエモノが犯されると、ゲームを仕切る男の高揚したボイスが、楽しそうに響き渡る。
『おぉお、なんとっ。火憐嬢と霧華嬢、二人揃ってあっという間にレイプされてしまいました。時間にして、ゲームスタートからたったの五分です！ なんと無力な。これが「天才くノ一」と「百年に一人の逸材」の実力なのでしょうか？ くっくっく……』
黒の十一号の嘲りを納得するかのように、富豪た

ちのクスクス笑いまで聞こえる。
『さて「第一回　孕ませダービー」の、結果発表です。時間は五分。火憐嬢を強姦した勇者はAB型。霧華嬢を強姦した勇者はB型でございます！』
屈辱の発表と共に、ファンファーレが鳴り響く。
更にレイパーたちも、勇者と評され自信を持ったからだろう。胎内の熱勃起が、グンっと一段、太さと堅さと熱量を上げた。
黒髪の乙女を占領したAB型強姦魔はニヘニへと笑いながら、体重を乗せて更に奥まで限界の肉辱。
「オレは勇者様だぜぇっ！　ゲハハっ！　勇者様に犯されてぇっ、感激に泣けええぇっ！」
——ズプヌリュプ…ッ！
「ひいぃっ——ぃ、いやあぁっ——ん、はあぁぁあぁぁ…っ！」
男の重みで、背中から腰がギリリとしなる。穢れしかない強姦魔の再強姦に、理性が暴れ出したいくらいの嫌悪。
それなのに、女体はウットリと力を抜かれて蜜を溢れさせて、粘膜は牡肉をキツく抱き締めて、もっと奥へと媚を売っていた。
勃起の重さと肉の圧迫感が、子宮から女体全てへと波紋する。深い充足感と強烈な飢餓感、そして蕩けるような悦楽へと、女の全てが導かれてしまう。
二人の肌は性感の熱でシットリと覆われて、もう牡の腕力に抗う力も、肉体の意志も奪われてゆく。女たちが無抵抗にまで堕ちると、姦獣たちの支配欲が更に膨張。
「大人しくなりやがったぜっ。今度はエロ声を聞かせてくれよぉっ、フンッフンッ！」
強姦魔たちの腰が、力強く前後する。同時に、最深部まで詰められた豪肉によって、火憐と霧華の子宮が牡の力でかき回され始めた。
——ッヂュぷルちュぷッ、ヅぷヌるちュヅぷづプヅちュッ！
思いやりなんて皆無同然な、力だけの勃起責め。屈辱と悔しさだけしかない陵辱なのに、肉体は深すぎる歓喜で、肉官能の喘ぎを自ら発していた。
「っひゃめっ——あはあああああああああああっ——おオナカあっ——ひびっ、ヒビきまふううぅうぅぅうっ！」
力いっぱいの肉抽送で、黒髪くノ一の入り口から子宮までの粘膜を往復される。
子宮からつま先、背筋から脳裏から頭の天辺の向こうまでが、無条件に蕩けさせられてしまう。
仰向けで串刺しレイプされる格闘少女も、童顔を染めて、女の官能ボイスに悩乱させられていた。
「んぶぅっ——ゃめへようっ——んんっ、んっんっんんんんんっ——っぉチ■ポひゃまっ——強すぎるっ、からあああぁぁぁっ！」
脣と膣孔を、前後別々に好き勝手に犯される。
しかし女体は、牡の性欲に突き上げられて、あっさりと完全脱力をさせられていた。
力と重さで子宮を肉征服されてしまうと、不埒な牡たちを嫌悪する清潔な理性が、あっという間に瓦解させられてゆく。
熱太い制圧で意識が蕩け、妊娠に対する恐怖と胎内の姦肉快感を、自ら白状してしまっていた。
「なかっ、ぁついですふうぅっ——ひぃっ、いんいんいんっ——もぅぃやぁっ——ニンヒンしちゃっ——もっとっ、熱いのいいいいいいいいっ！」
マングリ返しで肉責めされる火憐の巨乳が、プルプルと細かく淫猥に跳ね続ける。
開脚させられた内腿が恥汗で湿り艶めき、美脚はつま先までがフラフラと無力に泳ぐ。
頬を取られて脣を犯され、腰を掴まれて脚を開かされて子宮姦される霧華。
「やめへやめへっ——ぁぷっ、れろ、ちゅぷんっ——っんくんくっ——ぉチ■ポさま、ぁかちゃんっ——ぁたひっ、またバカにっ、なっひゃうぅっ！」
強姦での快感に馴らされ、躾けられてゆく少女の肢体が、性感の汗と熱で上気してゆく。
牡たちの突き込みで全身を揺すられながら、丸い豊乳が左右対称の縦長楕円を描いて、魅せていた。
世界最高の女体を犯せる喜びと征服感に、牡たちの欲求は更にエスカレート。強姦中の肉孔以外の、別なる媚肉への乱暴を開始した。
「黒髪ねーちゃん、ケツ孔も艶々でエロいぃっ！」
陽光に晒される火憐の後孔に、O型強姦魔の太い人差し指が、ズプっと深く根元まで突き込まれる。
「コッチの娘もっ、肛門がピクピクしてらぁっ！」
ほとんど一緒に、霧華の菊肛も強姦魔の節くれ立った親指、しかも二本で、根元まで姦通された。
その瞬間、乙女と少女は、肛姦の恥辱とは全然別な、より惨めな汚辱感で心が砕かれてしまう。
「っひいぃいっ——ぃやっ、ひゃめへえぇっ！」
「んぐっ——んんんんんんんんんっ！」
肛門レイプのような直接的な性欲求の行為とは違い、肛門指責めは完全な肉玩具扱いだ。
ただでさえ望まない強姦での悦楽。なのに馴らされてしまった肢体は男の指でさえも、快楽をくれるご主人様だと完全認識をさせられてしまっていた。
勝手に侵入してきた人差し指を、くノ一の腸粘膜は愛おしそうに、チュクチュクと締めつける。
二本の親指を呑まされたハチマキ少女の肛門も、拙く震えながらその存在を甘受してゆく。
「ケツの中、熱々じゃねーかよぉっ！」
女の体温を感じながら、牡たちは指遊びを乱暴に開始。
太い人差し指でグルグルとかき回される、火憐の菊座。霧華の媚肛も、二つの親指でクチクチと開かれて左右上下にと、こね回されてゆく。
——ずプちュりゅチゅぬルっ、クちュくちュヌル

ゅニゅぬるりゅちュっ！

「っくはあぁぁぁっ――ぉひりぃっ、イヤあぁぁぁっ――ゃめてひゃめへえぇぇぇっ！」

子宮肉詰め強姦と、恥辱の後孔指責め。こんな様まで、富豪たちに晒されている。悔しさ以上の恥ずかしさで、二人は気が変になりそうだった。

なのに、穢れた肉姦の上に羞恥を重ねられると、女体は更に深く強く、性感染めに堕とされてゆく。

後孔指責めで腰の力が完全に砕かれて、恥辱で脳裏も灼かれ、強制崩壊させられてゆく理性。

「ぉひりっ、いぃいよおぉっ――んぷちゅうぅぅぅっ――おひりっ、もっとクチクチがいぃいいっ！」

肛門を責められると、すぐ隣の子宮までもが直接愛撫されるような、錯覚快感。

胎内最奥が勃起と指で一緒に弄ばれて、守るべき下半身の全てが、強姦魔の手中に堕とされていた。

更に、仰向け霧華の白い艶々豊乳が、強姦魔の両手で鷲掴みにされる。

「まだまだ、肉が空いてるってんだぁっ！」

男の指で力いっぱいに揉み上げられながら、赤い媚突をヌトヌトの唇で吸い上げられて、濡れた舌で舐め転がされた。

「んふっ、んぅううぅっ――っ！」

「ベロりュっ、チゅプるッ――ゲッへへ、柔らかくて甘いパイオツだぁッ！」

火憐の巨乳も、左右それぞれが二人の男に根元から掴まれて、持ち上げられて揉み遊ばれる。

「こっちだって、エロいデカ乳だぞっ！」

男の両手で揉み上げられながら、二つの乳首が勃起責めに晒された。

熱堅い男性器で、左右の媚突が突かれてこねられて、乳房内へと押し埋められる。

「っあはあぁあぁあぁあぁあぁっ――むねずぷずぷふっ――っムネへっ、ぉかされちゃふううぅぅっ！」

硬化する乳首を責められると、小さいけど鋭い甘電で、上半身が淫猥なダンスをさせられた。

心臓がトクトクと激しく鼓動を打ち、乳首から背筋を抜けて脳神経までもが、確実な悦楽染めに堕とされてゆく。

乳房と肛門と子宮。更に霧華は口。

女の全てを肉占領されてしまうと、もう抵抗なんて、考える事すらできなくされていた。

心臓の鼓動が、子宮の飢餓感が、限界まで高まってゆく。

「ぁあぁあぁあぁあぁあぁっ――くだっ、くださひいぃいぃっ――わたくひぃっ、もぅっ――ぃいいいいいいいいいいっ！」

狂ってしまいそうな女体欲求と、狂わされそうな強い男肉責め。牡欲求のはけ口にされている恥辱さえもが、もう絶対に抗えない快感要素として、女の全てに灼きつけられてしまっていた。

「ィかせてっ、ィかせてへっ――あたひいぃいっ――おっおっ、ぉチ■ポさまれっ――イっちゃふっ、からはあぁあぁぁっ！」

妊娠させられる恐怖。なのに二人の意識も無意識も、もうただ強姦での中出し絶頂しか、望めない。

膣壁と後孔がキュウゥっと窄まり、霧華の舌が勃起を描く激しく舐める。

女体たちの反応に、牡たちは射精に向かってピッチを上げた。

「おおおっ、今すぐイかせて出してやるぜぇっ！」

――ッづプづュぷルゅッ、ヅプづプヅぷッヂょルぷヅぷュっ!!

熱と太さを増した高速の強姦勃起突きで、二人の女体が悦楽へと突き上げられてゆく。

ペニス突きされる火憐の美巨乳がタプタプと弾んで、天を向く裸尻が微細に震える。

霧華の双乳も揉み舐められながら大きく上下し、引き締まった下腹部が脱力で痙攣。

指責めされるそれぞれの後孔も、溢れ続ける白らの蜜にまみれて、牡たちの指に吸いついていた。

犯される女体が急激に熱を上げて、子宮の中では飢餓感が膨張。

あらゆる音が遠退いて、女体は牡の触れている箇所だけが全てにされる。もう絶頂が寸前。

締めつけられた強姦魔たちも、強く腰を引いて全力で突き込んだ。

「中に出すぜえぇっ、タップリとなぁっ！」

――っづぷゅっっ!!

「っ――――っっ!!」

子宮壁を叩かれた瞬間、二人は同時に、昨日以上の頂点へと突き上げられていた。

「いいいっ――いきますううぅぅぅっ――カレンっ、カレンはまたっ――ぉかされてイってへえぇええぇぇぇっ――っ!!」

妊娠。が悦楽の頭に過る。しなやかな裸体が魚のように弾み、天上開脚のまま恥汗を散らす。

「んぶうぅっ――あたひまたイくうぅっ――っあっあっぁあぁあぁあっ――っまたヒってっ、バカになっちゃうよおぉぉっ――っんくんんんっっ!!」

細い背筋を反らせながら、縦長のお臍と艶やかな下腹部が、ピクピクと震えていた。

二人を犯した強姦魔たちが、恐怖の宣言をする。

「くノ一のねーちゃんっ、お前の後継者、オレが仕込んでやらあぁっ！」

――ッビュウウウウウゥゥゥゥウッッ!!

望まぬ牡の粘液が、頭目乙女の子宮内へと強く吐き出される。

「いや……ゃめて……にんしん…ぃやよぅ……！」

高粘度の精液で胎内を占領される汚辱感に、心が砕かれて震え、肉体が更なる悦楽で震えていた。

そして霧華にも。

くふふ…
可愛いぞ翠(みどり)
妖魔との濃厚なキスに耽る少女戦士…
ハァ♥
あ♥
ハァ♥
ジュプ♥
美少女魔法戦士
ピュアメイツ
PURE MATES
episode 5
漫画 COMIC／助三郎(すけさぶろう)
愛していますギムジン様ぁ♥

くくく…
翠…
お前はこちらの顔の俺のほうが好きなんじゃないのか？
関係ありませんわ
ギムジン様はギムジン様ですぅ♥
ギムジン様はうまくやったもんだな
あのイケメン顔でピュア・エメラルドを誑し込んだってワケか
聞いた話じゃ あの娘がピュアメイツとの情報を知り
家庭教師として近づき恋愛ごっこの末にモノにしたとさ
人間の女は恋愛に弱いからな
恋人の為なら仲間をも裏切るってわけだ
今回の作戦も殆どあの娘の案らしい
ヒヒ…怖いねぇ

前号までのあらすじ
ピュア・マダー、スカイ、レモン…次々と妖魔の虜となる魔法少女戦士たち。
その裏で糸を引いていたのは妖魔の下僕に堕ちたピュア・エメラルドだった…。
ママぁ!!
ヴェールとアフダル
翠がこの四ヶ月で
産んだ子供だ
俺達は産まれてすぐ
ある程度まで
育つのさ
はじめまして
ママぁ!
僕がヴェールだよ
アフダルです
ママって可愛い
ですね
?
ママ…!?

ママぁ!
やぁん!?
あ?やん!?
…何を…?
俺達妖精は
日常的に
親子で交わるのさ
ママぁ!!
初めての相手が
親というのは
珍しくもない
二人とも おチ チ
気持ちよくして欲しいの?
うん!!
わかったわ
ママが二人の童貞チ ポから
たっぷり射精させてあげます♥

んふ♥
美味し♥
ジュプ♥
マ…ママぁ凄い…!!
腰が融けちゃいそうぅ!!
まだまだ
これからですわよ♥
レロ♥
ママぁ
そこはぁ…!!
気持ちイイ?
ふふふ…肛門ナメナメ
しちゃいますわよ
レロォ♥

さあヴェール
ママのおしりに
挿入れるんだ
パパが鍛えたから
ママはこっちでも
気持ちよくなれるんだよ
ママぁ！
ああぁ!!
大きいいい!!
ヴェールだけ
ずるいです!!
わかり
ましたわ
うく!?
ママぁ!!
おチ[redacted]チ[redacted]
とっても
美味しいわぁ♥
アフダル
ママのお口は
乱暴に突いても
大丈夫ですわよ♥

…ま…ママぁぁ!!
いいれふわぁぁぁ!! もっろ めらめらに 口もお■んろもおひりも 突いれええぇ!!
ママぁ!! 飲んで くださいぃぃ!
ママぁ!! 僕も出るぅ!!
子宮に かけるぞ! 翠!!
あぁぁぁ!! 二人とパパれ ママふぉ みろりをイはせれええぇ!!

ママぁぁ!!
射精るぅぅ!!
くふふ…
これで全員
ボテ腹になったな
変身した姿で
集まるんだ
は…はい…
ギムジン様ぁ

気高く清廉な戦女神が、屈辱の肛辱の果てに
快楽に堕ちていく——!!
落日のブリュントライテ
肛悦に沈む戦女神のサーガ
小説 NOVEL／愛枝直（あいえだなお）
挿絵 ILLUSTRATION／はっとりまさき

一人の戦乙女が肩口で切りそろえた短い髪を風に散らし、累々と横たわるオーガの死体を見下ろして立つ。

「オルト！　出すぎるなといつも言っているだろう！」

背の高く細身の戦乙女がまたもう一人現れ、彼女を叱った。

「わかってますって。もう、トルーネはうるさいなぁ」

「なにっ、だいたいお前はいつも……」

「まぁまぁ、オルトは突破力が持ち味なんだから。でも、オルトもうるさいなんて言っちゃダメよ？　トルーネは心配してくれてるんだから」

そこに優しい笑顔の乙女が更に遅れて姿を見せて、二人を窘める。オルトが素直に返事をして謝り、トルーネは「リーベ姉様の言うことは聞くくせに……」とむくれた。

「オルトは姉様大好きだから」

一際丈の低い少女がまた現れて、リーベの腰元に縋って甘えながら平板な声で混ぜっ返す。トルーネが「グリン、その格好ではまるで説得力がないぞ」と苦笑すると、残りの二人が揃って頷いた。

「ホホホ！　そちらはようやく終わりですの？　わたくしは百八のトロルを打ち倒し、一つ首級をあげましたわ。リーベはいかがかしらっ？」

「まぁ。ヴァイセったらすごいわね。ブラウエもお疲れ様」

「おつかれー。もー。ヴァイセはそうやっていちいち突っかかるから、リーベ姉ぇより下に見られるんだよー」

そこにまた二人の戦乙女。巻き毛の一人が高飛車に笑って、そっくりの顔をした結わえ髪のもう一人が茶化す。

「どう見たってヴァイセの方が姉様大好きだろ」

「なっ⁉　オ、オルト貴方ときたら言うに事欠いて……！」

オルトがそれに乗っかって、周りの乙女達もしかつめらしく頷いた。ヴァイセが絶句して狼狽えた。

リーベは苦笑してそれを眺める。姦しい喧噪の収まる気配はない。

「おしゃべりはそこまでです。乙女達」

『ブリュントライテ様！』

だが、そこに美しい女神が現れ、静かに、厳かに声をかけると、乙女達はたちどころに一所に顔を向ける。

「東の岬をグリムルーネが一人で支えています。助太刀に向かいますよ！」

『はい！』

ブリュントライテが告げ、乙女達が一糸乱れず応じる。皆の羽衣が白鳥の翼となり、一本の矢となって飛び立つ。

――そう、それは過ぎし日の一幕。

今は遠き、愛しい思い出――。

白銀に輝く鉄靴が地に沈む。

細身の剣を掲げ、三人の戦乙女が苦悶を浮かべていた。

いずれも白絹の鎧下に、優美な胸甲をまとったうら若き少女達である。それらにのし掛からんばかりにして、醜悪な巨漢の化け物が彼女らの胴よりも太い棍棒を押し込んでいる。

糸を紡ぎ琴を奏でる方がよほど似合いのたおやかな手で、身の丈倍するオーガの猛攻を凌ぐ技量は見事と言うほかないだろう。

だが、膂力に勝る怪物を押し返すことはさすがにできない。少女達は互いの援護もままならず、支えるのが精一杯のつばぜり合いをもう数刻続けている。両陣は完全な膠着状態にあった。

そこに、横合いから新たな化け物が現れた。干戈を交えるオーガと比しても、更に魁偉なトロルである。でっぷりと腹の肥えた怪物は、巨岩を頭上に担いでいる。少女達の表情が凍り付いた。

「馬鹿な！　貴様らもろとも潰れるぞ！」

「グギ、ィギヤガハハ！」

オルトヒルデ――肩までで切りそろえた髪の乙女が叫ぶ。オーガは笑声とも咆哮ともつかぬ軋んだ噪音で応えた。

トロルの腕が力を溜めてたわむ。剣士らは棍で地に縫い付けられ、逃れる術はない。美しい顔が絶望に歪む。

その時――一陣の風が修羅の巷に駆け抜けた。

「ガギャァア！」

オーガの棍が、腕ごと飛んだ。くの字をつくったまま くるくると回ってオルトヒルデの背中へそれて流れ、重たく響いて地に堕ちる。

少女は慌てて離脱する。一拍遅れて皮から骨まで歪みなく晒された断面から血しぶきが噴き上がった。

その隣も同様に、またその隣も同様に――オーガの腕は千切れて飛んで、残り二人も解放される。

吹き止んだ風は、美しき女神の姿をしていた。

細い輪郭。高い鼻梁。宝石のような蒼の瞳は怜悧な輝きを湛えて深く煌めき、引き結んだ唇は艶やかに紅い。金糸の髪はほっそりとした腰まで流れるように落ち、その頭頂では翼に飾られた銀の兜が冠のように輝く。

極上の脚線美を腿までのグリーブが包み、短めの腰布との間から眩いほどに白い肌が覗く。張り詰めた両腿から優美な曲線を描きくびれた腰。そこからまたターコイズブルーの胸甲に包まれた女の証が豊穣に実る。

成熟した女の色香を湛えながら、その身ごなしには一分の隙もない。剣にまとわりついた血を払い、鞘に収める所作さえも、見蕩れるほどに典雅であった。

「グ……ォォオアアッ！」

「ブリュントライテ様！」

呆けて動きを止めていたトロルが、怒号と共に巌を放る。戦女神へ迫る暴威に、乙女の一人が悲鳴を上げる。

「フリーグテイン！」

だが、ブリュントライテと呼ばれた女神は、顔色一つ変えることなく、たおやかな手を頭上に掲げた。凛と響いた呼び声に、翼を模した大弓が姿を現す。

よどみなく引き絞り、放つ。駆ける矢は流星のごとく尾を引いて輝く。ぶち当たった巨岩を砕いて飽き足らず、光にのまれたトロルを跡形もなく蒸発させた。

掌を上向け開くと、大弓がかき消える。女神は、それぞれの相手にとどめを刺した戦乙女達に向き直った。

「愚か者共！　オーガと力比べをしてなんの益がありますか！」

そして大喝。少女達は身を竦ませてうなだれた。

戦女神は溜め息をつく。旗色が悪い。長き冬の後、九つの世界を隔てる境界は崩れ、数多の古く悪しき神々とその眷属が今世の神々の園になだれ込んだ。あらゆる世界のあらゆる大地で激突は続く。ブリュントライテ達はここヴィーグリーズで悪神達と切り結んでいた。

初めのうちは優勢であった。戦乙女達は女神の手足のごとく自在に戦場を駆け回り、統率のない怪物共を鮮やかな連携で屠っていった。乙女らの顔は凛凛と自信に満ちあふれ、鉄の団結をもって互いを助け合っていた。

それがあの事件以来――。

「……ならば、我らも放り捨てますか。リーベヴィンテ姉様のように」

オルトヒルデがうつむいたまま呟く。

「オルト、そこに直れ」

平板な声で呼ばわり、その姉シュベルトルーネが剣の柄に手をかけた。残る一人ジークリンデは無気力に目を伏せたままで、結局女神が制する。

「よしなさい、シュベルトルーネ。死地に臨んで気が立っていただけ。そうですね？　オルトヒルデ」

「…………申し訳、ございませんでした」

オルトヒルデが渋々頭を下げる。ようやく張り詰めた空気が途切れ――気まずい沈黙が漂った。

そう、こんな諍いはあり得なかった。リーベヴィンテがいた頃には。

戦乙女達の長姉であるリーベヴィンテは、優しい丸い瞳にふっくらとした薔薇の頬を持つ、気立てのいい娘であった。こうして乙女達を叱った際には、真っ先に取りなすのが彼女であった。

戦女神――戦乙女らの統括者であるブリュントライテは強く、美しいが、その峻厳な質は向かい合うものを萎縮させる。橋渡しとなるリーベヴィンテのいなくなった今、彼女らとの距離が酷く遠い。

（いえ――それは言い訳です。彼女達が不信を抱くのは当然のこと）

ブリュントライテは自責する。そう、オルトヒルデの言うとおり、リーベを追放したのは私なのだ――。

きっかけは、やはり悪神達との戦いにあった。敵陣深くに切り込みすぎた妹達を逃がすため、リーベヴィンテが取り残されたのだ。

一昼夜が過ぎ、戻ってきた乙女はボロボロだった。髪は乱れ、服は裂かれて乳房がはだけ、幾筋もの紅い蚯蚓腫（みみずば）れが肌に浮かんでいた。乾きかけた異臭のする汚濁をまとい、力の源となる白鳥の羽衣は黒く濁り、両脚の付け根から生々しい血の跡が伸びていた。

――辱めを受けおめおめ生きて戻るとは、戦乙女の名折れです。どこへなりとも失せなさい！

怒鳴りつけた声音の冷たさに自分で驚いたことを、今でもはっきりと覚えている。リーベは慟哭して去り――その行く末はようとして知れない。

オルトヒルデはその裁可を、今も恨んでいるのだ。突出しすぎて、リーベが残される発端となったのが彼女であった。

女神は取り合わなかった。「男と通じ穢れた娘は我が配下に必要ありません」と断じ、乙女達の秘所をルーンの呪符でふさぎまでした。本当の理由は、決して言うわけにはいかなかった。

（とはいえ――悔いている時間もないようです）

深い憂いから立ち戻って女神は顔を上げる。早くも新たな敵が迫っていた。トロルが二体にオークが四体、そして無数のコボルト達。戦場はここだけではない。彼女らより少ない二人や一人で、鉄火場を支えている戦乙女も少なくはない。

「弓を取りなさい」

ブリュントライテが静かに命じる。だが――魔物らが粗末な腰布を剥ぎ取り、無意味に猛った肉棒を見せ付けてゲラゲラと嗤い――戦乙女達の美しい顔が強張った。

女神の羽衣が光輝を増して、起こった烈風に金の髪が逆巻く。凄絶な闘気に二人の乙女が息をのむ。

（そのような挑発に乗るとでも思いましたか……！）

燃えるような怒りを見せながらも、女神は冷静さを失っていなかった。十中八九、罠がある。だが――オルトヒルデは耐えきれなかった。

剣を抜く。疾（と）く駆ける。

「オルトヒルデ！　戻りなさい！」

「かかる愚弄を見過ごすことこそまさしく戦乙女の名折れ、叩っ切ってまいりますッ！」

「シュベルトルーネ、ジークリンデ！」

「オルトは一度痛い目を見るべき」

「グリンの言うとおりです」

オルトヒルデは振り返りもしなかった。二人も醒めた瞳のまま吐き捨てる。突き進む乙女の両斜め前の大地が、不自然に蠢いている。何者かが潜んでいるのだ。

「～～～～ッ！」

羽衣が翼を形作った。女神は衝撃波と爆音を残して飛ぶ。

ここでオルトヒルデを見捨てれば、隊は持たない。もはや選択肢はなかった。ようやく彼女に追いついたのは、まさに罠の真上であった。

「ブリュントライテ様!?　キャァアアア！」

襟首を掴んで真後ろに放る。次の瞬間身を隠していたゴブリン達が這い出、

著者近況　最強の戦女神だけどアナルをほじられたら堕落しても仕方ないよねっ。

なにか符のようなモノを地に張り付けた。

　呪具を結んだ直線の真ん中、丁度女神の立つ位置に、目で追えぬほどの速さでルーンが浮かんでは消える。

（この術式は――！）

　その先を考える暇はなかった。足下から湧きだした光の鎖に美しい肢体を搦め捕られ、ブリュントライテの意識はかき消えた。

　そしてブリュントライテは目覚める。かび臭い地下牢であった。粗雑に詰まれた石壁のそこかしこから水が漏れ、ぴたぴたと絶え間なく湿った音が鳴る。オルトヒルデ達は無事だろうか。女神はまず妹達を案じる。そしてすぐに、人の心配などしている場合かと自嘲した。

　女神は、身を横たえた壇をなんと呼ぶべきかに迷った。それは寝台と呼ぶにはあまりに短く、しかも斜めに傾いでいた。

　伸びやかな女体が狭く不安定な床に収まっているのは、下肢を大きく折り曲げられて、頭の横で足首を枷に留められているからだ。

　いきおい腰布は捲れ上がり、体重を支えて柔らかく潰れた尻たぶが露わになる。くびれた腰も、両の手首も同じく鉄環に縛められて、隠すことはできそうにない。

　目の先には鉄格子があった。更に先の階段から、一人の男が降りてきて中に入り、女神の前に立った。

「よい格好だなぁ。ブリュントライテ」

「悪神は悪神らしく、やはりその趣味も悪いのですね」

　皮肉に皮肉で返してやると、男は喉の奥でくぐもった笑声を上げる。

　だらしなくでっぷりと肥えた身体、あばただらけの醜い顔。見覚えがある。敵陣深くで魔物達を束ねていた悪神の将だ。確かヴァーゾルドといっただろうか。

　一刀の間近に大将首があるというのに、ブリュントライテは身を起こすこともできない。それぞれ拘束具に、ルーンが刻まれている。どうやらそれが力を封じているらしかった。

「減らず口も今だけだ。お前〝も〟我々の側へと堕ちるのだからなぁ」

　悪神の将は得意げに告げる。

　やはりあの子は――いいや考えてどうなるというのか――動揺を押し殺し、女神は無言のまま睨みつけた。覚悟していたことではあったが、やはり戦乙女の秘密は露見している様子であった。

　そもそもは、殺せと言われていた。悪神に穢された戦乙女は生かしてはならぬ――と。

　女神の、いや、今世の神々全ての父である天帝は、予言の泉にて一つの啓示を受けたという。

　すなわち、悪しき神と通じ、堕ちた戦乙女が黄昏を導く。犯された戦乙女は悪神となるのだ。これは天帝とブリュントライテしか知らぬ特秘である。

　陵辱の痕跡も露わに戻ったリーベヴィンテの羽衣は、堕ちかけ濁っていた。

　預言が確かであることをもはや認めないわけにはいかなかったが、女神はどうしてもリーベヴィンテを切ることができなかったのだ。

「無理なことです。諦めなさい」

　だが、ブリュントライテとてなにもできずに手をこまねいていたわけではない。

「ふひひ、強がりを。む？　……なんだぁ、これは」

　ヴァーゾルドが忍び笑いを漏らし、申し訳程度に引っかかっていた腰布をまくり上げ、股間を覆った薄絹を剥ぐ。そして、困惑の様子で唸り声を上げた。

　染み一つない肌理の細かさと、呼吸に合わせてたゆたう下腹の柔らかな質感。くびれた腰から両足の付け根にかけては、むっちりと肉が詰まって官能的に張り詰め、牡の欲望を煽らずにはいられない。

　だが、なにより肝心な女神の秘園は、複雑なルーンの描かれた札がその全貌を隠していた。密着した呪符はなだらかな恥丘の形を伝えてはくれるが、牡の進入路を完璧に閉ざしきっている。

　秘所を封じたのは、ブリュントライテとて例外ではなかった。純潔を奪えぬなら悪神へ堕ちる道理はない。

「貴方に私を穢すことはできません」

　みっともなく局部を晒して、それでも表情一つ変えず、戦女神は断言する。だが――返ってきたのは失笑であった。

「なにがおかしいのです」

「戦女神とは存外初心なものだと思ってなぁ。使える穴はまだあるではないか」

　将はしゃがみ込んで女神の股ぐらに顔を寄せる。芋虫のような指を伸ばした先は、呪に護られた女芯ではなく、その更に奥の窄まりであった。

「ひぅっ！　な、なにをするのです！」

「なんだ可愛い声も出せるではないか。どれ男勝りの女神殿に、牝の悦びをお教えしてしんぜましょうぞ」

　くちゃりと、汗とも膿ともつかぬなにかで湿った感触が粘膜に閃く。あまりの気色の悪さに尻肌がぞわりと総毛立った。

　予想だにしなかった辱めに女神は狼狽する。男はその反応を愉しむように、太い指を蠢かせ始めた。

　女神であるブリュントライテは、自らの穢れを祓うことができる。そのため排泄の経験などはほとんどない。

　不浄の穴を曝かれるという羞恥は薄いが、肥え太った醜い牡に触れられること自体が単純に不愉快極まる。そして――。

（この行為に一体なんの意味が……？）

　純潔を司る神でもあるブリュントライテに伽の心得などあるわけもなく、悪神の施す尻穴への接触が『愛撫』であることを理解できない。相手の意図が読めないことは、戦女神を深く苛立たせた。

著者近刊　『肛辱の令嬢ロレンツァ 淫悦に落ちる乙女の涙』『淫辱学園剣姫　穢される誇りと絆』　好評発売中！

きゅっと硬く閉じた菊皺の一本一本までをなぞりまわされ、くち、ぐちゅとおぞましい水音が鳴る。ヴァーゾルドの指は無遠慮にもその洞内にまで先端を潜り込ませ、ねっとりと押すように肉の環を揉む。

「うっ……なるほど気色の悪さで憤死させようと言うわけですか。んっ……悪神にしては頭を使ったようですが、っ……いささか迂遠に過ぎますね……っふ」

「憎まれ口に切れがないぞ？　喘ぎを抑えるのに必死で頭が回らんか？」

悪神の将は得意げに告げ、指を更に深く押し込める。ぞわりと悪寒が腰裏を駆け、女神の眉根が悩ましげによった。

男は脂下がって苦悶の表情を覗き込みながら、裏穴を按摩する。

ずにずにと根元まで異物を押し込まれ、回すように引き抜かれる。でっぷりと指を肥やした脂肪が出し入れにずれて腸壁を這い擦る。嫌みなほどに緩い動きで、染み出す体液を擦り込んでいく。

ビリビリと粘膜面で灼熱感が閃き、女神が一度も感じたことがないような、不可思議なじれったさがその跡に生じた。

「っく……ぅう……ン……ッ」

「どうだ尻穴が熱かろう。ワシの体液は牝を狂わせる」

「下劣な悪神にお似合いの、下劣な力ですね……ッン」

男の自慢顔を睨みつけ、声を抑えようと息を詰める。すると不本意に括約筋がきゅっと窄まり、指を噛みしめてしまう。

ヴァーゾルドはその感触にニタニタと嗤う。指の腹を肛環に押しつけ、狭まった穴を押し伸ばす。ぐにゅりにゅぐりと菊門が楕円に伸びて、男が力を抜くと滑らかに戻った。

「それにしてもよぉく伸びる穴だ。女神様には尻穴便器の才能がおありらしい」

男は感心を装って、卑猥な言葉を投げつける。怒りで視界が真っ赤に染まるほどの侮辱を受けても、縛められて恥を雪ぐ手立てもない。

女神の無抵抗をいいことに、男は調子に乗って陵侮を進める。僅かに指先を曲げて肉壁を刮ぎながら、ずるりと引き抜く。なんのつもりかと訝しむ間もなく、二本束ねてまたねじ込まれる。

「んぅぅおッ！」

耐えきれずに漏らした呻きが低く濁った。

「これは面白い。女神とは獣のような声で鳴くのか」

聞き咎めた将が、ぐりゅぐりゅと指を捻りながらからかう。自身も思いがけない反応を晒したことに羞恥がこみ上げ怒りとなって燃え上がり、白妙の頬が朱に染まった。

一気に倍の質量で肉道を占拠され、蕾にかかってねぢねぢと水音が鳴るほど太い指を蠢かされて、嫌な震えが背筋を走る。男の塗った体液の効果か、麗人の裏穴は急速にほぐれ、肛環も締め付けを失っていく。

（熱い……身体が、熱い……っ）

するとねっとりと赤く腫れた肉壁は、じんじんと甘痒さを訴え始める。潔癖な戦女神を悩乱させる。

押し込めた衝動を吐き出そうと、こぼれる吐息が熱を持つ。鎧に包まれたたおやかな胸元がくねり、白く滑らかな腹部が波打つ。そのたびにむっちりと張り詰めた太股が柔らかく揺れる。

不浄の器官を押し広げられ、戦女神は艶めかしく身悶える。その婉美な姿に獣欲を滾らせた悪神は、尻穴を弄る指使いにいっそう熱をこもらせていった。

「くふふ、やはりなぁ。ブリュントライテよ、ワシらもぬしらも勘違いしておったのかもしれんぞ。戦乙女は純潔を破られ堕ちるのではない」

「んぅうっ、っふ……だったら、なんだという……のですっ、っううンっ」

「淫楽だよ。ぬしらは強い。だが牝の悦びの前に酷く脆い。お前はお前自身の浅ましい肉欲に屈するのだ」

「戯れ言を……っおぉンッ」

将は確信を持って告げ、ねじ込めた指をぐにゅりと膣に向けて押し曲げる。瞬間重たい圧迫感が尻壷に走り、ブリュントライテは細腰を悩ましくくねらせた。

苦しみにも似た痺れの中にまぎれこんだ、どこか甘苦い心地良さ。それをどうしても認めたくないブリュントライテは目にも明らかなほど頬を紅潮させて、憎い敵を睨みつける。

肉欲に屈する？　ありうべくもない。私は戦の知恵と純潔の女神。そのような浅ましい情動とは無縁なはずだ。

己に言い聞かせ腰裏に力を込め、尻穴を息ませ異物を押し出そうとする。まさに排泄の作法であるとも知らぬまま行ったその腸管蠕動によって、ほぐれかけた粘膜は牡の指に絡みつき、余計な疼きを積み増ししてしまう。

豊麗な肢体に見合わぬその初心さ故に、潔癖な女神は抵抗の仕方もわからず未知の感覚に翻弄されていった。

丁度その時、また何者かの靴音が目の前の階段から響く。姿を見せたのは小狡そうな薄ら笑いを浮かべたゴブリンである。その手には四角い盆を持っていた。

「閣下、準備ができましたぜ……」

「よいところに来た。丁度指が疲れてきたところだ」

ヴァーゾルドはわざとらしく嘆き、腹で腸壁を刮ぐようにして指を抜いて女神を悶えさせると、小鬼が掲げ持った盆からなにかを取る。それは両端にかぎのついた二本の帯であった。

男はかぎ爪を菊皺の縁へぐにゅりと引っかける。腰裏を通してもう一端を対角にかけ、もう一本も同様にして。

女神の肛門はXの字に開かれたままにされる。裂けることなく大口を開けた菊口から外気が忍び込んで粘膜を撫

で回す。途方もない錯誤感に恥辱を煽られ、ぞわりぞわりと尻肌が粟立った。

「どうだ見てみろ、女神の尻穴が湯気を立てて開いておるぞ」

「おっほ、こりゃ眼福で」

二人はニタニタと嗤いながら、ブリュントライテの腰裏を視姦した。俗悪な目に嬲られて、赤く充血した肉壁が淫靡にヒクつく。あまりの羞恥に身をよじっても、縛めの鉄環が鳴るばかりで逃れることもできない。

「このような児戯で、戦女神が折れるとでもお思いですか……っ」

せめてもと男らを睨め付けて啖呵を切るが、その声音さえ震えがちの吐息混じりで、戦場で見せる裂帛の気合いは見る影もなかった。

「まさかまさか。これだけいやらしく熟れた身体が、これしきの責めで満足するとは考えちゃおらんよ」

悪意たっぷりに女神の言葉を曲解し、将はまた新たに掌ほどの大きさをした、妙な責め具を両手に摘み持つ。

それはL字を逆さにしたような細い棒であった。真横に折れた先端は、球形に膨らんで小豆色に変わり、まるで生きているかのようにぐねぐねと蠢いている。男が忍び笑いを漏らしながら二つの頭を合わせた。

やはり柔らかい素材でできているらしく、肉瘤はぐにゅりと押しつぶれ——そしてバヂと細い火花を放った。

「な……な、なにをする気ですかっ!」

不吉な光景にさすがの女神も狼狽を露わにし、慌ただしく鎖を鳴らす。

「くひひ、そんなに暴れると手元が狂うぞ」

無為な抵抗を楽しげに眺めながら悪神がかがみ込む。女神の股ぐらを匂いを嗅げるほどの間近から覗き、妖しげな淫具を割り拡げられた尻口に寄せた。

「なりませんっ、そ、そのような……っ」

男の言葉が楔となって、腰をくねらせることすらできなくなる。怯えるブリュントライテの尻穴に、そろりと悪趣味な玩具が差し入れられた。

幸か不幸かぐっぱりと肛門を開かれているせいで、まだその先端は粘膜面に触れてはいない。

顔中から血の気が引いて心臓が嫌な動悸を打つ。浅い呼吸が間断なく漏れ、額に脂汗が浮く。

男は血の気の失せた顔を腰の下から楽しげに見上げ——。

「だ、だめ……いけませ……んぉおおぉおおっ!」

くちゅりと淫具を直腸に接触させた。

瞬間女神の腰が跳ね上がる。

「おっほ、すごい声が出おったな。ほれ、ほぉれ」

「ぉぉおひぃっ! ひぎっ、ひぃいっ!」

悪神は嗜虐的に笑って何度も何度も電流棒を肛門粘膜に押しつけだす。

バヂリ、バヂリと重たい痺れが腸管に閃く。一撃で頭が真っ白になるほどの刺激に、豊麗な女体が打ち上げられた魚のようにビクつく。

白目を剥かんばかりに瞳が上向いて瞳孔が狭まる。尻穴をまねるように開いた口から濁った悶声が長く伸びて地下牢に響いた。

男は飽きることなく肛門に電撃を流し続ける。総身が過剰に力んで強張り、指先とつま先がきつく縮こまる。

(あああ頭が……変になってしまいます……っ)

だが、戦女神を惑わすものは嫌悪や痛苦だけではなかった。

ただの拷問であったなら、これほど心乱されることもなかっただろう。

だが、しどけなく腰元をはだけられ、裏の牝穴をいたぶられていると、得体の知れない衝動がせり上がってくる。

それが被虐の愉悦であるともわからないまま、ブリュントライテの心は肉欲の波に押し流される。

接触のたび身を跳ねさせていた女神は、連続する電流に間断ない痙攣を始め、瘧のようにぶるぶると震える。やがて全身に溜まった圧力が、一挙に噴き上がり——。

「おおぉほぉぉおおおっ!」

ブリュントライテは下品な悶声を上げて意識を飛ばした。

「気を失いおったか。さすがの戦女神様も、尻に電撃を流されるのはこたえるようだ」

ガタガタと震えて突如全身を弛緩させた戦女神の肛門から、将はようやく淫具を引き抜いた。

美貌も台無しに白目を剥いて、口の端から泡を吹くブリュントライテは、男の揶揄に応えることもできず、だらしなく全身をヒクつかせる。

悪神は伸びきった女神を満足げに見やり、尻穴を押し広げた帯を外した。肛環は締まりを失いのろのろといつまでも閉じきらない。男は待ちきれぬとでもいうように、半ば開いたままの菊口に新たな淫具をねじ込めた。

「んほぉっ」

「ワシの唾液を煮固めた張り型だ。起きる頃には溶けきって、女神殿の尻穴をいやらしく造りかえてくれるだろうよ」

緩慢に腰骨をそらして悶えるが、女神の意識は戻らない。男は小鬼を従えて牢を出る。

ブリュントライテは一人取り残される。呪符に護られた牝口から、じょろじょろと小水の漏れる音が虚しく響いた。

——そして再びブリュントライテは目覚める。

「う……。っ……! な、なに!? お、お尻の穴が……ジンジンして……ぇっ」

覚醒と同時に感じたものは、肛門にまとわりついた異常な熱さ。不快にべとついた尻房の最奥から、ただならない痺れの波が間断なく生まれる。

痒いというのが一番近いが、なにかが決定的に違っていた。それは女神を

ビリィィッ
ビリリリッ
きゃああ
ああぁっ
くくく……
しゅるる
ぐいん
や…あぁ
見ないで
下さぁい
ぐいっ
ヒク
あぁ…だめ
犯さないで
お願……い……
ヒヒヒ
白状するなら
今のうちだぞ
ぐ
そぉら
……
ちゅっ
ビクッ
ぬっ!?
がはっ
まさかっ!
そんな所にぃ
毒…がぁあ
ああ…あぁ
ス…
ヒク
ヒク
柔肌を武器に華麗に仕留めるくノ一登場!

これぞ忍法
彼岸花！
美しい花には
毒がある
てネ♡
くノ一艶闘帖
~忍ノ姫、花地獄ニ堕ツ~
漫画 COMIC ぱふぇ
うう…でも
恥ずかしい
乙女の大切な
所を殿方に
触れさせるだ
なんて…
絶対死ぬから
ノーカンよね
今の物音は
なんだ!?
くせ者か!?
出あえい！
いけない！
さっさと
逃げなきゃ

ギギギギ
雪(ゆき)や…我が孫よお主に忍務を命じる
は！頭領様
この密書を奥州の殿様に届けよ
ス
心してかかれよ敵も忍びを雇いおった
何と!?
タッ
タン
ザザッ
私とて忍の里の姫と謳われた身
立派に務めを果たします！
万が一の時にはお主の忍法が役に立つのだ
何人も触れられぬ鉄壁の守りがな
お爺様！
見ていてください！
タッ
タン
タタタ
!!
タタタ
トッ

追っ手か!!
タタ
タタ
タタ
タタタ
やあッ

忍法！
ドロン
ドロドロ
うわああああ
ぎゃあああああ
ええい
ひるむな!!
一斉に
かかれ！
応！
…

きゃああ
ああぁ
シュンンンン
ブラーン!!
く…不覚!!
卑怯者ぉ!
おはなしなさい!
ヌゥ
しめた!
かかったぞ
ガサッ
誰かと思えば
隣村の雪姫嬢
ではないか
み、水葉衆の
頭領!
貴方たち
でしたのね
きゃ!!
ククク
く…
おのれ
面白くなって
きおったわ

ああぁッ
密書をどこに隠した!!
いやあぁ
見ないで！く…このっ
頭領見つかりませんぜ
お前たちよく探せ
あぁっ触らないで
くくく
名の通り雪のような白い肌じゃ
く…っ許さなくてよ！
ほどきなさい！女一人に卑劣な
・・・一度お相手をと思っておったのじゃが…これも忍びの宿命なれば許されよ
ヒヒヒ
戯れ言を

いやぁぁあ こんな格好は…恥ずかしいっ！
見ないで！破廉恥なっ
ギギッ
そんなに嫌がるとは怪しいですぞ
ありませんわ そんな所に隠してなど…
ギギッ
ギッ
ぐい
違います ああっだめ！
しめた！
そんな所にあるわけが
なッ
ちょっちょっと!! 何をしていらして!?
さわ
さわ
さわ
やっ あっ
ただの消毒じゃよ これから
あっ は…っ

調べるためのな！
ひ！
ブ
あ…
あぁ
ぬぶぶっ
いや…っ
いやあぁ
お尻…!?
入って…
は…あ
ぬぐ
さあ密書はどこじゃ～？
ここか？
もっと
奥かぁ？
ぬっぷ
ぬぷ
や…ぁあ
～～～
すんなり入るではないか
さては貴様
コッチで自慰
しておるな
違ぁうッ
そんなのっ
してませ…
違！
ぁ…あ…あ
ひイッ
そこだめ
それ違う
ああぁぁあ
ないですぅ
そっちじゃ
だめ…

エンマ・フラグムと肛淫の迷宮

小説／NOVEL 斐芝嘉和（いしばよしかず）　挿絵／ILLUSTRATION 水月あるみ（みなつき）

　延々と続く曲がりくねった洞窟に、激しい息遣いと乱れた足音が反響する。先行する魔法の灯を道標に、マントの裾を翻してふたりの少女が駆けている。

　先を行くのは緩く波打つブロンドヘアが美しい、エンマ・フラグム。羽織ったマントとブレザータイプの制服から分かる通り、近くにあるトアール魔法学園の生徒だ。ビスクドールのように整った顔は疲労と緊張に蒼褪めているが、円らな瞳にはまだ意思の光が力強く輝いている。

　エンマの背を必死に追っているのは、栗毛を二筋の三つ編みにした眼鏡ッ娘メグ・レプス。クラスメイトのエンマと背の高さは同じくらいだが胸や尻の大きな彼女は、丸い眼鏡が曇るほど息を乱し、足を縺れさせて、いまにも倒れてしまいそうだ。

（私はまだ走れるけど、メグは……）

　心配になったエンマが背後に目を向けた途端、

「きゃ……ッ！」

　メグが岩の窪みに足を取られ、とうとう転んでしまった。

「大丈夫、メグッ!?」

「も、もう……私のことはもう、いいから……エンマだけ、逃げて……」

「なに言ってるの、置いていけるわけないでしょ！　ほら、立って！」

　諦めかけている友人を肩に担いだエンマは、来し方に目を向けてハッと顔を強張らせた。カーブした洞窟の壁面が、うっすら紅く染まってユラユラと揺れている。鬼たちの松明の光が、すぐ傍まで届いているのだ。

　鬼――人間の中にある悪質な要素ばかりを抽出して煮詰めたような、おぞましい存在。獣のように凶暴なうえ、人間並みの知性を有し、弱い者虐めがなにより好きで――。

（捕まったら、なにをされるか……）

　想像するだけで身の毛がよだつ。

　強姦されるだけならまだいいほうだろう。生きながら切り刻まれたり喰われたり、獣と同じ檻に入れられて逃げ惑う様を笑われたり――散々弄ばれたあと、奴隷や家畜として売られたり。

　学園の奉仕活動で鬼から逃れた人たちの救護施設を慰問したことがあるが、五体満足な者はほとんどおらず、いても精神が崩壊していた。自分たちもあんな風になってしまうのだと思うと、恐怖のあまり息が詰まりそうになる。

　幸い、重装備の鬼たちは足が遅い。下品な怒鳴り声は、その威勢の割になかなか近づいてこない――が、

（メグを担いで走るのは無理……）

　かといって、追っ手と戦うのはますます無理――というより無茶、無謀。魔法学園の生徒として初歩的な魔法は習っているが、攻撃魔法は暴発しても安全なようにと悪戯に使える程度のものしか教わっていないのだから。

「ならば……パンタシア・イーレ・ペディプス！」

　柄に蛇の絡みついた装飾のある魔法のスティックを鋭く振って、洞窟の先へ幻影を生む。パタパタと、ふたり分の軽い足音が、エンマたちから徐々に徐々に離れ始めた。

「あそこの窪みに隠れましょう。さあ立って。喋ってはダメよ！」

　メグに囁き、傍の壁面の窪みへ縺れるようにして転がり込む。羽織っていたマントを裏返して自分たちの頭に被せ、身隠しの呪文を唱え――直後、

「っだぐ、どごまで逃げるづもりだ、往生際の悪いガキ共め！」

「嬲り殺じだあど、挽肉にずるぞ！」

　ふたりのすぐ前を、騒々しい一団が駆け抜けていく。足音しか分からないが、コボルト、ゴブリン、オーク、さらにはオーガまでいるようだ。

　トアール魔法学園の生徒であるエンマたちがなぜ鬼の棲む洞窟にいるかというと、メグの相棒・宝石竜のラピスが行方不明になってしまったから。

　エンマの傍らに縮こまり、乱れた息を懸命に整えている幼顔の三つ編み眼鏡ッ娘は、魔法使いの中でも特に珍しい獣使いだ。獣たちが使う言葉を生得的に知っており、ある程度の知性を持つ生き物と意思を交わせる。

　だからメグも、入学当初からラピスを肩に乗せていたのだが、それが数日前になぜか姿を消してしまった。

　獣使いにとって、相棒となる獣は友人以上。精神的な繋がりは兄弟よりも遥かに強く、失えば半身をもがれたように感じるらしい。

　当然、メグの落ち込みようは凄まじく――見ていられなくなったエンマが物捜しの魔法を使い、この洞窟に行き当たったのだ。

「ご、ごめんなさい、エンマ……私のせいで、こんな、ことに……」

「シッ！　静かに！」

　息を乱したまま涙声で謝ろうとする友人を小声で制し、エンマは自らの口を左手で、耳を右手で塞いだ。しばらくの間、不思議そうに友人を見つめていた眼鏡ッ娘は――その意図に気づくと慌てて己の掌に呪文を書き込み、同じように口と耳に押し当てる。

　掌を受話器にする、魔法電話だ。本来、こんな近距離で使う術ではないが、口を隠して話せるから鬼に聞かれる可能性は減るだろう。

「謝るのは私のほうよ。下調べもしないまま、鬼の棲んでいる洞窟に入っちゃったんだから……」

　言葉以上にエンマは、深く反省している。負けん気が強くて世話焼きな性格だから、落ち込んでいるメグを助けようとしたのはいいのだが、

（メグを連れてきたのは大失敗。相棒のいない獣使いは、普通の人とたいして違わないんだから……）

　自分ひとりだったらこんなことにならなかった、とまでは言わないが、少なくとも、メグを危険な目に遭わせずに済んだはず。気弱なクラスメイトが真っ青になっているのは、偏に自分の責任だ――。

　しかし、それを謝ればまた、メグは

自分のせいだと言うだろう。そうしてひとりでなんでも背負い込んでしまうからこそ、世話焼きのエンマとしてはますます放っておけないのだ。
「そんな顔しないで、メグ。私たち友だちでしょ？　メグの大切なラピスは、私にとってもかけがえのない存在よ」
「で、でも……」
「私はメグを助けたかった。メグの力になりたかったの。だってそれが友だちってものでしょ？　もしメグが、自分の問題に私を巻き込んじゃったなんて他人行儀なことを思っているなら、それは私にとって最大の侮辱だわ」
「ご……ごめんなさい……」
　ビクッと首を竦めたメグが、涙に濡れた瞳を伏せる。
（ああ、またやってしまった……どうして私は、こんな言い方しかできないんだろう……）
　大人しく気弱な友人にとって、勝ち気な自分の言動は危険な刃物のようなもの。傷つけまいとして発した言葉でも、往々にして余計に怯えさせてしまう――反省することしきりだが、エンマの知性は場違いな感傷に落ち込むことをよしとしない。
「そんなに謝りたいなら、学園に戻ってから改めて謝ってちょうだい。いまはここから脱出することが最優先よ。さあ、耳を澄ませて。鬼たちの気配がもう少し離れたら、マントを被ったまま移動するわよ」
「う、うん……」
　メグが頷いたとき、軽めの足音が戻ってきた。息を呑んで身を固くするふたりの少女のすぐ傍で、
「……っがじいな、ごの辺の匂いが一番濃いんだが……」
　鬼にしては高めの声が、洞窟に響く。犬顔の鬼・コボルトだろう。小柄で貧弱な体型だが、その鼻は獣並みに利くから侮れない。
　ただし――。
「なにやっでンだ、早ぐ来い！　ガキ共がどっぢに行っだが、デメェの鼻で調べやがれ！」
「いや、だがらごの辺に……」
「そごにはだれもいねぇだろうが！　いいがら早ぐ来い！」
　鬼たちの中では地位が低いらしく、せっかくの鼻も宝の持ち腐れだ。仲間たちに怒鳴られ、急かされて、少女たちから渋々離れていく。
　ホッと安堵しかけたエンマは――。
「ッ⁉」
　いきなり尻をニュルッと撫でられ、思わず飛び上がってしまった。声こそなんとかこらえたが、踏みつけていた石がずれ動き、大きな音が響く。
「おいっ⁉　なんだいまの音はッ⁉」
「うじろがら聞ごえたぞ、捜せ！」
　叫び交わす鬼たちが、騒々しい足音を立てながら戻ってくる気配。
　慌ててしゃがみ込むエンマの、ほどよく引き締まった小振りな尻に――。
　にゅる、ぬちょ、ねちょっ！
　冷たく湿った細長いモノが無遠慮に群がり、傍若無人に這い回る。
　太さは指くらい、数は十か二十か、それ以上か。
　気持ち悪い粘液に濡れていやらしくくねり、しゃがんだエンマの尻や太腿にぬちゃり、ねちゃり。鬼が近くにいるのでなければ、悲鳴を上げて飛び上がっていただろう。
「こ、これ……ショクシュムシよ！」
　耳に当てた掌から、メグの怯えた声。どうやら彼女も、同じように尻を撫で回されているらしい。
　ショクシュムシとはその名の通り、触手を生やした蟲だ。いろいろな種類があるが、たいていはクラゲを逆さにしたような形をしており、洞窟など湿った場所に生息し、生物の肉穴にうねる触手をねじ込んで卵を産みつける習性がある。一応動物だが、あまりにも下等すぎてメグの獣語は通じない。
（やだ、どうしよう……ッ！）
　気丈なエンマが頬を赤らめ、恥辱の予感に身震いする。
　気持ち悪いだけなら耐えられるが、触手蟲はたいてい、少女の大切な場所にも潜り込んでくる。しかも卵を産みつけてくる。
　孵化するまでには数ヶ月あり、その間に適切な処置を施せば身体は平癒するが――おぞましい下等生物に卵を産みつけられたという心の傷は癒えまい。もしかしたらそれは、死ぬより辛いことかもしれない。
　前門の鬼、後門の触手蟲――いずれにしても貞操の危機なのだ。ここにジッとしていても危険なら、思い切って逃げ出すべきだろうか――と。
「待ってエンマ……こ、これ……たぶん、クソクイ……だわ」
「え？　あ……う、うぅッ！　そ、そうね……そう、みたい……」
　身隠しのマントの下、赤らむ顔を見合わせる少女たち。
　くねくねとうねる触手はショーツの縁をこじ開け、下着の中まで入り込んできたが、柔肉の畝には群がってこない。うねうねといやらしく波打ち、尻肌に冷たいぬめりを塗り広げながら、ただただ肛門へ這い集まってくる。
（うぅ、やだ……お尻のお肉が、揉まれ、るぅ……！）
　粘液に濡れてネチャネチャとした、指くらいの太さの肉紐たちが、エンマの尻たぶを揉み回して浅い谷間を掻き分けている。自在にくねる先端を柔肉に軽く喰い込ませつつ、徐々に徐々に尻穴に近づいて、いまにも潜り込んできそうな気配。
　クソクイショクシュムシは糞便を餌とするタイプで、卵を産みつけるにしても尻穴しか犯さない。なんとも穢らわしい習性だが――。
「が、我慢……できる？　メグ……」
「う……うん……」
　掌越しに言葉を交わし、泣き出しそうな顔で頷き合うふたり。
　尻穴を穿られるのは気持ち悪いが、処女を穢されないのはわずかな救いだ。

一方、鬼に捕まれば陵辱の限りを尽くされるのは確実。
選択の余地はない。
蟲に耐えるしかない。
(脱出すればいい、鬼に見つからなければいい……お、お尻だけなら、我慢、できる……！)
そう考え、震える唇を噛んでジッと耐える少女たちの尻穴に——。
にゅる、にゅにゅ……ぬぬっ！
ぬちゅり、くちゅり、にちゅ……。
いやらしくうねる触手が殺到する。丸い先端を震わせて、強張る括約筋を揉み解し始める。
「く……うぅッ！」
意思の力を総動員し、必死に肛門を締めるエンマ。
四方八方から這い寄ってきた冷たく細い感触は、目的の穴に入り込めないと知ると、まるで地団駄を踏むように激しく悶え始めた。
(や、やだ……やだやだ、穢(きたな)い、恥ずかしい……気持ち、悪いッ！)
鬼に犯されるよりはマシ、と覚悟を決めたはずなのに、予想以上のおぞましさに乙女心が悲鳴を上げる。
必死に締めている尻穴に丸い先端がいくつもいくつも押し当てられ、菊の蕾のような細かな皺をキュッキュ、キュッキュッ、としごかれる。穴にまで辿り着けない触手たちはショーツの下にひしめきながら、尺取り虫のように伸縮してエンマの尻肌を揉みまくる。
(多いとは思っていた、けど……いったい何本、あるのよぉ……ッ！)
ハチミツが絡みついた赤ん坊の指で、滅多矢鱈(めったやたら)に撫でまくられ、穿られているような——冷たく濡れた死者の舌に群がられ、執拗に舐めまくられているような——。
緊張した頬に涙がこぼれる。喉の奥から掠れた悲鳴が迫り上がり、わななく唇から溢れそうになる。
震える肩を並べ、おぞましい触手蟲に尻穴を穿られながら、必死に恥辱に耐えている少女たちの前に——。
「いつの間に追い越したんだ？　全然気づかなかったぞ！」
「あいつら、魔法使いの卵だ。目眩(めくら)ましを使ったんだろう」
濁声で言い交わす鬼たちが、足音を響かせながら戻ってきた。そのまま行き過ぎてしまえばいいのに——。
「さっき言っただろ？　この辺の匂いが一番濃いんだよ！」
先ほどのコボルトが足を踏み鳴らしつつ、甲高い声で喚き立てる。
(お願い、止まらないで！　そのまま行っちゃって……！)
エンマの祈りは鬼たちに届かず——。
「おい、見ろよコレ。魔法使いのスティックじゃないのか？」
「この辺りで転(こ)けたのか？　その辺の窪みに隠れているんじゃないか？」
メグが落としたスティックを見つけ、完全に足を止める鬼の集団。
それでも、身隠しのマントを被っていれば絶対に見つからないが——。
(……ッ⁉　あ、ああダメ……は、入ってくる……やだ、やだ……入ってきちゃ、うぅ……ッ！)
激しくくねる触手の先端が、ついにエンマの尻穴をこじ開けた。全身全霊を込めて括約筋を締めているのに、冷たいぬめりが潤滑剤となって、ヌヌ、ヌヌ、ヌヌ——。
少しずつだが確実に、一本の細い肉紐が、肛門の中へ這い込んでくる。
「うっ⁉　く……うぅ……」
侵入を許してしまった菊膜に、冷たいぬめりとは別の、硬くコリコリとした感触。エンマの中に潜り込んだ触手に小さな小さな肉突起が生え出し、蟲の足のように蠢き始めたのだ。
クニクニ、ウニウニ、クニクニ——。
必死に締めている括約筋が、内側から揉み解される。波打つ肉突起の列に直腸粘膜が掻き回され、痛いようなくすぐったいような、恥ずかしいようなもどかしいような——なんとも言えない異様で微妙な感覚が、次から次へと産みつけられる。
(我慢、我慢よ……！)
自分自身に言い聞かせつつ、傍らの眼鏡ッ娘に目をやれば——赤らむ頬を涙に濡らしたメグは、両手で己の口を塞ぎ、雨に濡れた小鳥のように震えていた。エンマに見られていることに気づくと、大丈夫と言う意味なのか、小さな頷きを返す。
(泣き虫のメグだって、あんなに我慢しているんだから……うっ⁉　く、ぁあ……ッ⁉)
新たにした決意を嘲笑うかのように、二本目の触手がヌヌ、ヌヌ、ヌヌ——エンマの尻穴に潜り込み、さらに激しくうねり始めた。
互いによじれ、絡み合い、繊細な直腸を内側から揉みまくる二本の触手。おぞましく下等な生き物に腹の中を掻き回されるという屈辱的な感覚が、エンマのプライドを深く深く傷つける。
と同時に、肛門には相変わらず濡れた指先のような感触が何十本も何百本も群がっている。どこかに隙がないかと、頑なな括約筋をクニクニクニクニ、執拗に揉みまくっている。
(や、だ……いや、ダメ……ッ！)
絶え間なく繰り返される小刻みな愛撫に、エンマの括約筋が蕩け始めた。弛めるつもりなど毛頭ないのに、尻穴が甘く痺れ、はしたない熱を帯びて、徐々に徐々に緩んでいく——と。
「ここにはいない！　ほかを捜せ！」
ふたりの頭上で突然、太い濁声。
身隠しのマントのすぐ上に一匹の鬼が首を突き出し、背後の仲間たちに報告したのだ。
(——ッ！)
首を竦め、思わず互いの身体を抱き合ったエンマとメグは——同時に背を強張らせ、細い肩を震わせた。
(あ……あ、あああっ！　入って、くる……るぅうっ！)
尻穴への注意が逸れた隙を突いて、触手の群れが怒濤の如く押し入ったの

著者近刊　『アリシア 淫獄の姫騎士』『学園戦姫 巴 淫辱の下剋上』『魔戦姫 紗夜 淫辱の闘宴』『トリプルとらぶるプリンセス』『暴れん坊メイドは甘えん坊』『仙獄学艶戦姫ノブナガッ！1～3』『若妻の秘蜜　堕ちゆく美沙子の爛れた日々』『桃色看護日誌　～女医とナースと僕の日々～』ほか　好評発売中！

だ。

　目で見て確かめたわけではないが、感触からすると数十本。冷たい粘液に濡れて気味悪く滑る肉紐が、木の根のように捩れ、蛇のようにのたうって、少女たちの尻穴をグリグリ、グリグリ、グリグリグリ――。

　揺れる先端で傍若無人に菊膜を掻き開き、排泄粘膜を舐めるように愛撫しながら奥へ、奥へ。繊細な直腸の中に潜り込めば複雑に縺れ、絡み合い――熱い腸液を啜って酔うのか、一本一本が嬉しそうに波打つ。

（うぅ、気持ち悪い……ッ！）

　小指くらいの太さの触手が何十本も、腹の中で小刻みに伸縮。エンマの柔らかな腹を内側から揉み解し、捏ね回し――痛くはないが、形容し難い異様な感覚が細波となって下腹に溢れ、尻穴の奥に充満する。

　歯噛みしたエンマの隣で、

「ふ、あ……うぅ……」

　メグもまた、頬を赤らめて呻いた。同じように尻穴を穿られ、奥の奥まで掻き回されているのだろう。勝ち気なエンマでさえ、おぞましさと恥ずかしさでおかしくなりかけているのだから、気弱な眼鏡ッ娘はそろそろ限界かもしれない。

（ダメよ、メグ！　我慢して！）

　友人の肩を強く抱き締め、胸の内に叫ぶエンマ。

　だが、その尻穴の奥にヴヴンッ！と、異様な振動が生じた。

（ッ⁉　な、なに、これ……か、硬い、イボイボ……硬い、疣（いぼ）が……ッ⁉）

　少女たちの尻穴を埋めつくした無数の触手が、その表面にみっしりと小さな疣を生やし始めたのだ。

　そのひとつひとつは小豆くらいの大きさしかないが、それぞれが小刻みに震え、蠢いて、腸液に濡れた排泄粘膜を細かく激しく揉みまくる。

　卵を産みつけ易くするため、苗床を整えているのだろう。

（や、やだ……いや、いやぁっ！）

　恐怖と嫌悪に蒼褪め、ギュッと閉じた瞼の縁から涙をこぼすエンマ。

　しかし一度こじ開けられてしまった尻穴は蠢く触手たちにグリングリンと押し拡げられ、どんなに息んでも締められない。むしろ、息めば息むほど触手たちが悦び、動きを強めて、羞じらう括約筋をさらに激しく、力強く揉み解されてしまう。

（こんなにいっぱいの、しょ、触手、が……わ、私の中で、こ、こんなに、暴れて……）

　柔らかな腹の奥で何本もの肉紐がうねり、悶え――便意に似たもどかしさとこれまで感じたことのない温かな心地よさが、交互に湧く。

　耐え難い恥辱。

　生理的なおぞましさ。

　気弱なメグだけでなく、勝ち気なエンマでさえ、赤らむ頬に涙をこぼし、震える唇をきつく噛む。

　なのに――。

「あ……ふ、ンぅ……」

　両手で押さえた口から微かに漏れたのは、自分でも恥ずかしくなるほど、気持ちよさそうな声だった。

（い……いや、なの、にぃ……気持ち悪いはず、なの、にぃ……ッ！）

　ヴヴン、ヴヴン、と腹に響く異様な振動が、どうしたわけか心地よい。

　絡んでうねる肉紐たちにこじ開けられた尻穴が、内側から揉み解され、甘やかな熱を発して蕩けていく。触手の側面に密生した小豆大の肉疣がヴヴン、ヴヴン、と震えるたび、腹の奥底に快感の波が湧き起こる。

　たいていの触手蟲がそうであるように、クソクイショクシュムシも苗床となる生物を虜にするため、震える肉疣から催淫液を分泌するのだ。密生した肉突起が小刻みに蠢き、うねり、波打つたび――揉み解されたエンマの排泄器官は少しずつ、性感帯に作り替えられていく。

「く……う、ンぅぅ……！」

　どんなに歯を喰い縛り、懸命に抗っていても、グリグリと掻き回された腹の奥には温かな肉悦が絶え間なく産みつけられる。肉疣のひとつひとつから滲み出した催淫液が細かな激震によって直腸粘膜に擦り込まれ、

（や、あ、うぅ……ダメ、ダメダメ、ダメなの、にぃッ！　こんなの、気持ちよくない……き、気持ちイイわけが、ない……の、にぃ……！）

　尻穴に発して背を這い登ってくる桃色の細波に、羞じらう理性がじわりじわりと侵蝕されていく。

　火照る柔肌、上擦る吐息。

　恥ずかしさも、おぞましさも、意識して胸中に唱えていなければついつい忘れてしまいそうだ。

　エンマと同様、傍らの眼鏡ッ娘も、

「ンぅ……ふ、くぅ……」

　桃の実のような美尻をおぞましい触手生物に穿られ、抉られ、淫らに揺らぐ艶めかしい吐息をこぼしていた。

　先ほどまで口を押さえていた両手は、いつの間にか己の尻へと伸びて――。

「え……エンマ、ぁあぁ……ごめん、ごめんね……私、も、もう……」

「だ、ダメよメグ、しっかりして！」

　友人の涙声に焦り、小声で懸命に呼びかけたエンマは、

（え？　め、メグ……？　どうしたの、メグッ⁉）

　眼鏡ッ娘の頬に羞恥以外の表情を見て、思わず息を呑んだ。

　輝くほどに赤らんで、薄闇にも分かるほど艶めかしく弛んでいる。眼鏡の奥の瞳には妖しい光が灯り、揺れて、

「ダメ、ダメなの……もう、ダメ……お、お尻……気持ち、よくて……」

　掠れた小声を紡ぐ唇はぽってりと紅い。白い歯で噛んで必死に閉じようとしているのに、時折ふわっと弛んで淫らな微笑みを浮かべかける。

「だ……ダメッ！　もう少しの辛抱よ！　お願いメグ、しっかりして！」

　淫悦に負けかけている友人の肩を掴

み、懸命に呼びかけるエンマ。

そのとき――バサッ！

頭に被っていたマントが、いきなり剥ぎ取られた。

「ッ!?」

「どこがで声が聞ごえるなど思っだら、ごんなどごろにいだのが」

息を呑んで抱き合う少女たちを見下ろしたのは、乱杭歯を剥き出して勝ち誇った笑みを浮かべるゴブリン。

（し、しまった……ッ！）

触手蟲に尻穴を犯され、惑乱してしまったため、ついつい声が大きくなっていたらしい。

「ずいぶん手ごずらせてぐれだなぁ、お礼にだっぷり可愛がっでやるぜ！」

「いや……やだ、放してぇっ！」

エンマもメグも抵抗虚しく、襟首を掴まれて洞窟の中央へ引きずり出され、硬い岩の上に突き転がされる。

（に、逃げなきゃ……！）

立ち上がろうと必死にもがくエンマは、しかし、四つん這いになることすらできなかった。

「ふぁッ!? く……あ、ああッ!?」

性感帯と化した直腸のあちこちに、これまで以上の激震が湧き、腕や脚から力が抜ける。

激しい姿勢変化に振り落とされそうになった触手蟲がエンマの直腸にねじ込んでいた肉紐を突っ張り、小刻みに振動するイボイボを繊細な粘膜に喰い込ませてきたのだ。

（と……とにかく、起きなきゃ……私がしっかり、しなけれ、ば……）

意思に反して頬が弛み、掻き立てているつもりの闘志が勝手に薄れて消えていく。もがけばもがくほど、焦れば焦るほど、尻にぶら下がった触手蟲が肉紐をうねらせ、エンマの排泄器官に新たな快感を刻み込んでくる。

（め、メグは……）

恥ずかしい感覚を押し殺し、友人の姿を捜せば――。

「おい、ごれ見ろよ！　尻穴に変なモノを生やじでいるぞ！」

「触手蟲の巣に飛び込んじまっだが。ごりゃあいい、手間が省げだな！」

鬼たちに蹴り転がされ、四つん這いになった眼鏡ッ娘は、おぞましい触手に犯された尻を高々と掲げていた。

「お、お尻……いやぁっ！」

腕を曲げ、豊満な乳房を洞窟の床に擦りつけながら、うしろへ突き上げた桃の実のような美尻を右へ左へ打ち振るメグ。エンマ以上に感じていて、とても逃げ出せそうにない。

「へへへ……どっぢもながなが上玉だな。ごれなら喰うより、売っだほうがいいな！」

「う、売るのか？　じょ、上玉なのに、お、おか、犯さない、のか？」

「バガ言え、犯すに決まってるだろ」

「ケツマンコが使えるんだ、好きなだけ嬲ってがらでも処女奴隷どじで売れるだろ？　大儲げだぜ！」

「そ、そうか……う、ウヒヒ……け、ケツマンコ、か！」

勝手なことを言う鬼たちの足下で、

（う……うぅっ！　こんな下品な、鬼たちに……！）

悔しさに歯噛みするエンマ。だが、まだ諦めてはいない。

（メグのあれは演技よ、鬼たちを油断させるための演技……こ、根拠はないけど、そうに決まっている！）

だから、エンマが魔法で閃光を放ち、鬼たちの目を眩ませれば、メグを助けられるかも――。

そう思い、胸の下に魔法スティックを構えたのだが、

「おおっど。物騒だな、お嬢ぢゃん」

傍らのゴブリンに見つけられ、取り上げられてしまった。

「か、返してッ！」

「往生際が悪いな。仲間を見倣(みなら)っで大人しぐしでろ！」

立ち上がろうとした肩を押さえられ、腕や脚を掴まれて――気がつけば頭を下にして尻を天井に向けた、いわゆるマングリ返しの体勢に。

「く……うぅっ！　は、放してっ！　放しなさいっ！」

硬い岩の床に緩く波打つ金髪を広げ、耳の先まで真っ赤になるエンマ。

おぞましい触手蟲に犯された尻穴が、いやらしく笑う鬼たちの目に晒されている。ショーツは一応穿いてはいるが蠢く触手に股布をズラされ、マシュマロのようにプニプニとした割れ目も、数十本の触手をねじ込まれて蕩けるほどに伸びきった排泄孔も、余すところなく丸見えだ。

さらに――。

「ふぁ……ッ!?　く、ンぅうっ!?」

仰向いた尻の奥底に、新たな激震。

光を嫌う触手蟲が松明に照らされ、身悶えし始めたのだ。

エンマの尻穴を犯した肉紐たちが逃げ場を求めるように捩れ、うねり、直腸の中で絡み合う。催淫液を滲ませた無数の小さなイボイボが、駆け足するように細かく振動。

「あ、ああダメ、イヤ……イヤッ！」

何百、何千という肉疣に排泄器官が掻き回され、揉みくちゃにされて、甘く熱い肛悦が次々と爆発する。

（見られてる、見られてる……こんな下品な鬼たちに、こんなにしっかり、見られて、るぅ……ッ！）

羞じらうエンマの意思を無視して、逆さにされた背がくねる。

群がる鬼たちに見せつけるように、仰向いた小振りな美尻が左右に揺れ、上下に跳ね――。

「おうおう、一丁前に尻を振っでやがる。いやらしいガキだな」

「胸も膨らんでいないのに、オ■ンコから涎を垂らじでやがる！」

「う……ッ!?　あ……ぁあっ！」

嘲笑を浴び、己の股間へハッと目を向けたエンマは――艶めかしく火照った肉畝に気づいて耳の先まで真っ赤になった。はしたなく熟れた割れ目の縁にはモチ米くらいの大きさのクリトリスが健気に勃起し、輝くほどに張り詰

めてピクン、ピクン、ピクン——。
「見だ目は可愛いのに、熟れ熟れマ■コか。だいじだガキだ」
「こ、この仔、け、ケツマ■コでイく、へ、変態、なのかな？」
「ち……違う違うッ！　触手蟲のせいよ、変態なんかじゃ……あっ⁉　あぅ、ぁあぁっ⁉」
　咄嗟に言い返そうとしたエンマの声が、途中で裏返り、淫らに波打った。
　尻穴に続けざまに炸裂する、ひときわ鮮烈な激感——コボルトが触手蟲を掴み、乱暴に引っ張り始めたのだ。
「ンぁ、うぅ……くぅうっ⁉　や、やめて……いやぁあっ！」
　尻穴から生えているようなおぞましい生物をぐい、ぐい、と引っ張られるたび、エンマの腹の奥底に熱い快感が爆発する。抜かれまいとして必死になった触手蟲が、無数に生えていた肉疣を吸盤に変え、催淫液で性感帯と化していた直腸粘膜に強く強く吸いついていて——それをコボルトが引くから、
「くッ⁉　あ……ンぁあっ⁉　くヒ、うぅ……ンぎぃ……ッ⁉」
　尻穴の奥に、頭の芯が真っ白になるような快感が次々と炸裂。
（い、痛い……痛い、痛い……のに、気持ち……イイッ⁉　なんで？　どうして……い、痛いのに……ィイッ！）
　逆さに撓められたエンマの背を、稲光のような肛悦が何度も何度も駆け抜けていく。心地よい突風が身体の中に吹き荒れて、意識や理性が突き崩されていく——と。
「ん……ぁあっ！　やだ、やだやだ、い、いぃ……イィッ、クぅうッ！」
　エンマのものではない、鼻にかかった甘え声が、暗い洞窟に反響した。
（ッ⁉　め……メグッ⁉）
　ハッと目を向けた先には、四つん這いの姿勢で背を反らせ、恍惚に蕩けた頬を仰向けて、ぷるぷるぴくぴく震える三つ編み眼鏡ッ娘の姿。
　エンマより一足早く触手蟲を引き抜かれ——その瞬間、どうやら絶頂に達してしまったらしい。
「へへへ……見ろよゴイヅ、お漏らしじやがっだ！　そんなにケツマンコが気持ちイイだか？」
「尻穴がごんなにも大ぎぐぽっがり開いて……ごれなら俺様のチ■ポでも、楽々入るな！」
　下品に笑ったコボルトたちが、先を競うようにしてペニスを振り出す。松明の灯を受けたそれは細く長く、異様に捩れ——黒光りする淫茎のあちこちに、見るからに硬そうな肉疣が、いくつもいくつも生えている。
「し……しっかりして、メグッ！　逃げて、逃げるのよッ！」
「焦るな焦るな。お前もすぐ、アイヅぐらい気持ちよぐじでやるがら」
「え……あっ⁉　あぅあぅ、あグ……ン、ぁああ……ッ！」
　触手蟲がさらに乱暴に引っ張られ、エンマの直腸に鋭い快感が爆発。
　無数の吸盤に吸い立てられた排泄粘膜が、燃え出しそうに熱い。淫らな熱に炙られ、ぐいっぐいっと力任せに揺すられて——。
「や、やめて、やだ……やだやだ、やだぁあっ！　おかしくなる、おかしくなる、お尻の穴、がぁあっ！」
　排泄器官に発した快感の津波が、エンマの理性を突き崩し、羞恥心を押し流していく。
　触手蟲を引っ張られるたび、瞼の裏に真っ白な閃光が爆発。
「う、浮く……浮く浮く……浮いちゃう、浮いちゃう、ああ浮くぅっ！」
　絶え間なく押し寄せてくる快感の激流に手足の感覚が薄れ、上下の感覚もなくなった。自分がどんな姿勢になっているのかも、ここがどこで、だれになにをされているのかも、だんだん分からなくなってくる。
「や……あ、あぁあ……ダメ、やだ、やだぁッ！　飛ぶ、飛ぶ飛ぶ……墜ちる、墜ちるぅうッ！」
　波間に揺れているようでもあり、遥かな虚空に舞っているようでもあり、奈落の底へ真っ逆さまに墜ちていくようでもあり——。
　ただひとつ確かなのは、
「お、お……お尻ぃっ！　お尻、ィィ……お尻お尻……お尻、イィッ！」
　吸盤触手に吸いつかれ、ぐい、ぐい、と外に引っ張り出されそうな直腸粘膜が、燃え出しそうなほど熱い。涙が出るほど痛いのに、なぜかそれが蕩けてしまいそうなほど気持ちイイ。
「だ、ダメ……やめて、やだっ！　お尻が変……変に、な、るぅ……ッ！」
　イッてはダメだ、感じてはダメ——恍惚に弛んだ思考の隅、わずかに残った理性が叫ぶ。
　なぜダメなのかは分からないが、とにかくダメだ。どんなに気持ちよくても、身を委ねてはダメ——と。
「あっ⁉　ンぁ、ンぁあぁ——ッ！」
　——ぷち、ぷちぷちっ！
　必死に吸いついていた吸盤が、とうとう力負けして直腸粘膜から引き剥がされた。勢いをつけて抜け出ていく触手の群れが、エンマの蕩けた尻穴をあられもなく捲れ返し——。
「ぇニャんっ⁉」
ぬ、ぬ——ぬぽぽっ！
　すべて引き抜かれた瞬間、えもいわれぬ温かな解放感が、マングリ返しにされた小さな身体に充ち満ちる。
（あ、ああ、あああ……な、なに、これ……気持ち、い、イィ……）
　わずかに残っていた理性を忘れ、マングリ返しの姿勢のまま、頬を弛めてだらしなく微笑んでしまうエンマ。
「うはっ、ずげぇ！　ケツの穴がユルユルに開いで、奥まで覗げるぞ！」
「ほう……ヌルヌルじだ粘膜が、物欲じぞうに波打っでいるな」
「う、あ……あっ⁉　み、み……見ないでぇえっ！」
　嘲笑われて正気に戻り、頬がカァッと赤らむのに、鬼たちに押さえられた身体は蕩けきったまま。

仰向いてぽっかり口を開いた尻穴に、冷たく湿った洞窟の空気が流れ込んできたのか——触手蟲のイボイボや吸盤に責めまくられていた排泄粘膜が甘やかに蕩けていく。数十本の触手の束によって限界以上に引き伸ばされていた括約筋も、重圧から解き放たれ、心地よい痺れを発して弛緩する。
「どうだ？　チ■ポ入りそうか？」
　笑み崩れた鬼たちが肩を寄せ合い、首を突き出して、すっかり弛んだエンマの尻穴を無遠慮に覗き込んだ。
「あ……あ、あああっ！」
　爆発する羞恥に息を詰まらせ、掠れた悲鳴をこぼして目を瞑るエンマ。
　無数のイボイボに揉みまくられ、催淫液を擦り込まれて感度を増した直腸粘膜に、熱っぽい視線がぞわぞわと這う。粘つく眼差しが幾筋も、奥の奥まで届いてしまう。
「うーん……入り口は平気ぞうだが、奥はまだまだだな」
「どうれ、もう少じ解じでやるか」
　いやらしく笑ったゴブリンが掲げたのは、エンマの魔法スティック。絡みつく蛇を浮き彫りにした柄が、天井を振り仰いで喘ぐようにヒクついている尻穴に向けられ——。
「くっ!?　あ、ああヤダ……わ、私の大切な魔法スティックを、そ、そんな、そんな……あッ!?　く、くぅっ!?」
　魔法使いにとって、愛用の魔法スティックは己の分身、魂のようなモノ。それが穢れた手に掴まれ、穢らわしい排泄孔にねじ込まれる。ゆっくり、ゆっくり——腸液に濡れた繊細な粘膜を押し退けつつ、奥へ、奥へ、奥へ。
「ふぁ、う……ンくぅっ!?」
　骨のように硬く石のように冷たいゴツゴツとした感触に、腹の中を掻き回される。柄に絡みついた蛇のレリーフが、性感帯と化した直腸粘膜をグチュ、ギチュ、と擦り潰しているのだ。
「なにがイヤだって？　ぁあ？　お前のケツマ■コはヒグヒグじで、ごの棒を美味そうにしゃぶってるぞ」
「う……嘘よッ！　そんなの、嘘！」
「嘘なもんか。そら、そら」
「ふぁっ!?　あぅ……く、うぅっ！」
　深く深く挿し込まれたスティックを軽く捻られた途端、逆さに撓められた背筋に熱い電流が駆け抜けた。
　意識が一瞬飛びそうになり、仰向いた美尻が跳ねる。
（な、なんで……どうしてっ!?　お尻なのに、お尻なの、にぃ……ッ!?）
　羞じらう理性を置き去りにして、マングリ返しにされた小さな身体が閃く肛悦に蕩けていく。
「ふ……あ、うぅ……く、うぅ」
　まるで快楽神経の琴線を、直接爪弾（つまび）かれているようだ。排泄孔にねじ込まれたスティックを捻られるたびわななく唇から恥ずかしい声が次から次へとこぼれ出てしまう。
「ぐふふ……ガキのぐせじで、イイ声だ。チ■ポが硬ぐなっぢまうな！」
「ははっ！　見ろよごのうっどりじだ顔！　ケツマ■コを穿られで、イきそうになってやがる！」
「な……なって、ないっ！」
　尻穴の悦びをなんとか抑え、震える声を絞り出すエンマ。
　その傍らで——。
「あぅあっ!?　あ、ぁあ、うぅッ！」
　四つん這いになったメグが細い喉を反らし、赤らむ顔をはね上げて艶めかしい鳴き声を上げた。
「ど、どうしたの、メグ……あっ!?」
　必死に首をねじ曲げたエンマが見たのは、豚顔の鬼・オークに尻穴を犯されている友人の姿。
「や……あ、うぅっ！　やめて、イヤ……お尻はイヤぁあっ！」
　トレードマークの黒縁眼鏡がずり落ちそうになるくらい、メグは激しく首を振る。二筋の三つ編みが鞭のように宙を薙ぎ、硬い岩に突っ張った細腕の間でたわわな乳房が重々しく揺れる。
「め、メグに……なんてことをっ！」
　世話焼きの性格が一瞬、エ■マの全身に充ち満ちていた気怠い絶望感を押し流した。首を捻り、喉を震わせて、鋭く叫ぶ。
「メグから離れなさい、鬼ッ！」
　だがもちろん、エンマ自身にもメグの身を案じている余裕などない。
「ぐふふ、そうか、お前もああじでもらいだいんだな」
「え？　あ？　ち……違うッ！」
「奥までずっがり柔らがぐなっだし、ごんな棒では物足りないよな」
「ふぁ……ッ!?　あ……うぅっ！」
　——ぬぽちゅ！
　仰向いた尻穴から魔法スティックが抜き出され、絡みついていた排泄粘膜が紅々と捲れ返る。
「そう照れるでねえ。いまがらお前を俺だぢの嫁っゴにじでやるでな！」
　笑った鬼たちに抱き起こされ、マングリ返しの姿勢から四つん這いに。
「やだ、放して……放しなさいッ！」
　必死にもがいたつもりなのに、延々と繰り返された肛悦に身体中の力が抜け、緩く波打つ金髪を虚しく揺らすことしかできない。
「小ざいが、いいケツだなぁ」
「あ……うぅっ!?」
　すっかり弛んだ尻穴に節張った指がねじ込まれ、鉤に曲がる。閃く快感を慌てて噛み殺しているうちに、高く高く吊り上げられてしまう。
「うぅ、く……うぅっ！　い、イヤ、イヤイヤッ！　こんな恰好……ッ！」
「嘘をづぐな。ごんなにケツマンコが喘いでいるんだがら、イヤなわげないだろうに」
　激しく左右に打ち振った美尻が、いやらしく笑み崩れたコボルトにガチッと掴まれた。
（お、犯される……ッ！）
　恥辱の予感に身が竦む。
　なのに尻穴にはゾワリゾワリと、さらなる淫悦を期待した淫らな疼きが湧き起こってしまう。
　だが、ぽっかり開いたエンマの尻穴

17世紀
やむ事のない魔女狩りと黒死病の嵐がヨーロッパ全土を狂気と地獄の世界へと変貌させていた
あっ ぎゃあぁあっ
手ぬるい！
そんな事で魔女の本性をあばけるか！
やめでぐだじゃいいいっ
暗黒の狩人
漫画 COMIC／おおたたけし
魔女狩りの名の下に凄惨な責めが――！
審問官様
ここは私めにおまかせを
おお エマ尋問官！
これはいい
ひ…
覚悟せよ 彼女こそ魔を暴く選ばれた神徒！

ふふ
観念なさい
この私に偽りは通じないのですから
っあっ
ぬぷ
ぷっ
な…
なにを…っ

やはり魔女ですね！
そっ
そんな…私知りませんっ
闇と魔に堕ちた子羊よ
この聖珠で汝を清めつくしてあげましょう！
さぁ不浄の穴でのみ込みなさい！
天の御使いより賜りしこの聖珠は穢れた魔力を全て吸収するのです
あっ!?
美しく燃えさかる青き聖炎は深部から魔が焼かれる証!!
あづいっ
おじり
あづい――っ!!

ジュワッ
ジュわわ…
あっ
しみるうっ!!
ふふ
この責苦こそ
神の恩寵!
おしり
やけるーっ
信仰があれば
耐えられるはず!
まだまだ
入れますよ
尻を突きだし
肛門を
緩めなさい
そんないっぱい
入りまじぇ
んーーーーっ!!
大丈夫です
とび出した
子宮口を愛撫すれば
ほらまだまだ
たやすく聖珠を
のみこむわ!
神よ
この者の腹奥に
巣食いし悪魔を
祓い給え!
んがっ
あーっ

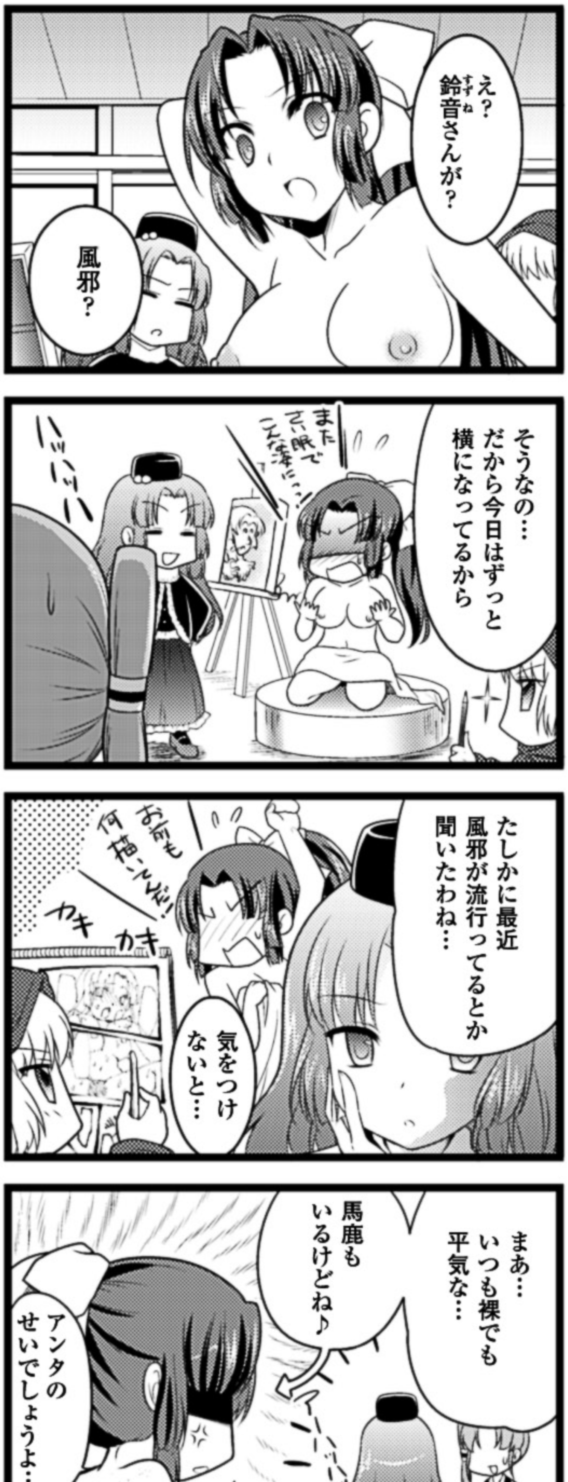
も…
やめで…っ
魔女です…
私魔女だから やめでぐだじゃ いいーーー…
汝が魔に 穢されているのは
わかって います!
おっ
御使い様より賜りし 破魔の触手と共に
この身を挺してでも 汝の悪魔を追い払って やろうというのです!
くっ!
脂汗と直腸汁で ずるずるとは 淫らな穴だ事…
さぁ ありがたき 神棒を受け入れ なさい!
おなか ごわれ るっ
押し込んじゃ あーーっ

重症

お姉ぇ 掃除してきたよー
あら おつかれさ…
ま———っ!! すごい鼻水っっ!!
鈴ちゃん 熱あるんじゃない？
いや… そんな大丈夫だよ お姉ぇ
ちょっと頭が割れそうで 身体がぞくぞく震えて 周りが揺れて朦朧とするだけだから
とにかく…
休みなさいね

季節の変わり目は風邪に注意！
ぶっといお注射されちゃうぞ！
怨霊退散!!
ふたご巫女
十巻
せいいっぱいの恩返し？
漫画 COMIC 嘉納あいら

馬鹿でも風邪はひく



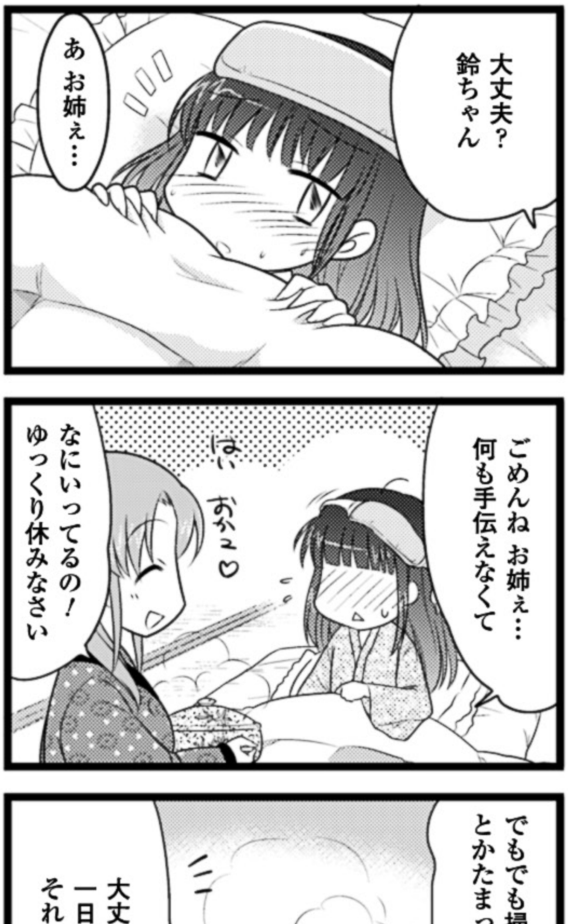
寒気？ 悪寒？

如月珠音
如月神社の双子巫女の姉。おっとり巨乳で、男の霊に憑かれやすい。

如月鈴音
如月神社の双子巫女の妹。霊力は弱いがしっかり者の常識人。

真中
如月神社に押しかけて居候している17歳。珠音の中学時代の同級生。

工事…？



初めてにしては上出来!?

真守（まかみ）
真中の姉。海外からやってきた謎多き女性。催眠術を使う。

死神（しにがみ）
如月神社に居候する死神。極度の対人恐怖症。

悪を討つ赤き女戦士!!
ギッ
お前が首領だな!!
ほう…来たか
イビルバスター・ユウカ
世界の平和を脅かす悪の根源め!
お前の造り出した怪人たちは
赤雷拳聖の名を受け継ぐ
イビルバスター・ユウカが
全て倒したぞ!!
あとはお前を倒して
平和を取り戻す!!
倒す…?
ニィィ…
フッ…フフフッ…
ユーモアのセンスは
抜群のようだな
赤雷拳聖
イビルバスター
ユウカ
evil buster yuuka
漫画 COMIC おぶい
貴様ッ…!!
だが…
スゥッ
!?

くっ…
いつの間…
グラ…
ぐ…あ…ッ
フフフッ…
確かに私の部下は
お前に全て倒された
だが…その時のお前の
戦闘データは全て私の中に
蓄積されている
……ッ!!
そしてお前の厄介な
パワーの源が……
スッ…
あっ…
この胸の
コアだという事もな!!

か…体が…
うまく動かない…
ハッ…
ハッ…
力が…
出ない…
さて…
大人しくなったところで…
グググググ
ビキッ
ビキ…
次は私のコレで
相手をしてやろう
ズイッ
ビクッ
ひっ…
どうした？
嫌なのか？
まぁ私は構わんがね
街にいる人間たちに
手を掛けるだけだ
ぐいっぐいっ
くっ…ううう…
わ…
わかったよ…
なんとか隙を見て
反撃のチャンスを…
ぺろ
ちゅ…
ん…
ちゅ
ううっ…変な味…
はぁん…
れろぉ
んん…
んっ
ぶっ
ちゅ…
ちゅるるる…
ふ…太すぎるよぉ…
んぐっ
ちゅぷ…

紅の盗賊姫レイア
Deep red thief Leia
第二話 待ち受ける淫罠
仮面の怪盗少女の肉体を淫らな罠が苛む！
小説 NOVEL／筑摩十幸（ちくまじゅうこう）
挿絵 ILLUSTRATION／助三郎（すけさぶろう）

一刻も早く仲間を救い出すため時計塔を目指すレイアの前にエリザベートの手下が次々に立ちふさがる。
「逃がさんぞ！　これをくらえっ！」
男たちは武器の他に水鉄砲のようなモノを持っており、そこから媚毒粘液を飛ばして攻撃してきた。通常の攻撃を受けつけないリップルスーツでも、あれだけは苦手だ。
「あなたたちに構っている暇はないのよっ！」
光の鞭が周囲に並び立つ石柱を打ち据えると、桃色の残光を追うようにして、連鎖的な爆発が起こった。
ズドドドドォォオンッ！
「なんだと、ぐわあぁあっ」
柱を失った天井のレンガや積み石が剥がれ落ちて、衛士たちにガラガラと降り注ぐ。
「退きなさい。レッドチェリーは命までは盗りませんわっ」
「うう……な、なんて強さだっ！」
もともと寄せ集めの衛兵である。圧倒的な力を見せつけられて戦意喪失、すごすごと逃げ出した。
「はあっはあっ……ここですわね……」
辛うじて敵を退け時計塔にたどり着いたレイアは、大きく息をついた。
今のところ石化はスーツだけで食い止められていたが、体内に浸透してしまった媚毒成分までは消しきれず、妖しい火照りが臍の裏側にベットリと貼りついている。歩くだけでも股間や乳首がスーツの裏地に擦れて、腰が抜けてしまいそうになるのだ。
この状態での戦闘は予想以上に消耗が激しく、スーツの下は汗でグッショリだった。しかもまだエリザベートという難敵が待ち構えている。
賢明な軍師がいれば一時撤退を進言するだろう。が、レイアはどうしても仲間を見捨てることができない。王家の復興という大義は国民すべての幸福のためであり、誰かを犠牲にして成り立つモノではないという信念がレイアにはあるのだ。それは彼女の強さでもあり、弱さでもあるのだが。
「シャンティ、マリー、待っていなさい。必ず助けてあげますわ」
時計塔上部へ通じるルートを探すのだが、階段は頑丈な鉄格子で封鎖されていた。しかもご丁寧に溶接されており、解錠して進むこともできない。
『ウフウフウフ、道に迷っちゃったの？　よぉく調べてご覧なさぁい』
困惑しているとエリザベートのからかうような声が上から響いてきた。
「わかってますわよ。いちいち指図しないでくださるかしらっ」
肉体の異常を悟られまいと、気丈に反論し別のルートを探す。と、一本のロープが時計塔上層部から降りてきていることに気づいた。勾配（こうばい）はおよそ六十度、上層部は五階上だからかなりの距離をよじ登らなければならない。とは言え鍛練を積んだレイアの身軽さを考えれば、不可能ではないだろう。
『そうそう、それよ。早く上がってらっしゃい、可愛い子猫ちゃ～～ん』
相変わらず神経を逆なでする声が響く。
(どうせまた何か仕掛けているクセに……)
疑念に満ちた目で見ると、ロープは何か液体のようなモノで覆われているではないか。
「これは……？」
指でそっと触れてみると、機械油とは違う透明な粘液で、微かに草のような青臭い匂いがする。
『あら、ばれちゃったわぁ。ウフウフウフ、それはねえ、クロハゼの葉の汁なのよぉ』
「クロハゼ……？」
『知らないのぉ？　クロハゼはね、連邦に自生する野草で、その汁は猛烈な痒みをもたらすのよぉ。もし触れようものなら、三日三晩痒くて眠れなくなっちゃうのぉ。拷問にも使ったけど、何人かは発狂しちゃったわぁ。ウフウフウフ』
「そんなものを……なんて卑劣な……」
壁のトラップにしろこの鎖の仕掛けにしろ、本気ではなく、まるでからかわれているような気がして、それがかえって気位の高いレイアをいらつかせる。
『ウフウフ、どうするのかしら。仲間を見捨てて、逃げちゃってもいいのよぉ？』
「なんですってぇ……っ」
美麗な赤眉がピクンと跳ね上がる。何よりも仲間を大切にするレイア姫にとって、それは最大の侮辱だ。
「馬鹿にしないでくださるかしらっ！　私が仲間を見捨てるわけがないでしょうっ！　こんなモノなんともありませんわよっ！」
赤髪を炎のように逆立て、怒りに任せてロープに飛び移った。
「ハアッ！」
斜め六十度に張られたロープは、ちょうど握りやすい太さだった。毒草の汁でぬるつくけれど、それほど問題はない。
「こんな仕掛けで私が諦めると思ったら大間違いよ。待ってなさい、私を侮辱した罪、必ず償わせてあげますわっ！」
『あぁん、コワイコワイ。じゃあ、うんと痛い目に遭わせてくれるのかしらぁ。ドキドキしちゃう』
「くっ……この変態っ」
『ウフウフウフ、オ[redacted]ンコ濡らして待ってるわよぉ。でわでわぁ』
最後まで小馬鹿にした台詞を残して、音声は途切れる。
「ふん、今に見てなさい。後は上まで登っていくだ

けなんだからっ」
舌打ちしながら、ロープをつかんで身体をグイッと持ち上げる。格好は悪くても尺取り虫のように、少しずつ距離を刻んでいくしかないのだ。
「うあっ……な、なに……この感じ……？」
だが三分の一も登らないうちにレイアはロープの上で立ち往生してしまう。
毒草のロープに擦られる胸や股間や太腿から、予想以上の痒みが湧き起こってきたのだ。
「う、ううっ……もう……かゆく……なって……」
しかも運悪く先の触手攻撃でレイアのスーツは胸の部分が大きく損壊しており、半ば露出した乳の谷間に直接ロープが食い込んでくる。そこに湧き起こる掻痒感は凄まじく、思わず力が抜けて滑落してしまいそうになる。
「くうっ……こ、これしきのことで……負けませんわよっ！」
改めて両手に力を込め、ブルブルと震える太腿できゅっと綱を締めつける。
だが落ちまいとすればするほど、ロープは身体に密着し、毒草の成分を深く塗り込んでくるのだ。
「ハアハア……う、うあぁぁっ……こんな……」
何万匹ものアリに這い回られているようなむず痒さが、絶え間なく全身を襲ってくる。もともと触手の媚毒で敏感になった身には、まさに拷問であった。
そのうえ綱から手を放すこともできないのだから、どんなに痒くてもかきむしることもできない。辛さが倍増し、ドッと汗が噴き出した。
「う、あぁ……どんどん……かゆくなってっ……はあはあっ……早く登らなくちゃ……くぅんっ！」
時間が経てば経つほど状況は不利になると判断し、レイアは気力を振り絞って綱登りを続けた。
「はあっ、はあっ……あ、あれは……!?」
だがさらに半分ほど登ったところで、新たな罠が待ち受けていた。
拳ほどの大きさの鉄球が一定の間隔を開けて数珠繋ぎにロープに連なっているのだ。鉄球からは小さな突起がイガグリのように突き出しており、これを考えた者の底意地の悪さが伝わってくる。
「くううっ……どこまで卑劣なのかしらっ!!」
今更後戻りもできず、先に進むにはこれらを乗り越えていくしかない。
「こんなこと考えつくのは、きっと行かず後家の意地の悪い、肥満体のおばさんでしょうねっ!!」
どこかで自分を見ているであろうエリザベートに向かって悪態をつき、レイアは自棄気味に強行突破を試みる。ぶら下がっていけばとも考えたが、石化の影響で握力が落ちている今、それはリスクが高い。
「うっ、くっ……ハアハア……あうぅっ！」
双乳の谷間をくぐり抜けた鉄球が、お腹をくすぐってさらに柔らかな下腹部に迫る。
「ううう……負けないっ！　私は絶対に、みんなを助けるっ……ハアハア、助けてみせますわっ！」
スカートの下に鉄球が潜り込み、無数のトゲがアンダースコートに食い込んでくるが、先端は丸められて乙女の柔肌を傷つけることはなかった。
「はあはあ、これくらいなら……あっ！」
だが鉄球の仕掛けはそれだけでなかった。聖域に触れた途端に突起から液体がビュッと吐き出されたぼだ。
「う、うぅああ……な、なによ……これ……こんなの……反則ぅ……くぅあンっ！」
それはやはりクロハゼの毒汁であり、下着に染み込んだ粘液は爆発的な痒みをもたらした。
「はあぁぁっ……ふぐあぁぁむ……あ、あそこにぃ……あああ……か、か、かゆいっ……痒いですわぁ……ふあぁぁぁっ！」
思わず漏れそうになった甘い悲鳴を呑み込んで、レイアはロープの上で、鉄球に跨がったままキュウッと身を縮ませた。発狂しそうな痒みをどうにかしたくて、無意識のうちに股間をトゲ球に押しつけてしまう。
「はあぁっ、あぁあっ……こんなこと……あぁぁ……しちゃダメなのに……あぁぁぁっ！」
グリッグリッと淫核を揉み潰されるたび、股間に電撃が走って背筋が反り返る。当然鉄球から新たな媚毒が噴出し、さらなる痒みをもたらす。そしていっそう強く股間を擦りつける悪循環から抜けられなくなる。
「はあっ、ひぃっ……だめ……あくぅっ……こしがとまら……あっ、あっ、あぁあぁぁ～～～っ！」
頭の中が真っ白になり、一瞬何が起きたのかわからなくなる。
「んぐぐ……あ……か……はぁ……っ」
やがて反り返っていた背中がゆっくり前に倒れる。狂おしい切迫感が一瞬にして消失し、代わって倦怠感がドッと押し寄せてきた。目の前で星がキラキラ散って、恥丘全体がジンジンと痺れている。
「はあ、はあ……なんでしたの……今の……？」
不覚にも軽く登り詰めてしまったのだが、性的知識がほとんどないレイアは自分がアクメに達してしまったことも理解できていなかった。
「とにかく……ハアハア……進まなくては……」
身体に受けた衝撃は大きかったが、なんとか難関を突破できた。だが目の前にはまだいくつもの鉄球が待ち構えており、これを乗り越えなければ道は開かれない。
「ううう……絶対、私は負けないんだからっ！　シャンティ、マリー……私に力を貸してっ」
悲壮な覚悟で吠え、レイアは絶望的な闘いを続けるのだった。

その頃、別の部屋でマリーが意識を取り戻していた。

（くっ……ここはどこだ……？）

切れ長の瞳を左右に動かし、長耳を澄まして状況を確認しようとする。そこは人一人がやっと入れるくらいの鉄製の檻の中だった。

「目を覚ましたか、エルフの女よ」

「くっ……お前は……」

気がつくと檻の外から髭の将軍がいやらしい嗤いを浮かべてマリーを見ている。

「ブルゴック将軍！」

マリーの脳内で怒りの炎がゴオッと音を立てる！　ブルゴックはかつてエルフ族を虐待した、決して許せない男なのだ。

だがどうしたことか、膝立ちの姿勢のまま、身体はまったく動かない。

「ううっ、これは……」

手脚は石化され、そのうえ頑丈な首枷が、首と両手首をギロチン台のように拘束しているのだ。さらに首枷と両足首には太い鎖が繋がれており、これでは抵抗のしようがなかった。

「フフフ。女盗賊共め、捕らえてみればなかなかの上玉ではないか。こんな乳のデカいエルフの女は珍しい」

ねちっこい視線がボディラインを舐め回すのを感じて、ゾッと悪寒に襲われるマリー。肩当てなどを残してスーツは完全に溶かされており、染み一つない白い肌や、細くくびれた腰とそこから大きく張り出した臀丘も、隠すモノは何もない。

特に重そうにぶら下がるたわわな二つの果実は、エルフらしからぬ特大ボリュームだ。

「うう……こ、殺せっ。私は辱めなど受けないっ」

「そんなもったいないことはせんぞ。フフフ、お前たち三人ともたっぷりと嬲り尽くし、従順な奴隷娼婦に調教してやろう」

いやらしい視線が双乳に突き刺さるのを感じ、マリーの中で屈辱の怒りが爆発する。マリーの乳房はボディラインからはみ出すほど大きく、乳肌もプリンと張り詰めている。逆に乳輪や乳首は小さく、大きなケーキを飾るイチゴのように愛らしい。

スマートな体型が多いエルフ族において、そのややアンバランスな巨乳はコンプレックスでしかなかった。

「くっ！　貴様はかつて私の村を襲い、私の家族を虐殺した！　死んでも貴様の奴隷になどなるものかっ！」

憎んでも憎みきれない男に純潔を奪われるのだと思うと、はらわたが煮えくり返る。翡翠を思わせる緑眼が肩越しにブルゴックを睨みつけた。

「ほほう、お前はあの村の生き残りか。ならばこそ徹底的に調教し、二度と儂に刃向かえないようにしてやる。まずはあれを見よ」

ゴゴゴゴ……。

壁の一角が持ち上がり、その向こうにもう一つ牢獄が現れた。

「ンあ、ああっ……ひゃめてなノダ……んふぐぅっ……あ、あぁぁん……らめぇ」

「ッ！　この声は……ッ⁉」

声のするほうを振り向くと、自分が入れられているのと同じような檻があり、その中でシャンティが男根を口いっぱいに頬張らされて悶絶していた。

マリーと同じように首枷を嵌められて膝立ちの姿勢をとらされている。さらに唇には開口具が嵌められて、閉じることができない口に肉棒を突っ込まれて目を白黒させている。やはり手脚を石化されており屈辱のポーズのまま動けないでいる。

胴体は石化を解かれているようだが、スーツは装甲以外は溶かされてしまい、まだまだ成長過程の乳房や、リンゴを二つ合わせたようなキュートなお尻、産毛も生えていない初々しいワレメなど、魅惑的な妖精ボディが露わにされている。

「ほれほれ、お嬢ちゃん。もっとお口を動かすんでちゅよぉ」

不気味な裏声を上げ、気持ちよさそうに腰を振って唇を犯しているのは悪徳商人ゾルビオだった。狐のような細面に卑猥な笑みを浮かべ、変態性剥き出しの口調もおぞましい。

「んぶっ……むぐっ……んんむぅっ」

「うひひっ！　この締まりのよさっ！　舌の弾力っ！　これだからドワーフ娘の唇はたまらんっ。ハアッハアッ……そろそろミルクを飲ませてあげまちゅからねぇ」

「あ、あぁぅん……いひゃなノダ……うくっ……んぶぶぅっ！」

後頭部に突き抜けるのではないかと思うほど深く喉を突かれて、シャンティは涙を滲ませて苦鳴を漏らす。

「儂にはちょいと物足りないドワーフ娘だが、あの男のような少女趣味の輩には、需要があるようだ」

「やめろっ！　変態っ！　彼女から離れろ！」

怒りのあまり、気も狂わんばかりに金髪を振り乱す巨乳のエルフ少女。動いてくれない自分の身体が呪わしい。

「落ち着いてよく見ろ。あの娘も楽しんでおるようだぞ」

せせら笑いながらブルゴックは両手を伸ばし、マリーの豊乳をムニュムニュと揉み捏ね始める。重力に引かれてやや垂れ気味の巨乳は、ずしりと両手に響く重量感だ。

「ううっ……さ、触るな……そんな馬鹿なこと……あるわけが……っ」

「うぉぉおっ！　出るよぉっ！　お嬢ちゃんのお口

著者近刊　『筆狩師エリナ　奴隷人形の学園』『聖戦姫ヴァルキュア・シスターズ　～淫闇に堕ちたアイドル～』『奴隷聖徒会長ヒカル2』『沙織　侍姫秘録』『黒薔薇の騎士II』『淫堕の姫騎士ジャンヌ2』『ヴァンパイアスレイブ 陵辱の十字架』『白百合の剣士2』『借金お嬢クリス3』　好評発売中！

にぃぃっ！」
反論しようとするマリーを嘲笑うように、ゾルビオが汚辱の劣情粘液をドワーフ少女の喉に発射する。
ドビュッ！　ドビュッ！　ドビュルルルッ！
「ふっぐぅううう〜〜〜〜〜んんんっ」
大量のザーメンを流し込まれて、シャンティの頭がガクンと跳ね上がる。汚濁の牡精を無理矢理飲まされる苦しさに、表情は嘔吐寸前に歪みきっていた。
「んぐっ……ごきゅっ……あ、ああぁっ……ああっ……みりゅくぅっ……コクコクッ……はぁぁぁあああん」
だが白濁まみれの唇からは、なぜかとろけるような嬌声が迸る。細い喉を蠢かせてザーメンを飲み下すと、うなじから、背中に、そして腰回りへとさざ波のような痙攣が走り抜けた。栗色のおさげがヒクヒクと震えて、その直後――――。
「ぅあああぁっ！　らめぇ……ッ！　はあぁぁっ……変になっひゃうぅノダ……あぁぁ〜〜んッ！」
ビクンッビクンッと起伏の少ない幼児体型の裸身を戦慄かせて、シャンティは絶叫していた。
お臍の下の腹筋がヒクヒク痙攣し、キュンッと縮み上がったワレメから幼い愛蜜がトロ〜リと糸を引いて滴り落ちる。シャンティが口淫だけでアクメ寸前に追い上げられているのは明らかだった。
「クキキキ。そんなにおじさんのミルクが美味しかったかい。匂いも味もしっかり覚えようねぇ」
「ふあぅああ……やらぁ……あひゃ……きたないぃ……や、やめてなノダぁ……あぁあん」
悪徳商人が抜き取った湯気も立たんばかりのペニスをシャンティの童顔に擦りつけてきた。
脱力したシャンティは力なく首を振るばかりで、ほとんど抵抗できない。まるで雑巾のように白濁の残滓や恥垢を塗りたくられながらも、顔はどこかウットリとしているように見える。

「そ、そんな……」
信じられない光景を見せつけられマリーは声を失った。穢らわしいペニスに唇を汚され、あまつさえ男の精を飲まされて感じてしまうなど、あり得ないことだった。
「フッフッフッ。娘の口元をよく見るのだ、デカ乳エルフよ」
小さめの乳頭を指の股にクリクリとつまみながら、ブルゴックが迫る。敏感さを表すように、嬲られ続ける乳肌はほんのり赤く染まり、乳首も尖り始めていた。
「ううっ……やめ……あ、あれは……？」
シャンティの口を無理矢理開けさせている枷の円筒部分が、グネグネと蠢いているではないか。さらによく見ると、頬に巻きついてる四本のベルトも生きた触手なのだ。
「フフフ。あれは連邦で開発された拷問淫蟲でな、女の精気が何よりの好物らしい。あのように女の穴に潜り込んで吸着し、さらなる精気を搾り取るために催淫効果のある媚毒を注ぎ続けるのだ」
「い、淫蟲だと……」
エルフの視力で凝視してみると、まるでナマコか蛭のようなおぞましい蟲が、シャンティの唇に潜り込んでいるのが見えた。寒天のように透き通ったブヨブヨの胴体や、無数にちりばめられた吸盤状の突起が気持ち悪く、見ているだけで鳥肌が立ってくる。
「ウヒッヒ。コイツがあると歯が当たらなくて、抜群に気持ちいいんですよぉ」
「蟲の媚毒に冒されれば、たとえ男を知らぬ清純な処女でも肉棒を求めて、悶え狂う飢えた牝になるのだ。あのドワーフ娘のようにな」
「くっ……私の仲間にそんなものを……この悪魔どもめっ！」
「グフフ。いつまで減らず口を叩けるかな。ほれ」

ブルゴックは懐から瓶を取り出して、マリーの前に置いた。
「ヒッ！」
そこから這い出してきたのはシャンティを責めているのとよく似た拷問淫蟲だった。円筒状の胴体の下方に四本の足が生えており、背の高いヒトデといった感じだろう。それが二匹もマリーのほうににじり寄ってくる。
「もう女の匂いを嗅ぎつけたようだな」
「う、ううっ。来るなっ！　穢らわしい蟲め！　来るなっ！」
金髪を波打たせ、端正な細面を引き攣らせるエルフ少女。しかし四肢を石化された身体では逃れる術はない。
「ギギギッ！」
極上の獲物を見つけて嬉しいのか、円筒の口を大きく開けて淫蟲が鳴く。四本の足をグッと縮こめた後、バネを弾くようにピョンッと跳躍してマリーの双乳の頂点にピタァッと吸いついた。胴体が乳首をスッポリと包み込むと、キュウッと窄まって外れなくなる。さらに四本の触腕も乳房の根元に巻きついてギッチリと締め上げてきた。
グチッ……ムニュッ……ギュッ……モニュッ！
「くうっ！　はなれろっ！　やめろっ！　私にはそんなもの無駄だっ！　はなれろっ！」
蟲は四本の腕でX字に乳肌に貼りつき、さらに胴体部分をポンプのように拍動させて強烈に乳首を吸引してくる。
胴体の中で、乳首と乳輪がゴムのように引っ張られて、乳房は見事な砲弾型となる。その伸びきった先端に、淫蟲の体内からビュッと何かが吐きかけられた。
「ううぅっ……な、なんだ……あ、熱い……っ!?」
「催淫媚毒だ。これでお前の乳は蟲の虜よ」

「……いい気になるな将軍……これくらいで私が……屈服したりするものかっ！　くううっ！」
　媚毒は徐々に乳肌から乳房の中へ浸透し、激辛の香辛料を塗り込まれたような凄まじい効果をもたらした。乳腺の一本一本がピクッピクッと拍動しながら火の粉をまき散らし、双乳全体を加熱させる。豊富な乳脂肪が蕩けだし、今にも引火してしまいそうだ。さらに四本の腕からも媚毒が染み出し、巧みに揉み込んでくるのがたまらなかった。
「気位の高いエルフめ。だがお前もいずれ儂の前に股を開き、甘えた声でおねだりすることになるだろう」
「う、ううっ……ふざけるな。貴様には我が弓矢を喰らわせてやるっ……はぁぅううっ！」
　たちまちこめかみに汗が噴き出し、流麗な眉がねじ曲がる。なんとか蟲を振り落とそうと悶えるたびに、二つの乳果がブルンッブルンッと振り子のように揺れて、互いに弾け合う。だがピッタリ吸いついた淫蟲は離れてくれない。
　チュッ！　チュッ！　チュパッ！　チュゥッ！
「ンうううっ……んむっ……そんなに……す、吸うなぁ……くああぅっ！」
「さすが、エリザベート殿の蟲だ。女の精がどこに溜まっているのか、よくわかっておるようだな」
　さらに蟲の口中にはブラシのような小さな繊毛がびっしりと生えており、それにゾリゾリと乳首を擦り上げられると全身の力が抜けるような快美を味わわされた。
（くうっ……将軍の前で……こんな蟲ごときに……醜態を晒すわけには）
　吸いつき、甘噛みし、揉み上げる。小さな蟲とは思えない多彩な乳責めに、マリーは唇を噛み締めて必死に堪え続けた。
「ククク。エルフのクセにこんなデカイ乳をぶら下げおって。村でも笑い物だったのだろう」
　蟲に締めつけられて西瓜のように張り詰めた乳房をタプタプと揉みながらブルゴックが嘲笑う。
「う、うるさいっ……はあはあ……そんなことないっ……あああぅっ」
　ネチネチとした囁きがマリーの心を抉る。それは忘れてしまいたい心の古傷を的確に抉っていた。
「感度もよさそうではないか。もう乳全体が熱くなって、乳首もピンピンに勃起しておるのだろう。まるで発情した牝牛だな」
　媚毒によってまるでオイルを塗られたようにヌメヌメと輝きだす乳肌を楽しげに撫で回す。
「め、牝牛と呼ぶな……ひぃあ、ああぁぁ――ッッ」
　牝牛と言う最低最悪の侮辱に怒りが燃え上がるが、ギュウッと乳肉を握りつぶすように責められて、たまらず甲高い悲鳴が噴き上がった。
　湧き起こる法悦は乳だけに留まらず、身体の奥深くに突き刺さり、子宮を疼かせ脳幹をビリビリと痺れさせた。
（こ、これほど……スゴイとは……）
　蟲に吸われ、ブルゴックに揉みしだかれ、双乳は恐ろしいほど敏感な性感帯に造りかえられていく。
　劣等感のあまり人目を避け、自分でも触れたことのない乳房に、これほどの快美が潜んでいようとは。
「ガハハハ、いい声で鳴くではないか牝牛。もっと大きく、乳首も太くしてやろう。世界一淫らな牝牛エルフに改造してくれるわ」
「はあっはあっ……ふざけるな……そ、そんなことに……私がなるわけ……ああぁうっ」
「もうこんなに乳が膨らんできたぞ。フフフ、今日中に乳が出るようになるかもしれんな」
「ば、馬鹿なことを……貴様の思い通りになど……ああぅ……なるものかっ……はあはあっ」
　しかしブルゴックの言う通り、媚毒を注入された乳房は内側からの圧迫感によって、一回りは大きくなっていた。
　小さな二匹の蟲に全身を支配されていく恐怖と屈辱と肉悦が、そのまま熱い液体となってマリーの胸に満ちてくる。
「こっちもいい具合だな、牝牛よ」
　ブルゴックはマリーの尻肉を掻き分けて、秘園を暴き出した。
「み、見るな、触るな！　このゲスッ！」
　金色のヘアに飾られた花びらはぽってりと充血して左右に拡がり、濡れた桃色粘膜をキラキラ光らせている。ラビアの厚みや淫核の膨らみ、愛液のとろみは、シャンティよりもずっと大人びており、エルフ特有の透明感のある肌と相まって、男を刺激せずにはおかない。
　本人の意志はともかく、蟲の淫毒によって女肉が発情してしまっているのは一目瞭然だった。
「この感じはどう見ても処女だな。フフフ。どれ、将軍である儂が直々に処女を奪ってやろう。ありがたく思うのだな」
　握りだした剛直をピタリと膣口にあてがう。鉛色に使い込まれた肉槍は、太くエラを張り出し、亀頭のすぐ下にはグルリと一周真珠が埋め込まれている。これまで数えきれない女を泣かせてきた凶器であった。
「うぅぅ……や、やめろっ！　やめろぉっ！　そんなことすれば、貴様の命はないぞっ！」
「いいぞ、抗え、叫べぇ！　うらあぁっ！」
　魂が張り裂けそうな絶叫を無視して、残酷な肉太刀が処女孔に撃ち込まれる！
　ズブズブズブゥ〜〜〜〜〜〜ッ！
「うあああぁぁ〜〜〜〜〜っ！」
　ブチンッと身体の奥で何かが裂け、一生に一度の

激痛に、エルフ少女は肩胛骨をキュウッと寄せて背筋を仰け反らせる。

（こ、こんな男なんかにぃっ！）

荒々しい陵辱に処女膜は無残にも引き裂かれて、赤い鮮血が敗北の証のように石化した太腿を伝い降りていく。憎くて憎くて仕方ない男に処女を奪われるなど、舌を噛み切りたくなるほど最悪の状況だった。

「おおおっ、乳だけではなく、肉壺もなかなか具合がいいではないか。クックックッ。どうだエルフよ、憎い人間の男に処女を奪われた気分は」

少しずつ前後にスライドしながら剛棒が膣内に押し込まれてくる。

「う、ううあぁ……く、口惜しいっ！　貴様は……許さない……絶対に、殺すっ……ンあぁぁっ！」

レイアとの約束も吹き飛んで、マリーは憎悪に満ちた緑眼で睨む。

「あの村のエルフ共も同じようなことを言っていたが、皆儂のチ■ポに屈服して奴隷娼婦として売られていったぞ。ククク」

嘲笑とともにグンッと一際深い一撃がぶち込まれ、亀頭が柔襞を押し広げて子宮の底にドスンと食い込む。

「ンああああぁぁンっ！」

子宮から放たれた快美の稲妻が脊椎を駆け上がり、脳幹を直撃する。憎しみも屈辱も破瓜の痛みも、すべて消し飛ぶほどの凄まじい快感にマリーは瞳を見開いて仰け反った。

「おや、もう牝のヨガリ声が出ているようだが？」

「そ、そんな……あうっ……ことは……あむっ……な、ないぃ……はあぁ、動くなぁ……あぁむっ！」

お腹の中を満たす巨大な質量に圧倒され、それを呑み込んでしまった自分自身に驚かされる。しかも当初の痛みがどんどん小さくなり、血肉をとろけさせる甘美な熱さがジワジワと拡がってくるのが恐ろしい。これも淫蟲のせいなのだろうか。

「ウヒヒッ。将軍様のほうもいい感じに盛り上がっておられますな。ではこちらも……」

精気を回復させたゾルビオが、シャンティの背後に回り込む。ロリコン商人の勃起がツルツルのワレメに押し当てられた。真珠はなくとも将軍に負けず劣らずの巨根である。

「あひゃあぁんっ！　い、いやなノダ……あぁぁ……アひょコに入れられるの……いひゃなノダァッ！」

「もう痛くないでちゅよ。おじさんのチンポは、とっても優しいからねぇ」

「ああ……れも、いひゃなモノはいやなノダぁ」

触手に処女を引き裂かれた記憶が蘇るのか、今にも泣きそうな涙目になるシャンティ。しかしそんないたいけな表情も、男の変態性欲を刺激するばかりだった。

「その顔たまんないでちゅよぉ、そぉらあぁ！」

ズブズブッ、ズブゥ〜〜〜〜ッ！

「ンあああぁぁ〜〜〜〜〜〜〜っ」

有無を言わさず剛直をねじ込まれ、シャンティは栗毛を打ち振って悲鳴を上げた。まだ処女を失って間もない膣穴には、大きすぎる相手だ。

「はああ、この窮屈な感じ、たまらないでちゅねえ。ハアハア……やっぱり小さいドワーフマ■コはよく締まるぅ」

ゾルビオは会心の笑みを浮かべ、未成熟故の狭窄感を堪能している。

「あ、あぁぁ……いやいひゃあ、ああぁっ……なんか……んんっ……へ、変なノらぁ……あぁぁっ」

「クックックッ。気持ちいいんでしょぉ？　お腹の奥までビンビン感じちゃうんでしょぉ？」

「はあぁ、ああん……し、知らにゃい……わからないノダぁ……はあ、あぁぁぁんんっ」

淫蟲のせいなのか、シャンティもそれほど痛がらず、むしろ混乱している様子。肉体の急激な熟成に、精神がついていけないのだ。

「おやおやそんなにぐずって。お口が寂しんでちゅかぁ」

「ンあぁっ！　あぁぁっ！　らメなノダ……あぁぁ……これ、またぁ……おかしくなっちゃうノダぁ……あむぅううぁんっ」

精巧にペニスに似せられた張り型が、淫蟲の開口部からシャンティの唇に挿入される。張り型は驚くほどの深さに達し、おそらく食道付近まで届いているハズだ。

「ああ、やめろ、犯すなら私をっ！」

見るに堪えかねてマリーが叫ぶのだが、男たちはニヤニヤ嗤っているばかり。

「無駄だ。あの男、お前のように大人びた女にはまったく興味がないのだ」

「く……っ」

「淫蟲のおかげでお前もほとんど痛みなく、初体験でヨガリ狂えるのだ。少しは感謝して欲しいものだな。ほれほれ」

剣の腕はイマイチでも、女を責めることに関しては海千山千の強者であった。

「あ、ああっ……やめろ……貴様には必ず……あうう……復讐してやるからな……あぁぁっ……いますぐ、私から出ていけぇっ……くあぁぁンっ！」

浅く深く抽送を繰り返したかと思うと、唐突に最奥をズブリと串刺しにする。もちろんその間には、弱点となった乳房に五指を食い込ませ、根元から先へ向かって搾るように締め上げるのだ。

「ンあぁっ……あぁぁンっ……やめ……はぁう……ああっ……やめろ……はくぅんっ！」

上下の快楽を共鳴させる老獪な淫技に、乙女であ

るマリーが抵抗できるハズもなく、精神の壁に亀裂が走り始める。

「牝牛が発情し始めたな。どんどんいやらしい汁が溢れてくるわい」

　早くもねっとり絡みついてくる蜜襞の感触にニンマリと嗤いながら、ブルゴックはリズミカルに腰を振った。

　ヂュプッ……ヂュプッ……クチュンッ！

「黙れぇ……発情なんて……はぁう……してないい……あっ、あぁぁっ、はぁあああっ！」

　逞しい亀頭に拡張された柔襞を真珠粒にゴリゴリ引っ掻かれるたび、網膜に快楽の火花が散って視界が赤いベールに包まれていく。

（お腹も……胸も……熱い……壊れてしまう）

　ドスンドスンと突き上げられ、乳房が残像を引いて激しく上下に揺さぶられる。肉体が燃え上がるにつれて、乳肉の中にドロドロした淫らのエキスのようなモノが溜まっていくようだ。

「グフフ。また一回り乳が膨らんできたようだな。この乳はすっかり蟲が気に入ったようだぞ」

　張り詰めてますます敏感になる乳肌を指先でギリギリと引っ掻き、淫蟲ごと乳頭をグニグニと揉み潰す。

「ひう、ううっ……あぁぁ……今、胸には……はあはぁぁ……さ、触るなぁ……くああむっ！」

（うあぁ……胸が……胸が熱いぃ……何かが……こみ上げて……弾けてしまうっ）

　過激な吸引と媚毒によって、蟲の体内で乳首は限界を超えて痛いほど勃起させられていた。

　感度も数倍に高められ、チュパチュパと吸引されるたび乳果から放たれる快楽の紫電が、心臓を貫いて子宮に突き刺さり、媚肉をバチバチと甘電させた。

「おお、乳を責めるとマ■コも締まるな。ほれほれ、牝牛エルフよ、もっと儂のチ■ポを締めつけろ。形も大きさもしっかり覚えるのだっ」

　ドスッドスッと肉棒を撃ち込みながら、乳頭に被さった淫蟲をグイッと根元に向かって引っ張る。すると蟲の後部がズルリと剥けかえり、真っ赤なグミ色に勃起したニップルが頭を露出させた。

　久々に空気に触れた乳首先端から電撃のような痺れが伝わってきて、マリーの乳腺の中を駆け巡る！

「ひぃああぁ……あはぁぁ～～～～んんっ」

　思わず色っぽい声が漏れてしまい、マリーは慌てて唇を噛み締めた。だがそれを聞き逃すほどブルゴックは甘くない。

「こんなに乳首を大きくおっ勃ておって、儂にこうされるのが好きか。ホレホレ」

　女がいやがることをするのが大好きなサディスト将軍は、そこを弱点と見極めて二匹の淫蟲ごと乳首をガッシリと握り込み、シュッシュッと激しく扱き始める。

「あ、あぁっ！　ンああ……やめ……そんなに……こ、こするな……あぁぁ……な……何かくるぅ……む、胸の奥からぁ……はあぁぁあっ！」

　灼け串を双乳に突き通されたような乳悦に、首枷が軋まんばかりに胸が反る。

　全身を駆け巡った沸騰血流が、乳頭に集まって淫らな熱量を蓄積させていく。苦しげにパンパンに張り詰めた乳脂肪で、乳房が今にも完熟の果実のように弾けてしまいそうだった。

「フッフフ。もうイキそうだな。ゾルビオよ、同時にイかせるぞ」

「ははっ。お任せを！」

　二人の悪党が息を合わせてラストスパートに突入し、尻肉を打つ音が響きだす。

　パンッ！　パンッ！　パンッ！　パンッ！

「ほうら、ドワーフちゃん。オ■ンコもお口も気持ちイイでちゅねぇ？　ハアハア、今度は下のお口におじさんのミルクを飲ませてあげまちゅからねぇ」

「ンぶぅっ……しょんなにしちゃ……らめなノダぁ……うぐ、むぐっ……お口もアソコもぉ……ミリュクのませないれ……んぐんぐっ……もう変になっひゃうノダぁ……んむぐぅ、ぷはぁぁっ……らめぇ……わらひ、もうげんかいぃ……あぁぁ～～んっ！」

　イラマ張り型と肉棒の同時責めに、シャンティは切羽詰まった喘ぎを繰り返す。もう瞳は焦点を失って、淫靡な責め具に舌を絡めてしまう。幼げな腰もゾルビオの打ち込みにぴったり息を合わせてベリーダンスを踊っていた。

「ハアハアッ！　いきまちゅよぉっ！　下のお口にい、いっぱい飲ませてあげまちゅよぉっ！」

　イラマ張り型を根元まで呑み込ませ、同時にズブリと最奥まで膣肉を抉った。

　ドバドバドバァッ！　ドクドクドクンッ！

「あおぉおおぉっ！　ンおおおぉ～～～～～っ！　イグゥ！　シャンティ、イっひゃうぅ～～～っ！」

　汚辱の射精を受け止めさせられ、シャンティはくぐもった悲鳴と同時に、首をガクンと後ろに反らせる。長大な淫具を呑み込まされた喉がピクピクと痙攣し、そこでも快楽を感じていることを物語っていた。

「んあぁっ……あぁぁ、シャンティ……ッ……くぅああぁ……わ、私も……もう……はぁあああっ！」

　腰骨が前に突き出され、弧を描いて反り返る胸の上で双乳が跳ね躍る。破裂寸前の息苦しさから解放されるには、絶頂するしかないのだと牝の本能が訴えている。

「さあ、お前もイケ。淫乱な牝牛エルフめっ！　種付けしてやるわっ！　ウオォォォッ！」

　ジュブッ！　ズブブッ！　ジュブッ！　ズブズブズブゥッ！

　これでもかと子宮口に連撃を叩き込み、勃起乳頭

をギュウッと搾り上げる。填まり込んだ亀頭がピクピクッと痙攣し、発射態勢を取る。

「や、やめろ……あおぉ……だ、出すなぁ……っ！ あぁぁぁ――――――ッッ！」

蜜肉の快美と乳首の魔悦とが心臓の辺りでぶつかり合い、ドロドロに混ざり合って爆発し、マリーの意識を天井より高く打ち上げる。肉体はもう制御を離れ、泡立つほどの濃厚愛液を溢れさせながら、憎い男のペニスをキュウキュウと締め上げてしまう。

「ウォオッ！ 儂の子種をくらえぇっ！」

ドピュッ！ ドピュッ！ ドビュルルルゥッ！

獣のように吠えた将軍が、エルフ少女の膣内に熱精を注ぎ込む！ 膣内いっぱいに溢れた後、子宮口にドバアッとぶつかった。

「アヒィィィッッ！ く、くるぅっ！ ンあぁぁぁっ！ 熱いのが……胸からぁ……はぁぁぁ……で、出るぅっ！ 出ちゃうぅ～～～～っ！」

淫蟲に責め続けられる双乳の中をマグマのような灼熱感が乳腺を拡張しながら出口を求めて、猛烈な勢いで駆け上がっていく。

「うあぁぁぁ～～～～～ッ！ も、もう……だめぇぇぇ～～～～～～っ！」

熱波の波頭が勃起乳首に達した瞬間

ブッシャアアァァァァァァァッ！――――――。

生まれて初めての母乳が幾筋も乳頭から迸る。乳管を熱い母乳が通過するたび、この世のモノとも思えない快感が湧き起こり、マリーの理性を粉々に打ち砕く。

「フハハハ。母乳を噴きおったわ。ますます儂の好みになってきたなっ」

「あ、あぁぁ……こ、こんなぁ……あぁう」

妊娠もしていないの母乳を噴くという異常事態だが、それを考える余裕すらマリーにはなかった。

「お前もちゃんと名乗りながらイクと言うのだ、それが奴隷の作法だぞ、おらおらぁっ！」

なおもしつこく膣内射精され、乳首を扱かれ、断続的に白濁母乳を噴き出してしまうエルフ少女。

「ヒッヒィィッ！ まだ出りゅ……あぁあ……くるぅっ……アッ、アァァッ……イクッ！ イクッ！ あぁあぁぁ……マ、マリーも、イっくぅ～～ッ！ あぁぁぁ～～～っ！」

プシャッ！ ピュルッ！ プシャアァァッ！

しなやかな腹筋を汗と母乳にまみれさせながら、マリーは母乳を搾りきるようにブルブルッと激しく胴震いした。やがてすべての力を使い果たしたように、がくっと脱力し枷に身を委ねて失神してしまう。

「ヒヒヒ。尋問する前に名を名乗らせるとは、さすが将軍様、素晴らしい責めですなぁ」

「フフフ。余興にしてはなかなか楽しめたわい。残るはリーダー格の赤毛の娘だけだな。グフフ、あの生意気娘もヒイヒイ啼かせてやるわい」

淫らな期待に早くも肉棒を勃起させ、将軍は邪悪な笑みを浮かべた。

「ふうっ、はあっ……はあぁっ……はぁ……っ」

その頃おぞましい地獄の綱登りを完遂したレイアは、息も絶え絶えの状態で最上階へたどり着いていた。

鉄球を越えるたびに未知なる衝撃を味わわされた腰はすっかり萎えて、膝もカクカクと震えが止まらない。足元もおぼつかないほど消耗した身体を、石壁にもたれさせて、なんとか立ち続けているのは彼女の意地だ。

「ウフウフウフ。よくここまでたどり着いたわねぇ。媚毒ロープの味はいかがだったかしら」

そしてレイアを待ち構えるのは、妖しいドレスに身を包んだエリザベートだ。極薄ドレスの下に、おそらく下着もつけていない豊満なボディラインを、これ見よがしに見せつけていた。

「ハアハア、思った通り、厚化粧で品のないオバサンね」

予想とは違って相当な美人だが、意地悪で淫蕩だという点は、正解だったようだ。

武器らしい武器も持たず、孔雀の扇子をヒラヒラさせ、やたら腰をくねらせながらゆっくり近づいてくる。とても戦う格好とは思えないが、レイアは警戒を解かない。

「気の強い娘ね。そんなに頑張るなんて、よほどコレが欲しかったのかしら？」

胸の谷間に輝くネックレスには、紅い大きな宝石が装着されている。おそらく王家の宝玉と考えて間違いないだろう。

「フン。そんなもの関係ありませんわ！ 私は仲間を助けたいだけよ」

「はぁん？ 相変わらず友情ごっこが好きなのねぇ。鉄球に股間をスリスリして何度もイっちゃったのはどこのどなたかしら」

「な、なんのこと？」

侮蔑を込めた眼で見下され、カアッとレイアの頬が紅くなる。猛烈な痒みに、たまらず股間を擦りつけて何度も気が遠くなったのは確かだが、それが絶頂だという自覚はない。幼い頃から生真面目なジェフティ男爵に育てられたレイアは性知識が完全に欠落しているのだ。

「とぼけちゃって。ハハン、さてはあなた処女でしょ。だから自分がイったこともわかってないのね」

「お黙りなさい！ この変態オバサンッ！」

羞恥を怒りで誤魔化すように、レイアは怒号の勢いでエリザベートに突っ込んでいく。

「はあぁっ！ スクリュートライデントォッ！」

一気に間合いを詰めた後、光の鞭を螺旋状に回転させながら必殺の突きを繰り出す。周辺の大気まで

も吸い込む竜巻のような攻撃は、相手に回避も許さない。

ガッキィィインッッ！

しかしレイアが放った渾身の一撃を、エリザベートの派手な扇子が楽々と受け止めていた。

「あははぁっ、こんなものなのぉ？」

孔雀の羽が七色の光の輪を同心円状に煌めかせる。

「なっ……これは……!?」

光鞭の力を打ち消したのは波動。それはつまりエリザベートの扇子に、ハルシオン・ウィップやリップルスーツと同じ原理が使われていると言うことだ。

「ウフウフッ！　貴女に勝ち目はないのよぉっ！」

カウンターの一撃で、ハルシオン・ウィップを弾き飛ばされ、最大の武器さえも失ってしまう。

「それは……どうかしらっ」

だが絶体絶命の怪盗少女の表情には不敵な笑みが浮かんでいた。敵を見下す視線には勝利の確信が満ちている。

「この状況で強がりなど……うっ!?」

バク転しながらマントの下から取り出したのは毒液の水鉄砲。

「貴女が私たちの武器に精通していることはわかっていましたのよ。でも、これならっ！」

間髪入れず、至近距離からエリザベートに向けて引き金を引いた。

「ひぃっ、ぎゃあぁぁぁぁっ！」

波動を無効化する粘液は扇では防げない。頭からぶっかけられ、エリザベートは絶叫した。だがそれも束の間だ。身体が見る見る硬直し、石化していく。

「よ、よくもぉ……こんな、小娘に……ま、負けるなんて……っ」

「命までは盗らないけど、石になって反省しなさい。お宝は頂いていきますわよ」

エリザベートの首にかけられた宝玉ネックレスに手を伸ばす。

だが、その手をエリザベートがガシッとつかむ！

「なっ!?」

「なんちゃってぇ～～～ウフウフウフ。本当に甘ちゃんねぇ」

ピキピキと石になった表面が剥がれ落ち、次第になまめかしい白い肌が露わになる。

「私に毒は効かないわぁ。なぜなら監察官など仮の姿、私は連邦のポイズンマスターなのだから」

身体についた媚毒粘液を指ですくうと、それをチュパチュパと舐めしゃぶり始めたではないか。

「ポイズン……マスター……」

ポイズンマスター＝毒師は、あらゆる毒物や薬物に精通して使いこなす薬師の一種である。すべての毒の効果をその身で試すため、毒への耐性が極めて高く、毒蛇に噛まれても平然としているという。

しかしその危険性故に存在は極めて希（まれ）で、レイアも噂でしか聞いたことがない。

「んちゅ、ぺろぉ……ああン……おいしい……ドロドロして、ピリピリしてぇ……はあん、とっても刺激的なお味よぉ……うっふぅんっ」

「く……っ、だからなんですのよ、この変態っ」

我に返ったレイアが慌てて腕を振り解く。反撃に出ようとするが急激な目眩に襲われ、大きくよろめいてしまう。

「うっ……これは……」

エリザベートにつかまれていた手首に、赤い痣が手の形に浮かび上がっている。

「私の身体に触れた者は、それだけで毒の影響を受けちゃうのよぉ。ウフウフ。くらいなさぁいっ！」

さらに扇を一振りすると、そこから放たれた孔雀の羽が小さな矢となってレイアの胸に突き刺さった。

「きゃあぁぁぁぁ――――――っ！」

ほんの小さな針のハズなのに、クロハゼの毒汁に冒された肌からは、気も狂いそうな激痛が襲いかかり、レイアは身体をくの字に折って悶絶する。

「たっぷり毒が染み込んでるから、普段の百倍くらい神経が敏感になってるはずよぉ。いたぶり甲斐がありそうねぇ」

ヒュッヒュッと扇子が振られるたびに、お腹や下腹に羽矢が撃ち込まれる。

「ひぁっ……きゃうっ！　あきゃあううんっ！」

十本近い羽を刺され、気息奄々（きそくえんえん）の盗賊姫。膝がガクガク震えて、今にも倒れてしまいそうだ。痛みがひどすぎて気を失うこともできない。

「ぅあ、ああっ……わ、私は倒れない……みんなを……助け……なくちゃ……」

それでも決して倒れず、敵を睨み続ける紅眼からは火の粉が噴き出さんばかり。

「まだそんな生意気な眼ができるのねぇ。普通の人間は二本も刺せば気絶するけど、ほんと、感心しちゃうわぁっ！」

トドメの羽矢が足元から急上昇し、レイアの股間に突き刺さる。

「～～～～～～～～～～っっ！」

そこは自虐の綱渡りで、感度が最も高くなっているクリトリスだった。もはや悲鳴すら出せず、レイアは屈辱の急所攻撃にガクンと膝を折り、その場にくずおれてしまった。ピクピクと痙攣する腰の下に生温かい水たまりが拡がっていく。

「あらあら、お漏らししちゃったの？　無様な正義のヒロインねぇ。さあ、楽しい復讐の宴はこれからよぉ。ウフウフウフ」

細めた瞳の奥に無数の淫なる煌めきを宿し、エリザベートは微笑むのだった。

「さあ、吐け！　お前は何者なのだっ？　なぜ王家の秘宝を狙うのだっ？」

うっわぁぁ…!!
広お!
天使のボディガードと
はじめてのおでかけ!
思春期なアダム
第5話
AMAGAI YUKINO
天海雪乃
原作 さかき傘
web 版コミックヴァルキリーでも連載中!
http://www.comic-valkyrie.com/
大きな声ださないの 恥ずかしいわね
ショッピングモールに来るの初めてなんですね
エンジュは人間界に来て日が浅いから当然の反応よね

前号までのあらすじ

すべての女性を支配する〝蛇眼〟に覚醒した睦月は、天使ミカ&エンジュに保護され、同居させられる。そして彼は〝蛇眼〟の効果を証明するため、ミカと初めてのエッチをすることに…。

わっ！わっ！
すごい！
ギシッ
ぽゆっぽゆっ！
ほわっほわっ！
ちょっ…
ちょっと
エンジュ！
静かに
しないと
店員さんに
怒られ…
ギシッ
ギシッ
ジロリ…
ん～決めた！
コレ買う！
絶対買う！
ドキ…
か……可愛い

ちょっと怖い
ところあったけど
悪い子じゃないんだ
同居人だし
ボディガード
してくれる相手
でもあるんだから
何かが
きっかけで
仲良くなれれば
いいのに……
……ふむふむ
大きいベッド
買おうか？
ふにゅう…♡
いまあるのじゃ
狭くてバックで
したとき落ちそう
だったもんねー
!?
ぱっ
リ…
リクライニング
買えました？

買えたは買えたんだけどさ問題発生！
いま使ってるマンション契約誤魔化(ごまか)して使ってるせいで住居として登録されてないのよ
役所いって手続きした状態にしなくちゃ
ポーー
は…はぁ…
…なにやら不穏な単語を聞いたような…
てことでちょっと行ってくるからエンジュと時間潰してて
欲しい物あったら全部買っちゃっていいからねー
…はぁ!?
じゃーねー
ちょっ！ちょっとミカさん！

ミカ
どうしたの？
はは……
えっと…
…その…お腹
すいてない？
？
これナニ…？
ホットケーキ
こうやって
切って食べる
んだよ
む…
めんどくさい
わね……
そうそう
上手上手

はむ…
薄っぺらくて変な食べ物ね……
お…おいひい
ふふっ
……ん なに？
楽しんでるみたいだからよかったなって
僕と一緒じゃ楽しめないかもって思ったから
……べ べつに人間界なんてぜんっぜん楽しくないわよ
フン！
ただ その……
珍しいから退屈しないってだけで

対魔忍アサギ3
NEAR FUTURE KUNOICHI ADVENTURE
TAIMANIN ASAGI 3
～淫獄都市の雌忍～
第二話 刻印闘奴アサギ
催眠刻印によって弄ばれる美体！
小説／Kyphosus（キフォサス）
NOVEL
挿絵／竜胆（りんどう）
ILLUSTRATION
原作／Anime LiLiTH
ORIGINAL

【1】

　その街は、大きなドーム状の空間の中にあった。街の天井は高いが暗い。照明が全て低い位置にあるせいだ。おかげで、立ち並ぶ建物は上向きの陰影を帯びており、不穏な雰囲気を醸し出している。
　道行く人々の顔も、影に隠されている。彼らの顔は皆薄暗い感情にまみれていて、まっとうな社会の住人でないことが一目で分かる。人間だけでなく、牙や角のある亜人種達もそこかしこに見える。
　街の名はヨミハラ。東京の地下に巣食った人魔結託の都市だ。ヨミハラはノマドの日本における根拠地であるだけでなく、裏社会の住人達や、魔界から流れ込んできた亜人種達の巣窟でもある。
　さらに、ここでしか手に入らない邪悪な快楽を求めて、表社会の金持ちや権力者達も密かに訪れる、暗黒の歓楽街でもあった。
　今日もヨミハラの街路は、酒や煙草、あるいは非合法な何かを手にした暗い顔の男達と、派手な化粧の露出過多な娼婦達でざわめいている。
「そろそろパレードの時間だな」
「新人闘奴のお披露目か。どうせまた……」
「それが、今度のは凄いらしいぜ。何でも……お、来たぞ」
　男達は目抜き通りの上手へと顔を向けた。丁度そこに、悪趣味な神輿が姿を現したところだった。神輿は図体の大きな亜人種、オーガ達が担いでいて、彼らの咆哮とともに威勢よく上下している。神輿の上には、一本の御柱を中心として高い櫓が組まれており、頂上まで五メートルほどの高さがある。
「おいちょっと見ろよ……あれ、まさか」
　その五メートルの高さには、新人闘奴であろう半裸の女が拘束されていた。蹲踞のような姿勢でしゃがまされ、後ろ手で枷をかけられている。
「んむっ、ぐっ……うく……あぅうっ……」
　彼女は濃い紫色の、全身にぴっちりとフィットする戦闘服を着けているのだが、あちこちを切り裂かれていて、裂け目から豊かな乳房や引き締まった下腹部を白く露出させている。
　脂が乗りながらも逞しい太腿は拘束具で割り開かれて、その間の秘肉には、巨大な模造ペニスがねじ込まれている。このディルドは、神輿の台座中央に真っすぐ立っている御柱の尖端部そのものだ。オーガ達が神輿を威勢よく上下させる度に、疑茎がダイレクトに突き上げられ、女の雌唇をぎちぎちと出入りする。
「あくうぅうっ！　ふくんっ、くぁあぁっ!!」
　貫かれた女からは、必死に快楽を堪えるうめき声とともに粘液が吹きこぼれる。彼女は艶やかな黒髪を振り乱し、見事な乳房を弾ませて身悶える。そこまでは、この暗黒の街ではよくある光景だった。
「あ、あの女っ……知ってるぞ!?」
「……本当だったんだな、噂は。この目で見るまでは信じられなかったぜ」
　女は歯を食いしばり、つり上がった瞳に弱い炎を点して前方を睨む。アーモンド型の整った顔は紅潮し、汗の浮かぶ額に前髪が張り付いている。
　このヨミハラで彼女の顔を知らない者はいないだろう。仇敵という意味で。
　その時、街中のスピーカーが気取った男の声で鳴り始めた。街を掌握しているノマドの宣伝放送だ。
『ご機嫌いかがかな、親愛なるヨミハラの諸君。本日は、慶事のお知らせがある。そう、偉大なるブラック様と、我らノマドは、宿願への大きな一歩を達成したのだ。即ち日本国政府の実効支配と……忌々しい対魔忍どもの壊滅である!!　見たまえ！』
　ヴゥゥン……
　街を覆う岩盤のドームに映像が投影された。続いて鼻にかかったような、あられもない嬌声が響く。
『うぁっ、ぁあぁあぁっ触手っ触手お■んぽっ気持ちいいのぉおぉおっっっ……!!　赤ちゃん触手っ！　私の産んだ触手っ近親アクメいぃいぃっっ……!!』
　映し出されたのは、神輿の上の女が無数のペニス触手に絡み付かれ、貫かれて狂乱する姿だった。拘束されている彼女は、忌々しそうに目をぎゅっと瞑り、眉間に皺を寄せてそっぽを向く。
『見たかね諸君。これがこの女の……長年の宿敵、対魔忍の頭領、井河アサギの本性だ！　我らノマドは、宿敵アサギをついに陥落せしめたのだぁっ！』
　ワァァァアァアァァアァッ……！
　ノマド！　ノマド！　ノマド……！
　人々は愚かしい声色の歓声を上げた。オーガや亜人種達も一斉に咆哮する。そして神輿が停止して、櫓に梯子が掛けられた。頂上のアサギの隣に、マイクを握った伊達男が登ってくる。
『本日より、このアサギは、ヨミハラの闘奴となるのだ。二十四時より、デモンズ・アリーナにて、デビュー戦となる淫闘試合を行う！　またとない見せ物であるから、諸君も是非観戦したまえ！』
　白手袋を填めた伊達男の指が、隣で脂汗を垂らしているアサギを、気取った仕草で示す。神輿が止まっているので上下動こそないものの、彼女の胎内には御柱のディルドが埋め込まれたままである。
　アサギの汗ばんだ頬は赤く、呼吸は荒い。これからの責め苦に耐えようとしてか、潤んだ目を細めて中空を睨んでいる。整った睫毛がわずかに震える。
　伊達男のアナウンスに、群衆は沸き立った。
「ひゃはぁっ、愉しみだなぁ！　今度はどんな無様を晒してくれるんだぁ？」
「触手にヤられてアヘ顔晒したくせに、今更お高く止まってんじゃねーよ。げらげらげら」
『……さて、諸君の中には、対魔忍に深い恨みを持つものも多いだろう。そこで、試合に先立って、プ

レイベント「マゾ闘奴アサギの鞭打ち会」を今から開催する！　我と思わん者は参加するといい」

　伊達男の呼びかけに、欲望に顔をぎらつかせた男達が、神輿の周りに群がり始めた。

「ようし、一番手は俺だ」

　無秩序に群がる男達の中から、太った中年男が櫓を登り、アサギと伊達男の隣に立った。その手に七十センチほどの乗馬鞭が渡される。

「なあ、鞭だけなのか？　この雌豚に他のことはできないのかい？」

「鞭だけだ。今はな」

　いやらしく笑う中年に伊達男が答える。その会話が耳に入らぬかのように、アサギは黙したままだ。

「ちぇ。まあいいや。そらよっ……！」

　ヒュッ……ビシィィイッッ！

　鋭い音とともに、白い腹に一条の鞭跡が走る。

「つっぁあっ……！　んひぃっっ……！」

　アサギの反応は驚くべきものだった。びくんと仰け反り、全身を戦慄かせる。白い喉から迸った悲鳴は、どう聞いても快楽の声色だった。

「お？　何だぁコイツ、こんなイイ声で鳴きやがって、ホンモノの糞マゾなのかぁ？　ぐふふ……」

　中年は驚き、そして無抵抗の相手を痛めつけるサディストの笑みを顔中に浮かべた。それと同じ嘲笑が櫓の下の観客達にも広がる。

「くっ、うう……っ……こんな奴にっ……」

　魔科医の一週間にわたる触手調教により、夥しい量の媚薬を注入され続けたせいで、彼女の性感は異常なレベルに高められてしまっている。だが、苦痛を快楽として受け取ってしまう彼女の今の有様は、それだけでは説明がつかなかった。

「こりゃおもしれえ。それなら……」

「おっと。鞭打ちは券一枚で一回だ」

「は？　ああん⁉」

　次を打とうとした中年を伊達男が制止する。その時には、彼らの足下に、アサギに鞭を浴びせようとする希望者達が殺到していた。

「対魔忍陵辱動画のディスク一枚につき鞭打ち券一枚封入かよ……相変わらずあこぎな商売だぜ」

「糞っ、買うぜ。買えばいいんだろ！」

「おい、ちゃんと使える動画なんだろうな⁉」

　次峰は暗い目をした痩せ男だった。券を五枚差し出すと、鞭を握ってアサギに振りかぶる。

　パシッ！　ピシュッ！

「あひっ……！　鞭なんかでっ……くっ……ひっ！　気持ちよくなる、なんてっ……」

　鞭を浴びせられるごとに、まるで愛撫されているかのようにアサギは仰け反り、甘い悲鳴を漏らす。突き刺さる無数の視線に応えてか、忍服の破れ目の皮膚が紅潮し、汗をどっと噴き出す。

　シュバッッ！

　五発目を浴びた時には、彼女は目を大きく見開いて全身を戦慄かせていた。

（かはっ、はあっ……私の身体、どうなってるのっ……⁉　気持ちいいだけで、苦痛を全然感じない！　このままじゃ、鞭で……イかされてしまうっ）

　アサギは、惨めな被虐絶頂の予感に恐怖した。しかし彼女の肉体は快楽に染まり、歓喜に震えるばかりだ。忍服を押し上げるようにして乳首が勃起し、ディルドを食い締める雌唇の合間から、とめどもなく粘液が吹きこぼれる。

　その様子に、観衆達の攻撃性が掻き立てられる。

「おいアレ、鞭でイっちまうんじゃねえか？」

「なら俺が決めてやる！　鞭アクメだ！」

「よし十枚だ！　十枚よこせ！」

　続いて、目を血走らせた男が櫓を駆け上がり、司会者から鞭を奪い取って打ち始めた。

　ビュシュッ！　バシュッ！　ブシュッ！

「あがっ、がひっっ、っんくぅっ……‼」

　鞭が赤い跡を白い肌に刻む度に、意のままにならない肉体のせいで、アサギの自尊心が軋み、ひび割れていく。

（駄目っぁぁあっ我慢できないっっ……！　私っイくっ、イかさてしまうっ……こんな場所でっ、ムチなんかでっ……嫌っ、嫌ぁぁっ‼）

　幾ら拒絶しようとしても、彼女の肉体は苦痛を快楽に変えて絶頂に向かっていく。よく締まった太腿と、艶やかな腰が物欲しげに大きく痙攣する。瞳孔が力なく開き、視線があらぬ方を彷徨う。

「おお、もうイくぞ、イっちまうぞアレ」

「とんだマゾ豚だな‼」

「もうちょっと我慢しろよ、俺の番までよぅ」

　櫓の下の興奮した男達が、ぎとぎとと脂ぎった視線とともに、嘲る言葉を投げつけてくる。

「ぐはっいいぞいいぞっ……ようし、そらイケっ雌豚っ！　イっちまえっ！」

　ビュバッ……‼　シュビュッ……‼

「ぎひっ、あひぃっ、あっあああぁぁ……」

　男の渾身の鞭打ちに、アサギはあっけなく果てた。拘束された四肢ががくがくと断末魔の痙攣を見せ、腹筋や背筋がくっきりと浮き上がる。引き攣る口元から唾液が零れ、乳房まで伝い落ちる。

「ひっぎぁあああぁあああぁぁぁぁっっ……‼」

　肺腑の奥からしぼり出すような悲鳴とともに、虚ろな目を大きく見開き、頬を強張らせる。乳首が忍服を突き破らんばかりに勃起し、たわわな乳房が変形しながらうち震える。

「んひゅおぉおぉおっ止まらないっ……！　痛くなくてっ気持ちいいのっ止まらなぇぇえっっ……‼」

　ぶびゅっっ、びゅるびゅるっ……

　戦慄く太腿の間、疑茎を銜え込んだ淫唇の隙間から、夥しい量の粘液が吹きこぼれるのが、櫓の下か

著者近況　公衆無線LANの契約を某SPOTからハリネズミのやつに変更しました。接続ポイントが多いのはいいんだけど、なんでこんなぶつぶつ切れるんだ……

らでもはっきりと見えた。

「は、ははっ……本当にイきやがったぜ、鞭で！」

「豚が！　ザマァないな、雌豚がぁっ」

観客達が口々に叫ぶ。

「やった、イかせたっ、アサギを、あのアサギを俺がっ……ははは、打ち負かしてやったぞっ！」

興奮に目をぎらつかせ、男が喚く。

（ぁあぁっ、イったっ、私っ、鞭で気持ちよくなって、イっちゃったぁあぁっっ……！）

アサギは男達の嘲笑を浴びながら、強制絶頂に悶え果てた。快感と恥辱に目の前が真っ赤に染まる。多数の鞭跡がじんじんと切なく疼く。艶やかな肢体ががくがくと震えて引き攣り、そして脱力した。

「……んはっ、はあっ、はっ……ふぅっ、ううっ……く、こんなことで、私がっ……」

闘奴に堕とされた対魔忍は口惜しげに歯噛みする。だが、彼女の露出被虐は始まったばかりだ。

「ようし、次は俺だ！　たっぷりイかせてやるぜ雌豚対魔忍！　二十枚買ったからな」

「俺は三十枚だ！　覚悟しろよヒャハハッ」

更なる責め苦を加えようと、男達が次々と櫓を登ってきていた。

【2】

四方を打ち放しのコンクリに囲まれた殺風景な部屋に、二人の美女が向き合っている。片方は先ほど町中で晒し者にされた挙げ句、鞭打ち絶頂の屈辱を散々味わわされた対魔忍アサギだ。四肢を奇妙に強張らせているが、目には意志の光が戻っている。

忍服はボロボロに裂け、臍下に、漆黒のハート形の紋様が刻まれているのが見える。

「クク……どうかしらアサギちゃん。催眠刻印のお味は。動けないでしょ？」

そう言うのはもう片方の女、裏切り者の対魔忍にしてアサギを苦しめてきた宿敵、朧である。露出過剰な赤い戦闘服を纏った彼女は、蛇のように舌なめずりをしている。

「……せいぜいいい気になってなさい、朧」

アサギは憎悪の視線で睨み返す。そんな彼女に、朧は、無力な獲物をいたぶるという邪悪な喜びを露骨に表して言った。

「ふふ〜ん、そぉ？　じゃ、刻印のテストね。私の足でも、舐めてもらおうかなぁ？」

「くっ、ふざけるなっ……」

アサギは怒りに顔を歪める。だが。

（か、身体が勝手に動くっ……!?）

膝がコンクリの床に落ち、両手をついて朧の前に踞る。身体にじんじんと残る鞭打ちの疼きが、屈辱感を一層掻き立てる。

「くふふっ、よしよし。心をへし折ってやるのもいいけど、こういうのも悪くないわねえ」

朧がブーツの脚を差し出すと、アサギの形の整った唇が開き、震える舌が伸びる。

「……と、止まれっ、糞っ……！　ぁぁあっ……」

アサギは自分の身体を制御しようと必死だった。屈辱を回避できないものかと四肢を力み、大きく目を見開いている。だが。

れるっ……れちゅっ……

彼女の舌は意思に反して、裏切り者の靴先を這い始めた。これが催眠刻印の効果だった。一週間にわたる冒涜的な責め苦の果てに、魔科医術により彼女の肉体には朧への絶対服従が刻み込まれていた。下腹部の黒いハートはその証なのだ。

彼女はこの催眠刻印により、いつであろうと、どのような屈辱的な行為であろうと、自分の意思とは無関係に実行させられてしまう状態にあった。この先、闘技場で武器を与えられたとしても、反逆は不可能だろう。

その時、部屋のドアが開いた。

「いやいやたいしたものですよ、アサギさん。私の調教触手で堕としきれないとはね。脱帽です」

部屋に現れた丸々と太った魔族を見て、アサギの胸を激情が走る。

（き、貴様はフュルスト！　おのれっ……!!　浩くんを、浩くんを返せっ！）

しかし彼女の舌は宿敵の足を舐めるばかりだ。アサギは辛うじて自由に動く目で、這いつくばった床の上から魔族の男を睨み上げた。

「おや？　その目つき、私の調教に耐え抜いたことを自慢したいのですか？　ふっふふ……そんな格好で勝ち誇られても、対応に困りますねぇ」

嘲る視線でアサギを見下ろす。男の名は『魔科医』フュルスト。アサギの家族にして恋人であった沢木浩介を拉致しただけでなく、捕虜となったアサギに一週間にわたる狂気の調教を施した張本人だ。

（くっ……思い出しても吐き気がする。あの調教のせいで、人間として大事な何かが削り取られてしまったみたいだわ……）

調教による精神的なダメージは大きかった。今、背徳的な行為を強いられたら、たとえ催眠刻印がなくとも抵抗しきれないような気がした。

「私の言った通りでしょ、フュルスト。ま、あれはあれで楽しかったけど」

「貴重なデータが取れたから良しと考えますよ。遠からず、もっと改良してご覧に入れましょう」

そう言ってから、フュルストはアサギに視線を落とし、太鼓腹の中央部から中に手を突っ込むと、ソフトボール大のピンクの肉塊を取り出した。

「ちなみに、貴女の大事な大事な小僧はここにいます。くく……取り返したいでしょう？」

「……浩くんっ……!!」

その肉塊こそは、浩介の変わり果てた姿だった。フュルストの奇怪な魔術により、圧縮されてしまっ

著者近刊　『対魔忍アサギ 恥虐の暗黒遊戯』『宇宙海賊学園ブラックキャット』『もしツンデレお嬢様が我が社の社長になったら』　好評発売中！

ているのだ。フュルストはアサギの目の前でこれ見よがしに肉塊をこね回してみせる。
「あぁあっ、浩くん、浩くんぇっ……！　くっ、糞、動け、動けぇぇっっ……！」
　アサギは目の前のそれを奪還せんと、身体の制御を取り戻そうと必死に試みた。全身の筋肉にありったけの力を込める。体内の『気』を高速で循環させて、そのエネルギーで支配を打ち破ろうとする。
　だが、何をしようとも、催眠刻印は彼女に浩介の肉塊を取り返すことを許さなかった。踞った姿勢を変えることもできず、舌は宿敵の靴を舐め続ける。
（浩くんっ……！　目の前なのに、何もできないなんてっ……！　あ、悪夢みたいだ……）
「あ〜ら、悔しいわねぇアサギちゃん。大事な坊やは目の前なのに、私の足を舐めることしかできないなんて。アハ、アハッ……アハハハハハッ！」
　朧は嘲笑いながら、クナイを取り出す。
「あーおかしい。笑いすぎて喉が渇いちゃったわ。次は血を飲ませてもらおうかな、アサギちゃん」
　悪意まみれの微笑みを浮かべながら、指を鳴らす。
「……ど、どうする気だっ……!?」
　すると朧の操作によりアサギの身体は立ち上がり、クナイを受け取って、左手首に当てた。
（手首を、切らせる気なの？　こんな状況で……）
　アサギは内心の動揺を必死で押さえ込む。自傷行為に使う剃刀（かみそり）などと異なり、武器であるクナイの切断力は高い。動脈切断による失血死の可能性が十分にあった。自分の身体を制御できない以上、ここで無駄死にしてしまうという不安に駆られたのだ。
　しかし彼女の恐怖を無視するかのように、クナイを握った右手はゆっくりと真横に動いていく。
　ブシュッ！
　血管が切断され、赤い飛沫が飛び散った。朧がうっとりと目を細めてそれを浴びる。
「くっ……え、何……何でこれ……!?」
　一方、アサギの身体には、ずきずきと疼くような痺れが広がり始めた。
（な、何これ？　傷が、出血が……気持ちいい!?）
　傷口から血液が噴き出すごとに、彼女の腕から胸にかけて、快楽がずきずきと広がるのだ。
「催眠刻印の応用ですよ、アサギさん。痛覚を快感に合流させる、知覚偽装をしているのです。先のパレードでの鞭打ちもそれです。痛みや苦しみを愉しみにできるなんて、おトクでしょう？　クククッ」
　フュルストが醜く笑いながら言う。
「知覚偽装は開発中の技術ですが、こんなマゾ改造まがいではなくて、もっと高度な応用が遠からず可能になります。お楽しみに」
「ところで朧さん。そろそろ止めないと、試合前に失血でダウンしてしまいませんか？」
（そ、そんなこと!?　あぁでもっ、どんどん気持ちよくなるっ……血が、止まらないのにっ……）
　血潮をうっとりと浴びていた朧は、フュルストの言葉に不満げな表情をした。だが、アサギの右手が操作されて、左脇下を強く抑えて止血する。
「ふむ。では、ピクリン酸を塗って差し上げましょう。抜群の止血効果があります。フフフ……」
　フュルストが綿棒で黄色いどろりとした液体をアサギの手首の傷に塗り付ける。その瞬間、強烈な雷撃が彼女を襲った。
「っがひゃぁあぁぁぁぁっっっ……!!」
「この濃度だと、普通なら気絶するほどの苦痛ですが……ククッ、今の貴女なら堪らない快楽の筈。ああ、止血効果は本当ですからご心配なく」
　にやにやと笑いながらフュルストが言う。
「あがっ、ぎひっ、あぎぎぎぎっ……」
　綿棒が傷口に高濃度ピクリン酸を擦り込む度に激しい快感が迸り、アサギは電気椅子で処刑される囚人のごとく痙攣した。しかし催眠刻印が、彼女が倒れることを許さない。
「良かったじゃないアサギちゃん。高名なフュルスト先生に手当してもらえて、ププッ」
　頬の血を舌で舐めとりながら朧が嘯（うそぶ）く。
（て、手当ってっ、そんな……くっ、すごく痛い筈なのにっ、なのに来てるっ……あぁあっ来ちゃってるのっ気持ちいいのがぁぁあっ……も、もうっ……こ、こんなので、イっちゃうっ……!?）
　目も眩む快楽の激流を流し込まれても、抵抗を許されないアサギは、ただうち震え、屈辱絶頂を待つばかりだった。だが、その時。
「あら、そろそろ時間だわ。フュルスト、もう血は止まったでしょう？」
「おや、これはしたり。では治療終了です」
　絶頂を目前に、苦痛の塗り込みは中座してしまう。堪らぬ切なさを残して。
「はぁっ、はっ……え……あ……」
　荒い息を吐きながら、アサギは思わず顔を上げてしまっていた。
「やあねえ、そんな物欲しそうな顔しないの。クク、アハハッ！　だったら試合で負ければいいのよ。好きなだけ犯してもらえる筈だからね、淫乱雌豚のア・サ・ギちゃん♪」

【3】

　デモンズ・アリーナは、ヨミハラ中枢施設である闇の宮殿の中に設置されている。サッカー・グラウンドほどの広さの、四方を壁に囲まれた四角い闘技場があり、その上から悪趣味にごてごてと飾られたスタンド式観客席が見下ろす構造になっている。
　その客席は満席だった。興奮した男達、鼻息の荒い亜人種達、脂ぎったVIP達が欲望に濁った瞳で暗い闘技場を見下ろしている。
『それでは、本日の頂上戦を執り行う！』

アナウンスが響いて、観客達は待ちかねたとばかりに歓声を上げた。
『出場者は、まずは……新人闘奴アサギ。そう、あの対魔忍アサギだ！　こやつは、我らが偉大なる指導者、エドウィン・ブラック殿の前に膝を屈し、闘奴として生き長らえることに縋りついたのだ！』
　スポットライトが闘技場の中央を照らす。そこには、一本の鉄柱に、立ったまま後ろ手でくくりつけられているアサギの姿があった。それを見て観客達の興奮は一層高まる。
「出やがったなこの雌犬が！　くたばれ！」
「這いつくばれ、犯されろ！　ヒャオォォ」
「気取ってんじゃねーぞ、この淫乱が！」
　彼らの罵声も耳に入らぬかのように、アサギは目を伏せ、表情を殺して、引き締まった腹でゆっくりと呼吸している。
　彼女の下腹部では、先ほどのお預けのせいで、ずきずきと切ない衝動が疼いたままだ。全身には調教と鞭打ち、失血のダメージが蓄積している。しかし、それらを感じさせない落ち着きぶりだった。
　アサギの着けている濃紫の忍服は無傷のものに換えられている。他に装備はないが、試合用なのだろう、目の前の地面に一振りの刀が置かれている。
（……どういう相手と戦わせる気なの？　いや、対戦相手よりも、催眠刻印のほうが問題だわ。朧が妨害してこない筈がないもの）
　朧の性格から考えて、アサギに屈辱を与える機会を逃すことはないだろう。
『……対するは、軍事ハイテクの結晶……！』
　アサギは目前の闇に力強い存在を感じ、思わず背筋を緊張させた。
（これは……!?　まさか……）
　その威圧感に彼女は覚えがあった。それは、今のコンディションで戦うには厳しい相手である。ましてや、朧がいつ妨害してくるか分からない状況だ。
『強化外骨格、雷電っ！』
　もう一条のライトが照らし出したのは、複合装甲で全身を覆った鋼の魔人だった。魔界技術を導入された次世代機械化歩兵は、刃を通さぬ重装甲と、対魔忍並みの敏捷性を備えた、恐るべき難敵だった。
「おお……強化外骨格なんて初めて見るぜ」
「対魔忍も所詮は人間、これで勝つる」
　思わぬ最新兵器の登場に観客達も驚愕し、期待の声を上げる。
　一方アサギは、雷電の姿に違和感を覚えた。一つはオリジナルの雷電にはないパーツが股間に追加されていることだ。それは、戦車の砲弾に似た、長さ三十センチ強の先の丸い円柱体だった。だが、そのパーツ以外にも妙な違和感があった。
『では、ルールを説明しよう。今回は変則マッチだ。闘奴アサギは、雷電の搭乗者を殺すか、行動不能にすれば勝利となる。雷電の勝利条件は……』
　アナウンサーが喋る。すると。
ギュイイィィンン……
　これ見よがしに股間パーツが回転した。
『このマシンディルドで闘奴アサギを犯すことだ！　ヴァギナでなくアナルでも、口でも、土手っ腹をぶち抜いても構わない！　そして、闘奴アサギが敗北後に生存していた場合……諸君のお楽しみ、恥辱刑が科せられる！』
「そりゃいい、いいぞいいぞ、雷電！」
「やれ、対魔忍の雌犬をやっちまえ！」
　観客達がわっと盛り上がる。
（全く、うんざりするほど下劣な連中だわ）
「クク、グギギ……ドウヤラ生カシテ勝ツノヲ期待サレテルナ……ギヒ……任セロ……」
　ぐつぐつと汚泥を煮たてるような声が、雷電から聞こえる。その中には人間の兵士がいる筈だ。
『では、両者前へ！』
　ガチャン……
　アサギの拘束が解除された。自由になったアサギは、目の前に置かれた刀を手に取る。
「……これを得物にしろということ？」
　それは対魔忍が使う忍刀だった。反りのない刀身は漆黒で、刃渡りは一メートルを超える。背側に幾つか小さな孔があるのは、振った時の空力特性を向上させるための構造で、ここ一、二年の五車学園の支給品の特徴だ。
　だが、その刀には酷使の形跡があった。刀身にはひびが入り、至る所にべっとりと血糊がこびりついている。奇妙なことに、柄にくっきりと歯形が刻み込まれていた。
（こんなにぼろぼろになって……どんな戦いがあったの？　やはり五車町は落とされてしまったの？）
　アサギは、酷使された刀を苦渋と不安の視線で見つめた。外部に持ち出されることの少ない学生用の刀がここにあるということは、対魔忍の本部がある五車町、そして自身が学園長を務める五車学園が良からぬ状態であることを意味していた。
　任務とはいえ、その場に居合わせることすらできなかった自分が歯痒かった。
『さて会場の諸君、賭けはお済みかな？　うむ、よろしい。それでは……ファイッ！』
　カァァァン……！
　ゴングが鳴り、照明がステージを照らし出す。
　アサギは軽く腰を落とすものの、まだ刀を構えない。刀身のひびを考えると、確実に装甲の隙間を貫かなければ、一撃で折れてしまうだろう。そこに。
「ガヒャアァアアァァッ……！」
　鉄色の暴風が飛びかかってきた。アサギは斜め前に飛び込むようにして回避する。
（速い……けど……？）

雷電の通過した空間に奇妙な異臭が残り、アサギは眉を顰めた。

ドドドッ……！

雷電はそのまま十メートル近くを滑走してから停止する。その力強さに観客達がどっと盛り上がる。

「ギャホォオォオオォッ……！」

雷電が折り返して再度突入してくるのを、朧の妨害を織り込んで大きめに避ける。アサギの胸中の違和感はさらに強まっていった。

（変だわ。スピードは同じでも、動きが雑すぎる。前に戦った雷電は、もっと精緻な動作だった。これじゃ単なる酔っぱらいよ。隙だらけじゃない）

戦闘前の兵士に興奮剤や麻薬を与えるのはよくある話だが、今の動きからは、到底そうは思えなかった。そして、雷電から漏れているらしき異臭は、つい最近嗅いだことのあるものだった。

（これは……くっ……あの時の臭いだわ）

忌まわしい記憶が蘇る。フュルストが彼女の調教に使った触手魔物と同じ臭いなのだ。

「ギギ、グヒヒ……オ前……オ前モ、アノ雌豚ドモノヨウニ、ヒイヒイ言ワセテヤル……クク」

アサギに向き直った雷電が言う。舌が長すぎるような、どうにも喋りにくそうな声だった。

「……どういう意味!?」

「俺ハ、コノ雷電デ、五車町攻略作戦ニ参加シタノサ……ゲヒッ……ソノ証拠ニ俺ノ、プレシャスメモリーヲ、見セテヤル」

すると、闘技場の上に巨大な映像が現れた。

「……！」

戦闘中にもかかわらず、アサギの視線はその映像に吸い寄せられていた。それは、二人の女性が裸で拘束され、多数の男達に嬲られている画像だった。

「さくらっ！　紫っ！」

アサギは思わず叫んでいた。辱めを受けているのは、彼女の妹と腹心の部下だったからだ。

屈指の実力者の筈の二人は、画像の中で、犬の姿勢を取らされ、男達に背後からのしかかられている。精液でべっとり汚された顔はだらしなく緩み、瞳は虚ろだった。

「クク……コノ雌豚ドモ、スッカリ俺達ノチンポガ気ニ入ッテ、大喜ビダッタゾ……ギヒヒ……」

強化外骨格の中の顔は見えないものの、さぞ醜い表情をしているのだろう、と思わせる声だった。

（さくら……！　紫……！　もし私がいれば、こんなことは……でも……くっ……）

戦闘集団である対魔忍の頭領、アサギにとって、仲間の敗北や死は、受け入れねばならない現実だ。

しかし。

「チト手強イ雌ドモダッタガ……ギヒ、ヒヒ……ナアニ、学園ノ餓鬼ドモヲ殺スト言ッテヤッタラ、スグニ素直ニ股ヲ開イタゼ……グフフフッ」

五車学園の学生達はそうではない。今はまだ、護り育てなければならない未熟な存在なのだ。

「き、貴様らっ……くっ……!!」

半ば予期していたとは言え、学生達が捕虜にされたと聞いて、アサギの心臓が苦悩の鼓動を打つ。全身の皮膚の裏側を、後悔と憤怒が狂おしい虫のように這いずり回る。

「いいザマだぜ、対魔忍どもが……はははっ！」

さくらと紫の陵辱画像が何枚も映し出され、邪悪な観客達が下卑た声で快哉を叫ぶ。

そこに、雷電が攻撃を再開してきた。

ゴウッ……！

アサギは突撃を間一髪で躱す。油断ではない。一瞬、身体が不自然に硬直し、回避が遅れたのだ。

（アハッ、今のは危なかったわね♪）

どこからともなく朧の残忍な声が聞こえた。硬直は、明らかに催眠刻印による妨害だった。完全に彼女の動きを止めてしまうこともできる筈だが、そうせずに絶妙の一瞬だけ妨害するのがまた嫌らしい。

「くっ……惑わされてる場合じゃないっ」

奥歯を噛み締める。だが、次に映し出された画像はアサギに大きな衝撃を与えた。

（……っ!!）

映し出されたのは、五車学園の制服を着た一人の少女だった。アサギもよく知っている、快活で優秀な女学生で、異能に目覚めた対魔忍候補生でもあった。だが、その姿は尋常ではなかった。

「ン……コノ餓鬼カ……」

画像の少女の顔は土気色になり、生気が失せている。両腕とも血まみれで、肘から先がなかった。制服の腹から下が真っ赤に染まっていて、腹部大動脈から致命的な大出血をしていることは明らかだった。

「あ、貴女……っ!!」

それでも画像の少女は戦っていた。

「両腕ヲ切ッテヤッタノニ、無駄ナ抵抗ヲシヤガッテ……面倒ナ餓鬼ダッタゼ」

写真の中の彼女は、鬼神のごとき形相であった。目を異様にぎらつかせ、失った腕の代わりに白い歯を剥き出して刀の柄を噛み締めていた。圧倒的な強敵を前に、わずかの恐怖も躊躇もなく、生命の最後の一瞬を燃え上がらせていた。

「大人シクシテイレバ、イイ気持チニシテヤッタモノヲ……結局、首ヲハネテヤッタゼ。ギギヒッ」

ギリ……ギリギリッ……。

どこかで何かが軋む音がした。

──ああ、おお、あおぉぉぉ……子供達が、私の子供達がぁっ……！　殺すっ！　殺してやるっ殺す殺す壊す砕く滅ぼす滅ぼすっ滅ぼしてやる全てっ生ある者全てぇぇっ！　解き放て『私』をっ！　この悲しみを消し去らせろぉぉおぉぉっ……！

アサギの魂の奥底から、慟哭が響く。彼女の血の

中に封じられた、恐るべき『魔』だ。それは、育てきた学生達の運命に怒り狂っていた。制御不可能な怪物とは言え、『魔』もまた彼女自身なのだ。
　しかしアサギには今、己を『魔』に委ねる気はなかった。それは宿敵ブラックが『魔』を通じて、途轍もない災いを呼び出そうと企んでいるから、というだけではなかった。
（いいえ……これは人が戦うべき戦い。お前の出番ではないわ……）
　『魔』を抑え込みながら、アサギは刀の柄に目を落とし、くっきりと刻まれた歯形を再び見つめた。
「……最後まで見事に戦い抜いたのね、貴女。その無念、必ず晴らしてあげる」
　色のない炎が彼女の胸の裡を灼き焦がす。町を滅ぼされた悲しみだけでなく、学生達を殺された怒りだけでもなく、刀の主を同じ対魔忍と認めての共感がそこにあった。
（浩くん……力を貸して……）
　アサギはひび割れた漆黒の刀身をそっと撫でた。それから大きく息を吐き、刀を後ろ手に、腰を落として身構える。
「ギギ……犯ス……アノ餓鬼ノ代ワリニ、オ前ヲ犯シテヤロウ……ギギャヒィィッ……!!」
　装甲を軋ませて、雷電が飛び込んでくる。
　ドッ……
　アサギの意識が冴え渡った。観客達の喚きが低いうねりとなり、戦場がモノクロームに色褪せる。
　今度は回避せず、正面から雷電の頸部関節を狙って飛び上がる。しかし、標的が目前に迫った瞬間。
「っ！　またかっ」
　アサギの腕を一瞬の硬直が襲った。
（あーら、どうしたのかしら♪　アハハハッ）
　朧の妨害により、攻撃のタイミングを外されてしまったのだ。辛うじて動く足で雷電の腕を蹴り、さらに上へ飛ぶ。その位置からは後頭部の装甲の隙間がくっきりと見えた。同時に腕の硬直が解ける。
　アサギは、朧の性格と催眠刻印による妨害を計算に入れた上で、攻撃を仕掛けていた。
「ここだっ！」
　戦死した女学生の鬼気籠る刀を、雷電の急所目がけて突き立てようとして――。
（プッ、くすくすっ……残念でぇしたぁ～っ）
　彼女の腕が勝手に動いた。ひび割れた刀は、意志に反して、重装甲の頭頂部を力任せに叩く。
「なっ……しまったっ！」
　バギンッ！
　鈍い金属音とともに、黒い破片が飛び散った。長い刀身がくるくる回って闘技場に落ちる。
（あらあら、大ピンチね～アサギちゃん♪）
　どこからともなく聞こえる朧の声はひどく嬉しそうだ。絶妙なタイミングの妨害により、唯一の武器を自ら破壊させることにまんまと成功したのだ。
「……な、何てことっ……」
　アサギは折れた刀の柄を握り、呆然とした表情で着地する。
「ンギヒヒッ……残念ダッタナァ、対魔忍。幾ラ貴様デモ、コノ雷電ニ、素手デハ何モデキマイ？」
　強化外骨格はぎちぎちと装甲を鳴らし、嘲笑いながら迫ってくる。
「くっ……まだまだっ、これからっ」
　アサギは折れた刀を手に身構えた。だがその頬は強張り、瞳は混乱してふらつく。頬に脂汗が伝う。
「ひゃはははっ、馬鹿っ！　馬鹿だぁ！」
「もう勝負ついてるから」
　無惨な結末を期待して、観客達も野次を飛ばす。
「ゴフフ……ソンナ物デ、何ガデキル。サア、アノ餓鬼ノ代ワリニ、楽シマセテモラウゾ？」
　雷電が目の前に迫ったその時。
「これは……こうだっ！」
　アサギは雷電の胸元まで飛び込むと、装甲の首の隙間に折れた刀を突き立て、力一杯こじった。
　バキッ！
　鈍い音とともに、頭部装甲のロックボルトが折れる。そのまま、顎の部分を蹴り上げる。
　バカンッ……ゴトン！
　すると猛烈な異臭とともに、強化外骨格の頭部装甲が外れ、そのまま下に落ちた。
「その顔、やはりっ……」
　着地したアサギは、中から現れた兵士の頭に戦慄した。顔の右半分が青紫色に染まり、溶けかけたように変形していたのだ。
　変形部分には鱗や獣毛、昆虫の触覚のようなものまでが至る所に生えている。明らかに怪我や病気によるものではなかった。男の両目はどろりと濁り、それぞれがあらぬ方を眺めている。
「なっ……なんだありゃ……」
「化け物じゃないか！　どうなってんだ!?」
　観客達も、その異様さに騒然となる。
「フウ……久々ニ、俺ノハンサム顔ガ外ニ出タナ……グヒ、ゲヒヒッ……イイ気分ダ」
　雷電の中の兵士は、半ば魔物と化していた。その身体は、強化外骨格内部の生体パーツと融合してしまっているようだった。
『……ふむ、これは説明が必要ですな。よろしい、私、フュルストが解説しましょう』
　その時、アリーナに魔科医の声が響いた。
『雷電には魔界の技術が使われているのですが、これはまだ不完全で、時として暴走する危険性があります。彼の場合もそうでして、生命を救うには、私の魔科医術しかありませんでした。治療のついでに、次世代兵器に相応しいよう、パワーアップして差し上げましたがね。ク、ククッ』

雷電の動作や言動が異常なのは、魔物化で精神まで蝕まれた影響なのだろう。
（……救命手術なんて口実ね。最初からアイツは、雷電を魔物改造する気だった筈よ）
　人間だった頃から悪行を重ねてきたであろう、神田旅団の兵士に同情する気はさらさら起きなかったが、改めて魔族フュルストへの嫌悪感が、アサギの胸中にわき起こる。
「ギヒッ、ガヒッ……サア、続キヲ、ヤルゾ！」
　バカンッ……！　ズヌルッ……！
　強化外骨格の両腕の肘から先が、装甲ごと外れ落ちた。その開口部からは、もはや人の腕ではなく、太い触手が這いずり出てくる。
「ソラッ！　ソゥラァッ！」
　ブンッ！　ゴウッ!!
　両方の触手腕が交互に打ちかかってきた。アサギは斜めに跳んで躱す。だが、そこに。
　ドンッ！
　棒立ちだった魔物化雷電の本体が、何の予備動作もなく、いきなり体当たりを仕掛けてきた。
「なっ……ぐはっ！」
　五百キロ近い重量の突撃を回避しきれず、彼女は吹き飛ばされた。
（くっ……棒立ちから、いきなり突進なんて……どうなってるの……!?）
　辛うじて受け身を取ったものの衝撃を殺しきれず、彼女の身体は闘技場を滑って転がる。
「ゲヒァッ！」
　バシュッ……ギュルルッ！
　機会を逃さず、片方の触手腕が伸びたかと思うと、転倒したアサギの足首に絡み付いた。触手に並ぶ吸盤が戦闘服越しに柔肌にみちみちと吸い付く。
「そ、そういうこと……不覚だったわ……」
　見れば、もう片方の触手は、試合開始までアサギを拘束していた柱に巻き付いている。柱を支えに身体を引き寄せて、体当たりを仕掛けたのだ。
　その触手も柱から外れて、絡み付いてくる。
「あぐっ……くっ……」
　アサギの首をぐるりと巻き、乳房の間を通って脚まで降り、膝に巻き付く。もう一本の触手腕も同様に足首から膝へと巻き付き、そして、両膝を力ずくでMの字に開かせた。
「ギハ、ゲハ、グハハッ……捕マエタゾ！　雷電ノ前デハ、対魔忍ナド、タダノ雌ダッタナ……!!」
　獲物を見せびらかすようにそのまま高々とアサギを持ち上げて、半魔雷電は吠えた。
「おお！　捕まえた！　もう決まったな！」
「さっさとやれ！　早くやっちまえ！」
　いよいよの展開に、観客席がどっと沸き立つ。
「た、対魔忍を甘く見ないことね……うくっ……後悔したくないのなら……さっさと、勝負を着けたほうがいいわよ……」
「フホ……口先ダケハ、マダ動クノカ。ダガ……ククク、スグヒザマズカセテヤル。アノ雌豚ドモト同ジニナ……グギ、ギヒヒ……」
　半ば魔物化した兵士は、闘技場の上空を顎で指した。投影されている映像は、さくらと紫の陵辱シーンに戻っている。そして、異臭とともに舌を一メートル以上も伸ばしてきた。
　ずるり、ざさり……べちゃりっ、べちゃっ……
　おぞましい快美感が、忍服越しにアサギの身体の上を這い回りだした。同時に彼女を拘束している触手が乳房を、股間をぎちぎちと締め上げ始める。
（くっ……アレを、フュルストの触手調教を思い出してしまうっ……嫌、アレは嫌っ……ああ、駄目だ、考えるなっ……）
　締めつけられ、舐めずられる部位から広がる不気味な愉悦に、アサギは呻く。だがその意思に反して、先の触手調教の後遺症なのか、彼女の秘粘膜は早くも潤み始めている。
　ぢゅるるるっ……ざりざりっ……
　のたうち回る舌は、アサギの乳房の上に、尖った乳首を発見して絡み付いた。
「あうっ……く、うくっ……」
　舌の上に並ぶ無数の棘が布越しの乳首に突き立ち、ちくちくと疼きを与えてくる。
「ンン？　モウ乳首ヲ、オッ勃テテイヤガル。アノ雌犬ドモヨリモ酷イ淫乱ダ。ソレトモ貴様ラ対魔忍ハ、淫乱ナホウガ偉イノカ？　グヒ、グヒハハッ！」
　指摘された通り、この屈辱的な状況にあって、アサギの乳首は布越しでも分かるほど隆起していた。
「ふ、ふんっ……そんなことより、私の胸に夢中になって……拘束を緩めたりしないよう、気をつけることね……あひっ、ひゃぐぅっ……!!」
　アサギの虚勢は途中で悲鳴に変わった。
　ぎゅぢゅうぅっ……ぐぎゅんっ……！
　勃起乳首を、魔物舌が摘むように締めつけ、強く引っ張ったのだ。強烈な圧搾とともに無数の棘が海綿体に突き刺さる。鋭利な魔悦が、乳房全体を稲妻のように走り抜けるのを必死で堪えながら、アサギは触手の主を震える視線で睨み返す。
「くっ、かふっ……き、貴様を殺すなど、腕一本でも自由になればぃあっ、ぁひぁあぁっ……!!」
　みちっ、みりりりっ……ぎゅちゅちゅちゅっ
　中身をしぼり出さんとばかりに、触手は乳房を強く締めつける。吸盤達は吸い付き甘噛みしてくる。
「ギヒ、ギヒヒ……ドウシタ、最後マデ言ッテミロ。俺ヲドウスルンダ？」
「あくっ、貴様を倒すなどっ容易っぁぁあぁっ…噛むなっぁあっ噛まなれっっ、絞らぁぁ…!!」
　乳房から全身へと圧搾された快感が流れ出して、アサギの言葉を妨害する。

ルルイエ異本を調べ直したら
旧き支配者はこの奥の祠に祀られているらしいんだ
みんなの変身ブレスに使われているサンジュエルを使えば
スッ
それを呼び醒ますことが出来るんじゃないかと…
研究所の大人でも全ての解読は無理って言われてたルルイエ異本を読み解くなんて
さぁっすがハカセ♪
うりうり
――っ!!
ぬぁあっ
クトゥピンクはボクらの味方!
深淵戦隊クトゥルンジャー
～悍ましき触手寄生スーツ!!～
漫画/COMIC からすま弐式
古屋博士
みんなにはハカセとよばれている
櫻庭ミコト
クトゥピンクにへんしんするぞ
……
祠見つけたぞ!

ビヤーキー
ハスターぐんの
せんとういん
ハスター軍！
何故ここにっ!?
!!
みんな！
変身だ!!
おう!!
テケリ・リ
チェンジ!!
深淵戦隊！
クトゥルンジャー!!

いくぞっ!!
つりゃあっ!!
たあっ!!
ミコトっ!!
……っ!
…でよ…
…出でよ
ハイショゴス!!
クトゥルンジャーのスーツを乗っ取れ!!
なッ!?

んうっ!?
あっ…！
くぅ…うっ！
なッ…何なの
コレ…っ!?
スーツの中がっ…
ぞわぞわして…!!
動けねぇ…っ！
ハカセ…！
コレ…どういう
事なのっ!?
んはぁっ!!
ぼくも地球を守る
ミコトたちの
力になりたい…
と思って研究所に
協力してきた！
なのに…

ぼく知ってるんだ
だからって重要な情報は見せないようにしてるの…
っ!
それは…君の身に危険があったらいけないと思って…!
でもハスター軍は違う
旧き支配者の復活のためにぼくの能力を認めてすべての知識を揃えてくれるんだ
ぼくは識りたいんだ
宇宙の深淵を……!!
くあぁっ!!
ダメ…よハカセ…! キミは私たちレンジャーの一員なのよっ…!
…っあ… くっ…! あんなやつらに惑わされないで…っ!!
…ごめんなさい… もうみんなの仲間じゃないんだ…

…自分で
ブレスを外して
くれないなら…
ハイショゴス！
クトゥルンジャーを
苦しめろ!!
——っ!?
んんあああぁっ!!
ビクーンッ♥
やっ…いやあぁ…！
動い……て……
ひっ……っ!!
ヘンなとこ…
入って来ないで
…ええっ!!

ぎゅううう…っ！
ふうっ…ううう…!!
む…胸…えっ
気持ち悪い…いっ！
びくんっ
びくっ
ハスター軍に
教えてもらった
方法…
かなり効いてる
みたいだね…
っ…くぅう…っ！
ハカ…セ…っ…
ダメっ…それ…は
できな…っ!!
…ミコトたちが
苦しむところ見たく
ないよ…！
早くブレスを
渡して…っ！
いやあああっ!!

グラマトンに洗脳されたエルスとドーラ。
隠されたメイズⅡの封印を解くため、
スレアはふたりに新たな命令を下す。
それはイセリアとフェイエンの絆を壊す
裏切りの淫辱劇！
イセリア英雄戦記
the legend of the Iceerya war
第25話 淫祇邪教団の淫らな課略
小説 NOVEL／木森山水道（きもりやますいどう）
挿絵 ILLUSTRATION／牡丹（ぼたん）

I

「英雄王の末裔にして『イセリア英雄公国』女王アリオナに魔王陛下の子種を仕込み終えた今……」
「『淫祇邪教団』の使命は全メイズの解放と邪魔者の排除ですわぁ♪」
　魔王復活を目論む組織の女幹部のふたりは、『グラマトン聖教会』謁見の間にいた。
　この国の聖女でもあるエバは悠然と玉座に柔尻を置き、女錬金術師のスレアは隣でニコニコ控えている。
　本来玉座に座るべき老人は、広間の隅で虫みたいに蹲って動かない。
　すでに組織の傀儡となり果てている彼は、エバの命令でずっとそうしていた。
「賜りました新しい剣で『フェイエン武踏会』軍団長を捕らえる役目、このドーラ果たしてご覧にいれます」
「イセリア騎士団長のわたしも新しいランスでフェイエン軍を壊滅させ、邪魔な両国の友好を壊しますわ」
　ドーラは対魔王用宝具を使う先代のイセリア大騎士団長。エルスは魔王を倒した英雄の末裔にして、同国の貴族騎士団長だった。
　清廉で正義感の強いふたりも、組織の陵辱調教洗脳には勝てず、忠実な牝奴隷騎士になり果ててしまっている。
「軍団長を操れば、容易にフェイエン王に近づけましょう。あの方にはメイズⅡの場所を教えてもらいます」
　巧妙に秘匿されているために大体の位置しかわからなかったが、この段階に来た今、隅の老人のように洗脳してでも情報を得なくてはならない。
「この、優美なカールヘアを靡かせて頑張ってくださいねぇエルス」
　赤いハイヒールをカツカツ鳴らして近づいたスレアが、跪くエルスの長い縦ロールの金髪を愛撫する。
　初陵辱時に断髪してやった髪は、今回の策謀のために術で元に戻していた。
　睫を落として頬を染める彼女にニッコリ微笑み、続ける。
「戦場でのツマミグイも許可しますがぁ、お仕事の後はワタシとエバ様の洗脳強化ザーメンでねぎらってあげます♪」
　騎士の所作で膝をついていたふたりが同時にバッと顔を上げた。洗脳済みの証の暗い瞳が爛々と輝いている。
「クリオチ■ポでズコズコ♪　全部のアナにた〜っぷりドクンドクンです♪　大乱交大会も開きましょう♪」
「だっ、大乱交大会ッ！　この『淫祇邪教団の盾』は必ずや戦果をッッ!!!」
「く、クリオチ■ポでズコズコっ！　洗脳強化ザーメンをドクンドクンッ！　エルスも必ず成し遂げますわ!!!」
　ドーラとエルスの誓約は、喜悦たっぷりの上擦り声だった。
「洗脳はまず解けないでしょうが念のためです。備えてはおきましょうか」
　喜び勇む牝奴隷騎士らを見下ろしながら、エバはひとりごちるのであった。

II

　フェイエン武踏会最北のテェンヘイ村。そのさらに北に広がるティオウ平原に、国軍が集結していた。
　弁髪や団子形の髪留めをする、武闘着姿の『ブジュツ』家の精鋭たちは、すでに配置についている。
「進撃中のグラマトンは約三千。戦略目標はテェンヘイを橋頭堡にするというところか……魔物なんぞも連れてくるなど、何が聖教会だ！」
　口髭と顎髭を蓄えた、虎みたいな偉丈夫が唾を飛ばして怒鳴り散らす。
　鍛えた金属小片を鱗のように並べる鎧も、長く太い戈も数十貫ある規格外だが、軍団長の目印でもある。
「うちはイセリア第七騎士団の皆込みで千人だけど、アレがあるから楽勝だねぇ。そうだろ瞬電司令」
　あははと陽気に笑う若い女は、人懐っこい面差しをしている。
　長い髪を腰で結わえ、民族衣装のチャイナドレス風の道着を着ていた。晴天の微風でスリットが靡く度、スパッツの美脚が覗いている。上腕で輝く腕輪は軍団長の証だった。
「異邦人など数に入れるな愛夢」
「四半里先の白鎧連中を視認できるのは、彼らの魔法のおかげじゃないの。国がヤバい、王女様が避難してくるって時に、古い命令を守って付きあってくれてるのもありがたいもんさね」
「フンッ……さて、そろそろか」
　瞬電の号令で最前列の軍団員が動く。
　腰だめに構えられた個々人の拳が、鮮やかなオーラを放ちだす。
　陣に紛れる風に待機していた第七騎士団員も、全員魔法を唱え始めた。
　特殊な防御陣形である『祝福の風』を展開する敵の行進音は、三層の横陣形を作る友軍に迫ってくる。
　両軍とも弓も魔法も届かない距離。数の差もある。勝利を確信しているのだろう、進軍は緩慢で――、
「ん……な、何だあれは!?」
「瞬電様、我らの頭上に氷塊が！」
　突然現れた氷塊は、落ちれば全滅必至の規模だった。非常識な射程といい、敵には世界レベルの術者がいる。
「あたしが行きます。アレの発射の号令は小娘なんかにゃ似合いません……伏撃もあるでしょうしね」
「戻れよ愛夢。命……友として頼む」
　虎顔の真摯な目に笑みで応え、落ち始めた巨氷へ飛ぼうとした刹那、横から魔法をかけられた。『サンク・ブレッシング』。心身強化の術だ。
「ありがとう、礼は閨でしようかね？　イセリアの女ほど器量よしじゃないけど、それなりに心得は、ね」
　肉棒を扱く仕草をしてみせると、魔法をかけてくれた第七騎士団の顔馴染みは、夕焼け空のように赤面した。
「あはは、若い若い。ま、気が向いたら言っておくれよ。それじゃっ」
　バジィィンッ！
　草の大地にブーツの足形を残し、愛夢は天高く飛翔した。

＊

オオオオオオオオオオ！
氷塊を砕いた愛夢に沸く友軍。
「フッ、当然の結果よ……さぁ、愛夢に続け！　食らえグラマトン！　これが我らの力……てェッ――！」
ズガァァァァァァァァン！
百人のイセリア軍から『サンク・ブレッシング』を受けた三百人が、同時に『気』の砲弾を放つ。
　一発一発が合わさり形成された巨大な拳が、大地をえぐり突き進む。
「これぞフェイエン軍団術秘奥、千歩師団粉砕拳！　……むぅッ、何奴！」
　敵の先頭に赤毛の女が進み出た。
ブオオオオオオオオオオオオ！
高く掲げた柄の先から刃が迸る。
下ろされた赤黒い力場の刀身は、街すら両断しそうに太く長い。
「読まいでかッ、グラマトン！」
巨氷と超剣で同時攻撃するつもりだったのだろう。挟撃は常套戦法だ。
備え――気は練り終わっている。愛夢が片方を引き受けた分余計にだ。
「舐めるなよ……猛虎強襲刃ッ!!!」
ドバァァァァァァンンン！
戈から放たれた気の力が巨大な虎の形を取り、迫る刃に牙をたてる。
「むぅぅぅ……ぐぅぅぅぅぅ！」
　赤毛の刃と巨拳負う虎は拮抗。弱みを見せれば押しきられるだろう。
「貴様なンぞに負けるものか！」
　幼い頃から血反吐を吐いて心身を鍛えてきたのは何のためか？
　すべて、祖国フェイエンを守るため。今こそ力を示す時なのだ。
「ウオオオオオオオオオオ！」
　気の力を爆発的に放出し。
　砕け散る、忌々しい刀身。
　余勢が敵陣を襲い、吹き飛ばす。
　剣、軍馬、軍旗、国旗、白鎧。いくつもの遠い悲鳴と怒号とともに、敵軍に属する無数のものが、綿毛のように飛び散っていく。
　損耗率はざっと二十パーセントか。もう数射で撤退に追い込める。
　一気に距離を詰められたら苦しくなるが、向こうは完全に浮き足立ち、烏合の衆になり果て、つまりは愚鈍な的でしかない。戦の前の見通し通り我が軍は完勝するだろう。
「ガーッハハハハ！　見たか奸賊、これが我らの力――何!?」
　爆風で巻き上がる土砂の中から。
　赤黒い何かが躍り出た。
「セフンナ・セイバー!!!」
　象のように大きい力場の固まりは、突風染みた速度で友軍に迫り、陣形を縦横無尽に裂いていく。
　あっという間に陣形は瓦解。狼狽(うろた)えていた敵軍は、矢尽き剣折れた兵士に止めを刺す勢いで、一気に駆けてきていた。
「むぉっ……身体が動かんッ！」
　瞬電も攻撃を受けていた。鎧に当てて流したのだが、どういうわけか、手足が鉛のように重くなっている。
「ふぅっ……弱いフェイエンの軍隊にしては頑張りましたわね」
　数瞬で戦況を覆し、自分も動けなくしたのは、イセリアの鎧を着た女だ。
　手を伸ばせば届く距離から暗いアメシストの瞳で瞬電を睥睨(へいげい)しつつ、縦ロールの金髪をふわさぁっとかき上げる。
「え、エルス団長？」
　側の第七騎士団の男が呟いた。
「あのエルス＝M(マイハ)＝アムデルトか！　貴様、どういうつもりだ！」
「あなた、軍団長の瞬電ですわね？　顔だけでなくオツムも足らないでいらっしゃること」
「イセリアはグラマトンと同盟を結んだの。こう言えば十分でしょ？」
　エルスの隣に来て続けたのは、あの超長剣を操っていた赤毛だった。
「同盟なんて聞いてないぞ……あんたは城のコック、なんでここに」
「私はドーラ＝ウォールドラゴン。今はコックでなく、騎士なの」
　呆然とする第七騎士団の男に、ドーラはウインクして微笑んだ。とても親しげな仕草だった。仲間にしているとしか思えないほどに。
「……そういうことか！」
　ドガァ！
　ドーラに鼻の下を伸ばしていたイセリア人を、激情任せに殴り飛ばす。
　見れば、肉薄するグラマトン軍の先頭にはイセリアの鎧が並んでいた。開戦前には見なかったが、予備戦力として遅れてきたのかもしれない。
「瞬電、何てことするんだい！」
「イセリアは敵だ愛夢、暴れ出す前に、我らと来た連中を始末しろ！」
　降り立った愛夢の悲鳴を無視し、大気を切って戈を振るう。友軍を縫って飛ぶ斬撃が、味方だったイセリア軍人を吹き飛ばす。
「第七騎士団を攻撃した報い、たっぷり味わわせて差し上げますわ！」
「さっきの借りを返してあげるっ」
　背後のドーラに手足を斬られた途端、傷はないのに再び鉛の重さとなった。
「しまった！　おのれぇっ」
　ドグァ！
「諦めなさい、弱小軍団長さん」
　胸元へ放たれた蹴りは軽かった。しかし、偉丈夫の身体はあっけなく仰向けに倒れ、戈も転がる。
　ザシュザシュッ！
　武将の重い鎧を剣で裂き、剥き出しにした下腹部を見て唇を舐める。
「何をする貴様！」
「いいチ[redacted]ポね……楽しめそう」
　白鎧や白銀鎧が周囲を囲み、自分と瞬電を隔絶させる障壁となっているのを確認すると、ドーラは自身のボトムの腰まわりも綺麗に切り取った。
　若々しい外見とは裏腹に、厚ぼったくて魅惑的な秘唇が露出する。
　雪肌も形も綺麗な桃尻が解放され、尻肉全体がフルルンと波打った。
　胸当てのカップが外されると、熟れた乳房が転げ出た。左右に開き気味でやや垂れてはいるものの、大きな釣鐘型で染みひとつない生乳は、触れたく

著者近況
本誌のご購読誠にありがとうございました。フェイエン武踏会編（筆者自称）の幕開けです。どこまで続くかはお客様方のご投稿、ご投票次第。第十五話と同じく今回も小分けにしてみました。ごゆっくりお楽しみください。アンケート葉書（本誌巻末綴じ込み。郵送料無料）などにご感想をいただけますと幸いです。

なる色気を醸している。

ほどよい大きさの乳輪も、小指の先のような乳首も鴇色で、朝露に濡れた果実みたいに瑞々しい。

「み、自ら大事な部分を……婦女子が隠すべきところを露出する、いや見せつけるなど何を考えている！」

「イセリアの女騎士はねぇ、倒した男を犯すのが大好きなの……んっ」

筋肉質の男腰に跨がったドーラは、プニプニと柔らかい秘唇で、ペニスを仰向けに押し倒した。

「だから、素敵な快楽をくれるグラマトンと同盟を結んだのよ、うぅン」

心地よい温もり、女の軽い体重、肉棒に吸いついてくる餅肌をなすりつけながら、女腰を前後に揺する。

「うぅっ、はぁ、そこまで腐った国なのかイセリアはっ、むぉぉ」

最低な敵の女にされているというのに、武将の分身はどんどん硬く大きくなり、甘い痺れが満ちてゆく。

ヌチッ、ヌチャッ、ニチチ……。

「な、ぬ、濡れているのかっ」

「うんっ、そういうお前も、敵にスマタされて勃起してるじゃない」

豊胸をゆさゆさ揺らしながら見下ろしてくるドーラの喘ぎが艶を増す。

顔に吹きかかる吐息は熱っぽく、甘味料の甘さを孕んでいた。

肉棒の裏筋にのしかかってきている秘唇はどんどん蜜を吐き出し、勃起に絡ませ、全体を照り光らせていく。熱感たっぷりのぬめり淫唇で扱かれる快感は、下半身まで痺れさせる。

「これは……く、くそぉッ！」

「アハ、もうバッキバキ！　倒そうとした女のオ■ンコで擦られてるのに恥ずかしくないの？　この変態！」

「貴様、むぉっ、どこまで侮辱する気だ！　わしは変態などではないっ」

「へぇ……なら確かめてあげるわ」

蜜糸を引いて腰を上げるドーラ。

怒張と化した瞬電の逸物は、圧迫がなくなるや節操なくピンと起立した。

敵の女は勝ち誇るように微笑しながら、女蜜で濡れそぼつ勃起を摘む。

「そ、そこは……！」

「ここは変態度測定穴よ。まともなら、逆レイプアナルセックスでなんて感じないわよねぇ、ぁンっ」

ジュップ……ジュブ～～～～！

くぱぁくぱぁと開閉を繰り返す肉畝を見せつけながら、ドーラは肛門に亀頭をくぐらせ、直腸で竿を抱いた。

「う、ウオオオオオオ！」

虎顔の武将には相応しくない情けない雄叫びが木霊する。

(何だこれは……っ)

尻性交はともかく、女性経験は多い瞬電にも初めての感覚だった。

「あんっ、ウフフ、お前のチ■ポ、私の直腸をぎゅうぎゅう広げているからわかるわよぉ、気持ちよさそうにビクンビクンしてるの、私のお尻全部を揺らしているわ、んんっ」

直腸粘膜が肉棒全部に密着してくる。根元の締まりが特に強い。熱い体温と肉の重みを全体に染み込まされていると、腰が不様に浮いてしまう。

仄かに硬い感触は、膣では味わえない甘美で――、

（あ、相手は国を乱す奸賊だぞ！）

自分は異邦人を嫌っているだろうが。連中は災いの種でしかない。フェイエンの人間は平和に独立しているのに、他国が絡んだ途端に乱れる。幼少から見てきた現実だろう！

ヌジュッ、ジュズッ、ニジュ！

「あハァ、チ■ポすごくビクッてるわ、敵とのアナルセックスなのにギンギンに勃起してるぅ」

こちらと勝手に手を繋ぎ、魅惑的な乳房と綺麗な赤毛を揺らしながら、イセリアの元大騎士団長は下腹にビタンビタン柔尻タブを叩きつけてくる。

「カリで私のお尻の中擦ってぇ、ますます大きくなって、アハハハ、もっと計ってあげる、お前がどこまで変態か、このドーラが確かめてあげるわ！」

（くそぉッ……手足だけでなく魔羅までわしを裏切ろうというのか！）

敵の女の尻孔に捕らわれた逸物は、中でどんどん興奮している。

ヌルつく直腸粘膜とカリが擦れると、ペニスが芯から熱くなり、心臓がバクンバクン高鳴ってしまう。

「あン、あぁンッ、先走り汁出てきて直腸熱いわっ、信じられない、お尻なのよ、アナルセックス！　アブノーマルプレイ!!　軍団長なのに!!!　どこまで変態なのこの虎顔は！」

「うぅ……瞬電司令……」

「司令まで……もうだめなのか」

敵のバリケードの外では、フェイエン軍団員たちも倒されていた。男は傷だらけで這い蹲り、女は軽傷だが犯され、咽び喘いでいる。

愛夢さえも敗れていた。見世物みたいにエルスと魔物に陵辱されている。

「お、おのれ……おのれぇぇ」

怒りがグラグラ煮え滾り、胸の中を焦がしているが、重くなった手足にはどうしても力が入らない。

意志に反して魔羅もどんどん熱く硬く重くなり、蕩けるような快美の固まりと化している。

腰の奥からは狂おしい射精衝動がこみ上げてきていて、変態と罵ってくる敵の尻穴に精液をぶちまけたがる肉棒は、ビククと何度も突っ張っている。

「この軍団長チ■ポ、先走り汁だけでなく、中年精液までドビュりたくて暴れてるわ！　私の肛門の奥でよ！　お尻で犯されてる自覚ないのかしら!!」

武将の股間と尻タブを密着させて腰をグラインドし、射精欲望を煽るドーラに、男たちが近づいてきた。

「ドーラ様よぉ、俺らも頼むぜ」

「同盟軍のオレたちもよろしく」

イセリア軍人と、グラマトン軍の男らは、すでに股間を裸にしていた。

「ぅン、いいわ、逆らう奴はもう近くにいなそうだし、仕事をしたご褒美よ、ギンギンチ■ポにしてあげる、チュッ」

汗臭さ漂う逸物に紅潮顔でかぶりつ

著者近刊『敗北の女将軍レイア　淫魔が堕とす気高き王族母娘』好評発売中！

くドーラ。乳房や素肌に亀頭を擦りつけられても、淫蕩な流し目を送るだけ。拒絶する素振りはない。
「こんな売女にわしの力が、フェイエンが敗れたというのか、むおオオッ」
屈辱と絶望で頭がクラクラする。
しかし、尻で犯される股間からはいやらしい水音が鳴り止まず、分身も射精衝動でいっぱいだった。
「ほら、お前は私のお尻の中でくっさい精液ぶちまけなさい、チュプジュルル、最低の変態だって、お前の弱い仲間に私が教えてあげるから！」
今までよりも腰をくねらせ、大きな円を描き始める。
男たちの先走り汁に塗れる豊胸は、鴇色乳首をギチギチに勃起させ、ゆったりのの字を描いている。
肥厚した秘裂からは、止め処なく愛液が流れていた。瞬電の下腹部で泡立ち、牝芳香が匂い立つ。
（わしは変態などではない……断じて、むぉ……お、おオオ……ッ！）
幾ら心で叫んでも、奥歯を噛んで射精に耐えようとしても、豊胸弾む女騎士の媚体の魅力と、直腸の摩擦快楽が勃起をピーンピーンと突っ張らせる。
「く、くぉぉぉぉぉぉぉッッ！」
勝ち誇った風に口角を吊り上げたドーラは、今度は前後に腰を振り出す。
射精したくて疼ききっている肉棒の表面全部が直腸粘膜と擦れ、肉の芯から揺す振られる快美振動に襲われる。
強烈な快感電気が何度も肉棒を駆け、涙のように止まらない先走り汁はどんどん白く濁っていき——、
ビュククク！　ビュルビュルゥ!!!
してはいけない射精だというのに、熱く重い濁液が肉棒内部を走り抜け、尻の中で炸裂する解放感はたまらなかった。意志に反して鍛えた腰が何度も浮き、その都度女の尻タブに押し戻される。
「ンン〜〜〜！　……っくくくく」
一瞬、うっとり睫を落とし、心地よさそうに眉根を寄せたドーラだったが、やがて含み笑いし始めて——、
「とうとう出したわ！　こいつ私のお尻に、熱くて濃いのドビュッってる！　あン、フェイエンの弱者ども、お前たちの変態軍団長は、私のお尻でイかされてるわ、イセリアの淫乱女騎士には、誰も勝てないのよ、アハハハ!!!」
「くぅ……お、おのれぇ…………」
ドーラの嘲笑は悔しくてたまらないが、彼女の腰振りと尻穴の蠢きには勝てない。そうして軍団長瞬電は、屈辱の搾精を受け続けるのであった。

＊

愛夢は巨氷塊にグングン迫る。
サイズ比は、蟻と岩石ほどか。
凍えそうな冷気も士気を挫く。
怖くないと言えば嘘になるが、
「ぶっ壊してやるさね」
自分がやらねば仲間も死ぬ。
イセリアの連中も。
保守的な瞬電は嫌うが愛夢は違う。
付きあっているうちに、その実直さの根元が女王への忠誠であることがわかると、さらに親しみを憶えた。
あたしたちが宝仙（ホウセン）王を慕い、平和のために尽くすのとどこが違う？
その意味で同士なのだ。彼らとは。
「いくよっ！」
ここに至るまでに練ってきた気を利き足に込める。かけられた魔法の効果もあり、独りの時より力強い。
「天覇翔竜脚！」
蹴り足から滲む気が、昇竜の顔を形成し、眼前の目標に襲いかかる。
グガァァァァン！
ブーツの足が落花生形の氷塊に埋まる。正中線に沿って走る亀裂。
ビキビキビキビキパァァァァン！
縦一文字、放物線状。無数のヒビを生んだ氷塊は砂粒大に瓦解した。
地上へ落ちていく愛夢。
その途中、瞬電らの信じがたい会話が聞こえてきた。降りたつと、彼に殴られたイセリア兵が飛んでいった。
「イセリアは敵だ愛夢、暴れ出す前に、我らと来た連中を始末しろ！」
さらに別の者を吹き飛ばす瞬電。
司令の彼にならう者が出ている。
「待て、オレたちも何が何だかうぁ」
「くっ、やるならやるぞ！」
味方のイセリア第七騎士団とフェイエン軍が同士討ちを始めていた。
聖教会、別のイセリア、魔物の混成軍がそこまで押し寄せているのにだ。
「このままじゃ全滅だ……ハッ！」
ズバババババ！
「隙だらけですわ、軍団長愛夢」
エルスだった。ランスに貫かれた両手足が火照り脱力していく。
「何だいこれは……くぅっ」
刺された身体に傷ひとつないというのもわけがわからない。
困惑の愛夢を再度ランスが襲う。
ビリィィ！
「クッ、何をするんだい！」
今度は道着の前布が切り裂かれた。スパッツの秘裂にも切れ込みを入れられ、両開きの窓のように開いていく。
周囲には自分らを囲む男の敵兵がいると言うのに、女軍団長の肉づき薄めの——開花を控えた若い蕾のような陰裂が露出してしまう。
ビリリリッ、ビリリリリリッ！
さらに、『武』と書かれた道着の身頃を、ブラジャー代わりのサラシごと正中線に沿って切り裂かれた。
ブルルルンッ！　ブル、ブルル！
「少し開き気味ですけれど、釣鐘みたいに前に突き出て……ウブなオ[redacted]ンコともども美味しそうですわね」
汗で煌めく黄土色の乳房が転げ出て、布切れが舞う中揺れに揺れた。
許した相手にしか見せない女の部分。その二箇所も戦場で暴かれた羞恥と屈辱に顔が熱くなるが、
「あ、あんた、いったい何を……！」
エルス自身も脱ぎ始めた。胸を隠す鎧も衣類も剥ぎ、美峰乳を露出させる。
透き通るような肌質。絶妙なサイズの乳輪。小指の先のような鴇色乳首。

たわわな乳果の上下左右は溜め息の出る曲線で少しも垂れていない。
　ビリリリリ！
　イセリア紋入りの前垂れを放り捨て、タイトスカートを細腰までたくし上げると、黒ショーツを毟り取った。
　同じ年頃のはずなのに、秘唇は格段に円熟していて厚い。なのに肉ビラのはみ出しはなく、股間のどこの肌も透き通るように美しい。だが、
「何で……男のものが……！」
　陰核の辺りから勃起ペニス。
　挿入されたら充填感も被征服感も忘れられなくなりそうな長太さ。
　キノコみたいにカリ高な逆三角亀頭は、ヌラヌラ赤桃色に光っている。
「グラマトンの術者様が、興奮するとクリトリスがペニスになる魔法をかけてくださりましたの。んっ」
　指抜きグローブのしなやかな手で男顔負けの勃起を扱き、見事な豊胸を揺らしつつ、エルスが迫ってくる。
「まさかそれで……あたしを……！」
「精根尽きるまでイかせた後は、他の場所で、あン、フェイエンを裏切りたくなるまで、セックスの悦びを教えて差し上げますわ。ウフフ、さぁ、あなたもコチラにいらっしゃい、愛夢」
　スリッ……スリリ……スリィ。
「はぁ、や、やめろぉ……んんっ」
「ンフ、なかなかいい感触ですわ」
　握るペニスの先端で、エルスは破れスパッツの秘裂をなぞってきた。
　浅い谷間を焼鉄串染みた熱と硬さ、いやらしい弾力が何度も往復し、
　グニィ、グニグニ、ムニィィィ。
「ぅあああぁ、な、何をっんん」
「ふぅ、あン、ご覧になればわかりますでしょう？　はふ、あなたとオッパイ合わせをしているのですわ、ぅふん」
　向かいあう愛夢の背中を篭手の腕で抱きしめながら、乳房同士を押しくら饅頭させてくる。
　ともに弾力の強い乳質ではあるが、エルスのほうが二回りは大きいせいで、愛夢の胸はほとんど飲み込まれてしまっていた。
（チ■ポでアソコを擦られながら、胸を押しつけられるなんて初めてなのにっ……なんで気持ちいいんだ……！）
　一往復される度に、未成熟な肉畝が体温を上げ、甘い痺れに見舞われる。
　乳房に伝わってくる相手の優しい体温も心地いい。強く抱きしめながら背中で円を描き、密着する美峰乳でこちらの豊胸を根元から捏ねてくるのも、乳肉全体が揉まれている風な快感で、胸双娘は芯から火照ってくる。
（あッ、すごい……う、上手いっ……アソコも胸も切なくなって……え、エルスのが欲しくなってきた……だめだ、流されたらっ、あぁ、でも）
　胸の快美と秘唇の悦楽が双方を燃え上がらせている。意識が白濁し、女軍団長の目元が力なく泳ぎだす。
「ウフ、乳首をコリコリにしてらっしゃるだけでなく、オ■ンコもヒクヒク仰ってますわ、んッ、お汁も出て、いやらしいですこと」
　秘唇を擦るクリペニスの先端に、とろみ汁が絡みだしていた。戦場には場違いな甘酸っぱい香りもくゆる。
「違うっ……あたしは……はぅ」
「嘘つきはわたしのクリオチ■ポで、素直にさせてあげますわ、ぅンン！」
　先走り汁を垂らし始めた肉棒の先を、ヒクつく秘裂に軽く埋めると、一気に腰を突き出すエルス。
　ジュブッ、ジュブブブブ!!!
「ひぃっ、いヒィィッッッ！」
　目を見開いておののく愛夢。これまでの男性経験のすべてを凌駕する、圧倒的な異物感が腹に満ち、子宮口にまで密着している。
「はぁ、はぁン……く、くぅッ」
「あン、このブジュツ家オ■ンコ、熱くてギュウギュウ吸いついてきますわ、快感ですのぉン、ンんん～～ッ」
　ヌジュッ、ニジュッ、ジュズ!!
　背中を抱き、乳房同士を密着させ、縦ロールの金髪を揺らしながら、エルスは前後に腰を振っている。
　発情させられていたせいで、巨根の激しい抜き差しも悦びでしかない。
　火照り疼く膣は、カリに擦られる快感と、熱く硬化した肉幹の圧迫甘美を隅々まで刻まれ、子宮口も女騎士に突き上げられる悦楽の味を占めていく。
　膣も最奥も憎いペニスに吸いつき、うねっている。媚肉総掛かりでしゃぶられる肉棒はますます熱く硬くなり、その脈動は身体の芯にまで響いている。
　女壺もクリペニスも互いの興奮を伝えあい、淫らに昂る一方だ。何もかも放り出し、エルスに迎え腰を打ちたい衝動に駆られる愛夢。
（だめだ、あたしは軍団長なんだ、こいつに犯されてるんだっ、快感に流されちゃだめなんだ……ッ）
「愛夢団長……うぅ……団長まで」
「イ、イヤァ、助けて愛夢様っ」
　敵に倒され、犯される者が周囲にいるのに屈服するわけにはいかない。
「ふっ、あン、あンッ、あ、あら、お前も混ざりたいの。よろしくてよ」
　夢中になって陵辱しているエルスが、金髪の中から小瓶を取り出し、愛夢の背後に放った。
「はあはあ、なっ、ぅうあぁっ」
　背後にいたのは身の丈八尺はある狼男タイプの魔物『戦狼』だった。
　筋肉の発達具合はミノタウロスよりずっと上。鍛えられた膂力（りょりょく）の戦闘力が凄まじい種族だ。
　戦狼はエルスの小瓶の中身を、そそり勃（た）つペニスにかけていた。
　ローションかオイルらしい。全体的にかけられた粘液は、異形の肉棒に絡み、ヌラヌラ光らせている。
「ま、まさか嘘だろっ、ンあ～ッ」
「二本差しは気持ちよくってよぉ」
　ビリリリリリ！
　魔物はスパッツの肛門部分を破ると、女ブジュツ家の括れ腰をガッシリ掴み、すぐさま逸物を捻じ込んできた。
「やめ——ひぃあ、あガァァアア！」

ジュブブブ、ジュッブ〜〜〜！

エルスの巨根に勝るとも劣らぬ圧迫感が、肛門も直腸も魔物ペニスの形にグイグイと広げきった。

牡棒に宿る燃えるような体温と、逞しくていやらしい脈動が、肛門の奥の肉道に染み込んでくる。

「はぁぁっ、はあああ……！」

「裂ける心配はいりませんわよ？　戦狼のオチ■ポは穴に合わせてサイズが融通しますの。ンっ、ンっ、ほら、気持ちよくなってきましたでしょう？」

ジュリュッ、ズリリ、ジュボボ！

「はあン、お尻に魔物オチ■ポがある分、クリオチ■ポが締まって気持ちいいですわぁっ、あふゥン、あぁ、キツキツで最高ですわぁ〜〜〜！」

エルスとしゃがみ加減の戦狼は、息を合わせて腰を振る。

一方が突けば一方は引き、同時に突き上げ、同時に抜くこともする。

ゆっくりした抜き差し速度も、性感帯を探るような注意深さも、探り当てた後のしつこい責め立てぶりもそっくりだった。

（アナルセックスは初めてなのに、くぅ、相手は魔物ッ、ああァ、前と後ろで連携されると……ぅああ！）

見た目は自分勝手に犯しているようだが、ふたりのやり方からは、敗北した女ブジュツ家軍団長をよがらせようという意志が感じられる。

巧みな二本差し責めを受ける膣も直腸も、燃えている風に熱くなっている。甘ったるい痺れでいっぱいになり、心臓が甘美に早鐘を打つ。

「俺も混ぜろよ女騎士さんよぉ」

「ブヒッ、ブジュツ家女ブヒ！」

グラマトンや他の魔物、見知らぬイセリア軍人が集まってきた。

「あン、あン、よろしくてよっ、皆でこの女団長で楽しむのですわ、あぁン」

許可を得た男らも魔物どもも、思い思いに勃起ペニスで楽しみ始める。

エルスの髪に巻きつけて扱く者、露出する柔肌に擦りつけ、先走り汁を塗りたくる者。

「い、いやぁっ、やめろぉ……お、おホォォオ、い、イセリアァ！」

愛夢も同じだった。ムチムチと艶めかしいスパッツの太腿や、スラリとした美脚、脇腹などが狙われて、汚根のにおいと感触を刻まれる。

「このチャンス、逃すものか、はぁはあ、愛夢団長の脇腹、硬いけど柔らかい、気持ちいいっ、うおっ、イクっ」

氷塊を砕く時に魔法をかけてくれた男もいた。懇意にしていた別の第七騎士団員も。皆夢中でペニスを擦りつけ、汚い先走り汁を塗ってくる。

（そんなっ、素直に言ってくれたらあたしは受け入れたのに……こんな形で欲を満たそうとするのか！）

本当にこちらを仲間だと思っていたら、陵辱に参加するわけがない。

（瞬電の言う通りだっ、イセリアは敵だったんだ、味方のふりして裏切る気でいて……くそ、クソ！）

自分の不明と、抵抗できない悔しさで胸が張り裂けそうになる。しかし、

（く、悔しいっ、馬鹿にされたのもだけど、ああっ、か、感じるのも屈辱だぁっ……こんな、犯されてるのに、辱められているのにぃ、どうしてあたしは、こんなに感じるんだぁッ……！）

前後の穴をすっかり蕩けさせられて、下拵え（したごしら）が済んだ今、身体の芯から揺す振られる勢いで突き犯される前後の穴が、グチュグチュパンパンいやらしい音を響かせている。

汗や牡汁で濡れる豊胸も、乳肉と腫れ乳首が隙間なく密着するエルスのそれと擦れ、捏ねあって、チュクチュク卑猥な水音を立てていた。

胸元と秘部の快感だけではない。いやらしく脈動する亀頭を、太腿や脇腹、身体中の素肌に擦りつけられ、先走り汁のヌメリを塗りたくられていると、背筋がゾクゾクしてたまらない。

「はぁぁ、はふぁ、い、イセリアぁ、許さないからなッ、ンンン、絶対ぃ」

「ホーッホッホッ、イキますわよ愛夢、その許せないイセリアの騎士団長が膣内射精して差し上げます、ンンッ、わたしの精液、とっても熱くて濃いですの、一度注がれたら忘れられませんわよっ、あン、あンッ、ン〜〜〜！」

尻孔の戦狼の肉棒もギチギチに張り詰めていた。痙攣して粘膜を揺す振ってくる。頭上でハッハッと切迫した息遣いをしているのを見るに、魔物も射精寸前なのだろう。

「いひぃ、お、おほぉぉぉ、だ、出すなぁ、射精っするなッ、ンアア！」

犯された上に体内射精。何としても回避したいが、力の抜けたグローブの手でエルスを押し返そうとしても、彼女はビクともしない。

「無駄ですわ、あぁン、出ますわ愛夢っ、フェイエン軍団長のオ■ンコにぃ、イセリア第三騎士団長のエルスが射精いたしますわァ〜〜〜！」

背骨ごと強く抱きしめられた。胸も股間も水音とともに潰れあう。肉づきで劣る愛夢の肉畝は、胸元同様飲まれ、

「はぅうううンンン〜〜〜！」

「ルォォォォオンンン〜〜〜！」

ドグゥ、ドブブブブブブ!!!

エルスも戦狼も嬌声を張り上げた。

ペニスの穂先を子宮口と直腸の深奥に食い込ませ、汚らしい熱粘液を放出している。

戦狼は歯を食い縛り、エルスは顎をはねさせた。上品な口を引き結び、気持ちよさそうにギュッと瞼を下ろしながら欲望の汁をぶちまける。

「んあぁああ〜ッ！　な、なか、りょうほう、あつぃぃ、ンあああ！」

膣の粘膜も、直腸の粘膜も巨根の射精振動で揺す振られる悦楽と、マグマのように熱く粘い牡汁で穢され尽くす背徳快感を刻まれて、愛夢もブーツの足指を丸め、背伸びした。

ビクゥッ、ビクビクビクビク！

空を向いて目を見開き、大口を開け、舌をはみ出させる愛夢。はぁはぁもれ

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/